

昭和三十五年度

財團
法人

東洋文庫年報

東洋文庫

昭和三十五年東洋文庫年報

目次

一	東洋文庫の生れるまで(四).....	石田 幹之助.....	一
二	昭和三十五年度に於ける東洋文庫.....		四
	(附)財団法人東洋文庫創立三十五週年に寄せて(續).....	G・トゥッチ	五
三	職員.....		五
四	事業.....		三
1	刊行圖書.....		三
2	講演會.....		三
3	談話會.....		六
4	展示會.....		六
5	圖書收藏・閲覽.....		六
6	資料複寫.....		三
7	情報連絡.....		三
五	研究活動.....		三
1	研究者養成.....		三

2	機關研究	二二
3	職員の研究業績	二三
4	各種研究室・委員會	三七
	東洋學連絡委員會	三七
	敦煌文獻研究室	三六
	宋代史研究室	三九
	明代史研究室	三〇
	清代史研究室	三一
	近代中國研究室	三一
	近代日本研究室	三三
	中央アジア・イスラム研究室	三四
	チベット研究室	三四
	南アジア研究室	三六
附	東洋學術協會	三七

東洋文庫の生れるまで (四)

石田 幹之助

以上述べました所でモリソン文庫が北京から東京へ移された筋道と、東京着と殆ど前後して降つて湧いた水害事件といふ一つの山を越えた所までとをドラドラと申述べたわけでありまして、文庫の *Vorgeschichte* もその第一期を終つたことになりしますので、一應この邊で打切つて然るべきであります。文庫から頂いた題目は財團法人としての今日の「東洋文庫の生れるまで」といふことでありますので、關東大震災と公開の準備、新館の建設・開館といふ、もう二つ山を越えなければなりません。一ト山ニタ山三山を越えてやつと今日の盛況を見る基礎が出来上つたので、その後まだ語るべきことが相當あると思ひます。そこでこの蕪稿の最終回は第二・第三の山を越える點に就いて、もう少し述べさせて頂くことと致します。

先づ水害騒ぎも鎮まつて見ますと、前回に申したやうな岩崎家庭事務所の庇を借りて事を運ぶことも出来ませんので、程近い三菱仲十四號館といふのの一角に「モリソン文庫假事務所」の札を掲げて取敢へずの仕事を開始致しました。第一に必要なのは人手でありますので、北京以來御縁のあつた美添君も毎日大學の圖書館から出張といふ名義で當分手を貸して頂くこととして當局の御領會を得、それからどの位月日が経つてからか今覺えませんが、現在文庫の圖書館の統率者として最高の位置に在られる岩井大慧君を大學の史學研究室の副手から轉じて頂くこととし、それに

續いて、つひ此頃まで文庫の専務理事を勤められた和田清先生に手傳つて頂くこととし、それから兩三年の間に後の京城帝大教授秋葉隆君、高橋邦枝君にも來て貰ふこととなり、夭折された高橋君を除いては、財團法人東洋文庫の生れるまでいや生れてからもずつと同僚として協力を預たれたのであります。秋葉君は東大の社會學出身でありましたが理論方面よりはデュルケム流の民俗社會學といふ部分が得意で、日本や極東の民族の慣習探究に主力を注いでられました。後に京城帝大に榮轉され、朝鮮の巫俗に關する大研究を完成せられたのも、この當時から既に萌芽を持つてをられたので、後年の業績も洵に故ある哉と思はれます。高橋君は名は婦人のやうですが三高から東大の西洋史學科を出られた秀才で、古代史の專攻から東洋方面へも切込んで來られ、將來は東洋學者として立ちたいといふので文庫へ就任を希望して來られたのでした。父君は奈良女高師(今の奈良女子大學)の首席教授で、植物學の大家であり、伯父君に國學者・神道家今泉貞介翁を持つてをられました。庶務・會計等には改めて專屬の人を入れず、岩崎家庭事務所の所員が萬事面倒を見て下さることとなり、日常當座の雜務を處理し、兼ねて兩事務所間の連絡係として、晝間働いて夜學に通つてゐる十八九の若い事務員を二人附けて下さいました。それに小使二人、製本工二人、合せて十一人の小ぢんまりした世帯でありました。仲十四號館といふのは今は確か名稱が變つてゐますが、要するに馬場先門の交叉點から東海道線のガードへ向つて公孫樹並木を歩いてくると、左へ三つ目の横町を曲つて丸ビルへ出ようといふ處に、南北に長く連つてゐる、鐵筋コンクリート三階建て地下室があり、一階の外側だけチョコレート色の煉瓦貼りといふ細長い建物でした。文庫の假事務所の置かれたのはその北端の一區畫全階でありましたが、この建物には全體で七區畫ぐらゐあつて、その各々に或は全階を、或は一階とか二階だけを借りて多くの會社や事務所が看板を掛け

てをりました。すぐ隣には富士商會といふ株屋さん兼ブローカーのやうな商社がありました。二三年後移轉した迹へ文庫が伸びて之を併せ、主として書庫として之を使ひました。それは後に申すやうに文庫が成長して藏書が殖え、北端の一角では手狭を感じて來たからであります。

さてここで最初に文庫を利用した人たちのことを二三お話ししておきませう。世には篤學な人たちがあるといふことを紹介する旁ら、文庫が今日の如く廣く學徒の間に利用され、學界の進運に大きな役割りを果してゐる抑々の第一頁に當ることを書き留めておく一方、岩崎男が徒らに整理中を口實に世間の利用を拒むことのないやうにとの宏量から出たことでもあることを忘れたくないからでもあります。(岩崎男は一九〇〇年にマクス・ミュラー文庫を買取られ、之を東大に寄附されたのでしたがこれが十數年に及んで整理がつかず、學内の教授たちさへ閱覽が自由にならなかつたといふことを頭においてをられたやうでありました。勿論そんなことは一言半句も口には出されませんでした。周圍ではそれとなくそんな風に推察してゐたのであります)。その方でのイの一番は當時岡山の第六高等學校教授でありました後の文學博士滿田新造氏で、これはまだ實質的に利用されたといふわけではありませんが、カタローグだけ見せて貰ひたいと、確か私が北京から歸京の翌日の晩に拙宅を訪ねられたと覚えてゐます。丁度カタローグは手許に保管してありましたので早速見せて差上げました。滿田氏は支那音韻學の專家で、いち早くカルルグレンの研究など深く検討してをられ、世を擧げてまだカ氏の學說の紹介・追隨時代に早くも或る部分に批判的な意見を表明してゐた方です。第二は當時京都大學の助教授で附屬圖書館の司書官を兼ねてをられました長壽吉先生であります。濡れた本を乾かしてゐる混雜の最中に來訪されたのですが、これもまだ實質的に文庫を利用されたといふわけではな

く、圖書館長の新村出先生の意をも受けられ、多分に水害存問のために來訪されたのでありますが、兎に角騒ぎの最中とはいへ東京に於いて文庫の全貌を腦裡に入れて行つて下さつた最初の訪客であつたことは確かであります。それで假事務所開設と共に實質的に利用された人たちは先づ軍人でありました。或日、玄關先に靴音の亂れるのを聞くと共に、十人ばかりの若手の中尉・少尉級の陸軍將校が現はれましたが、北京でお近づきになりました佐藤三郎氏が參謀本部の支那課長として部下を連れての來訪でありました。(氏はもう少佐になつてをられたと思ひます)。氏の云はれる事には、北京で君から聞いた所に據ると文庫には西洋の探檢隊が實測した小地域ながらあちこちの五萬分とか二萬五千分とかの地圖が相當あるといふことだつたが、それをひとつ見せてくれ給へ、ここへ來ればどここのさういふ圖が見られるといふことを先づ記録して行きたいからとのことなので、ターフェルだのフィルヒナーなどの報告書に添へられた色刷の地圖類を出してくると、部下の將校たちは用意して來た白地圖にそれぞれ色鉛筆で地域を畫し、一々原圖の書名や圖版の番號を記入して行きました。その後も何回かこの若い將校が二三人づつ來られたやうに思ひます。そのすぐ後へ來られたのも陸軍の軍人で、今一寸名を思出せませんがやはり大尉で某大將附の副官でありました。この人は兵器としての飛行機方面擔當の任に在つたらしく、聞く所に據るとここには歐米の新聞の記事で支那關係のものゝ切抜を集めてゐるとのことだが、若し本當ならば航空關係の最近の消息が知りたいのだといふことであります。これはモリソン氏の示唆と紹介とに従つてスキスのアルグスといふ有名な切抜通信社に注文して、支那に關する記事は何でもいから切抜いて送つてくれと云つてやつてあつたので、假事務所の開設早々毎日のやうに一束づつ切抜が届けられてゐました。アルグスといふのは全世界の歐字新聞の Clipping agent だ、ここへ少し大風呂敷を廣

げて支那に關する事なら何でも大きなことを云つたお蔭で、毎日のやうに切抜の來ること來ること手の著けやうもないことになりました。その頃の仕事の實情や人手の數ではどうしやうもないので、暫く目を眠つてそのままに見送るより外なかつたのですが、何分新聞記事といへばアップ・トゥー・デートの、生々しいニュースや評論ですから、昨日來たものは今日讀めるといふ工合になつてゐなければ意味をなさないので、已むを得ず一二年後に注文を一時中止しました。(それにしても取つたものだけでも何とかしたいとの念願から、秋葉君が自ら買つて出てくれて、暇を割いて整理してくれることになりました。一點毎にそれを四六倍版ぐらゐの白紙に貼りつけ、何月幾日の何新聞の記事といふことは一々附箋が附いてゐるのでそれを寫取り、シャノンの抽出しに入れて保存するといふ仕組みでしたが、秋葉君の努力で大分はかどり、今でもどこかに保存されてゐる筈です)。第一次大戦争を契機に航空機の發達は目ざましく、やがて極東の空を飛行機が縦横に駆けめぐるので豫期して、陸軍では早くもこの方面の情報蒐集に乗り出してゐたのでありませう。この副官はこの切抜きの山を見て大いに喜ばれ、陸軍でもここまでは費用が出しきれないから、せいぜいかういふ所で材料を集めておいて貰ひたいと云つて歸られました。この蒐集を中止したのはかういふ筋には氣の毒なことでありましたが、何とも已むを得ないことでした。實は最初の利用者が所謂東洋學者でなく、軍部の人であつたなどといふのは聊か意外で、さういふ意味に於いてなら外務省方面の人たちなどに利用して貰ひたいと期待してゐたのですが、外務省側でここへやつて來られたのは、少々遅れてでありましたが、私の一高以來の同窓で支那問題に注意を拂つてゐた守島伍郎君が最初でありました。外務省には無論十分な圖書や資料の備付もあり、その上外間の窺知を許さぬ機密文書なども揃つてゐることは當然であります。モリソンの蒐集にはまたこれら

を補ふ資料もないわけではなく、例へば米國國務省が編纂した支那關係條約集の如き、モリソン舊藏のものは駐支米國公使ロックヒルがモ氏に贈つた手澤本で、ロ氏が澤山の書入れをしてをり、新聞の切抜きを添へたり、ロシア關係のものには露文の原文をタイプで補つてあるといふやうな、unique copyのあることなどを知らせておき、後々の利用を慫慂しておいたやうな次第でした。こんな話はまだまだありますけれども、この邊で切上げることとします。次に申すやうなわけで白鳥先生が文庫の相談役の一人になりましたので自然度々歩を運ばれることとなり、東洋學者として實際に文庫の書物を利用される先鞭を著けられたのであります。

さて文庫を將來どのやうに運営したらいいか、岩崎男としては初めからその範圍の擴張もし、新刊のものも繼續購入し、未收のものも補充して行きたいといふ考を漠然と持つてをられたことは事實であります。それをどの程度に具體化するか、またそれまでの假事務所の運営や係員の指揮監督等にしてもどんな機構で進むべきかに就いて、取敢へずの協議機關として相談役を設けることとなり、從來の經緯をも考に入れられて井上準之助・小田切萬壽之助・桐島^{とよ}一・上田萬年・白鳥庫吉の五氏を委嘱せられることになりました。初めの二氏は文庫購入の發端からの關係者であり、桐島氏は三菱の重役として岩崎家を代表されての就任であり、既に水に傷いた本の荷を解いて善後策に取りかかつたその日から、我々は毎日直接の指示監督を受けてその下で働いてゐたわけであります。上田・白鳥兩先生が學界を代表して、學術機關としての文庫の運営に參畫されたことは申す迄ありませんが、桐島氏と上田・白鳥兩先生は法科と文科とは異つても大學時代同期であつたとかで古くからよく御承知の間であつたことも何かと都合なことでした。桐島氏は岩崎男と同郷で、その少年時代からの學友だつたさうで、三菱の重役中でも實力者の錚々たる人で

した。歴史に非常に興味を持つてをられ、丸ノ内時代にも折があるときよく白鳥先生を延いて社内に講演會などを催され、先生の東洋史の大勢論などに耳を傾けられ、文庫の使命などにも深い理會を持つてをられました。岩崎男との交友關係からいつても、何とかして文庫を立派なものにしてその初志を十分顯現させたいとの熱意が始終溢れてをられました。それに中々遠大な抱負と明快機敏な決斷力を持つてをられ、後年東京市議會に打つて出で、市會議長に選ばれ、時の市長後藤新平伯と肝膽相照らして色々畫策されたことも思ひ合はされるものがありました。

ところで文庫の將來に就いてであります、相談役の諸先生が協議の結果、先づモリソン氏の集めてゐた範圍はそのまま繼承し、その範圍内でまだ集めなかつたものは之を補充すること、またその範圍内で今後出版されるものは成るべく學術的價值あるものを選んで買ひ足して行くこと、但し支那に關してはモリソンの方針も尊重して、普通の意味で所謂學術的出版物でなくとも、さういふ本が出たといふことが一つの歴史的事實である以上、或る世相の反映として一ト通りは集めること、また一應モリソン氏蒐書の範圍外にはあつたけれども、學術上の見地からは非とも加へる必要のあるものは、精タイラン・アラビア・メソポタミア・ビザンチン帝國、乃至はインドネシア方面まで手を延ばす必要があること、などが定められ、それに加へて日本に關する西洋側の史料とか西洋人の見聞記・著述の類も入れることとなり、また當然の結果として漢籍の蒐集もこの方針に加へられることになりました。さあこんな風に蒐書のスコープが擴大されて見るとこれは容易なことではありません。御承知の通り本はただ金があるからといつて集まるものではありません。先づどの方面にはどんな本があり、それがどんな價值のものかといふことから勉強してかからねばなりません。それには諸方面の研究史を見るのが一番便利なわけでありませんが、その時にはバルトリドの「東方研

「究史」のやうな都合のいいものが文庫にはなく、あつても露文では私には齒がたたないので、ずっと後年その再版の邦譯が出るまでは、やつと初版の獨譯本を手に入れて之を指針にする一方、その代用になるやうな本をせいぜい漁つて微力ではありますが一所懸命勉強を始めました。例へばイラン關係では當時出ました日本始めてのペルシア文學史といつていい荒木茂氏の著書やその種本ともいふべきブラウンのペルシア文學史などをむさぼるやうに讀んだり、アラビア關係ではまだプロケルマンまでは手が届かず、ニコラスとかいふ人の小文學史を相手に手ほどきを受けるといふ程度でしたが、色々と必要な知識を授けました。かうなると大仕事になつて來ました。今まであるものに一應通ずるだけでも大へんですが、新しい方面を開拓するとなるとこの通り一年生から始めなければなりません。況や漢籍となると一層大へんな話です。學校で講義のうちでチラチラ聽いたくらゐが唯一の資本で、この點東大の東洋史學科は京大に比して餘程手薄であつたやうでありますから、早速困難に逢著したわけです。差しづめ「書目答問」あたりを手引きにして文求堂・彙文堂・琳琅閣などから本を集めました。文求堂の主人田中敬太郎氏とはその後特に入懇になり、店頭に於いて始終實物教育に接し、到底學校では覺えられないことを教へられました。昭和十年頃までの東大の東洋史・支那哲文の卒業生諸君なら「文求堂大學」の講義といつて我々の仲間の通言葉になつてゐたことを御承知のことと思ひます。——兎も角かうなつて來ますと片手間やそこらで出来る仕事ではなく、私の若氣の至りで抱いてをつた夢も一つは破れなければならない所にぶつかりました。それは前にも一寸申しましたクリッピングの蒐集整理であります。私はもともと氣の多い方で、二兎も三兎をも追つて一つも捕へ得なかつたうつけ者であります。學校時代から考證的研究の外に所謂「調査事業」といふやうなものにも興味を有し、現在の問題に關し出来るだけ廣

くインフォーメーションを集めておいて、問題の由來や經過、現況乃至見透しといふ所を立どころに、且つ正確に摺むことの出来るやうな機構にも多大の熱を持つてゐました。そこへ卒業と一緒に抛り出された處が丸ノ内のビジネス・センターで、三菱本社の資料課へ行くとさういふ資料が豊富に揃へられ、整然と分類されて欲するものが直に得られる。少し後ですが丸ビルが出来ると同時に移つて來た滿鐵の東亞經濟調査局（後藤伯好みで *Ostasiatisches Wirtschaftsrarchiv* と云つてゐました）に行くとこれ亦ドイツ人の某博士の手で零碎なりフレッツまで同様に整齊完備してゐるといふ状態が羨しくてたまらず、モリソン文庫でもあゝいふ仕事を是非やりたいと願つてゐたのですが、とてもそんなことまでは手が及ばない、いや及ぼし難いのを知つてそれは思ひ諦めたことでありました。そこでアルクスから取寄せてゐた切抜きのみも、續けて取るのをやめ、その分類・保存などは一應中止といふことになり、残念ながら今述べた陸軍の副官の要望などには副へないこととなつてしまひました。そこで圖書の新規蒐集や遺漏の補充の方に移りますが、例へば滿洲・蒙古・シベリア方面に就いて申せば、モリソンの蒐集方針には勿論この方面に關する圖書の蒐集もはいつてをり、現に相當數の書物があり、結構有力なものではありましたが、概して云へば一般的な敘述のものが多く、純學術的なものはこれからといふので中々骨が折れました。尤もさうはいふものさすがモリソン氏の眼光はよく光つてをり、フォン・シュレンク監修の「アムール地域研究誌」とか、コマロフの「滿洲植物誌」とか、シュトラレーンベルグの「歐亞東北域誌」とか、ドートロツシュの「シベリア紀行」、ベル・ダンテルモニーの「露領各地旅行記」、クラシェニコフの「カムチャトカ誌」といふやうな名物がもう集まつてをりましたし、ラーヴェンスタインの「黑龍江上の露人」とか、コックスの「米・亞に於ける露人の諸發見」といふやうな稍々稀觀のもの

もあり、新しいものでもツァプリチカ女史の「アポリチナル・サイベリア」、ゴールターの“Russian Expansion on the Pacific”、カーエンの「ビョートル大帝時代露清關係史」のやうな學術的な良書もありましたが、全體から見ると何としてもまだまだ不揃ひでありました。シベリア關係でもミュラーの「ロシア史彙纂」やフィッシャーの「シベリア史」は無く、ミッドンドルフも無ければステラーも無く、ラードロフの「シベリア日記」も無ければウィトゼンの「韃靼東西記」も無く、第一、ザハロフの「満露辭典」や「満語文典」がなく、トゥングース諸民族や極北古アジア民族の研究に至つては、ステルンベルグやアルセニエフはなく、況やヂェサップ・エキスペディションの大報告はありませんし、アイヌではピルスドゥスキーがあつたには感心しましたが、ポプロニコフの「アイヌ・ロシア對譯辭典」はなく（これは今日でも日本に一部か二部しかないでせう）、蒙古へ行くとドーソンは有つてもベレンジンやクトルメールは無く、パラスは民族誌も無く、露領諸地巡遊記もなく、「シベリア植物誌」もありませんでしたし、シュミットやコワレフスキーの辭典はありますが、ゴルストゥンスキーの「蒙露辭典」やボズドネーフの「蒙古文學史」はほんの一部分しか無く、ポドゴルウインスキーやチャムツァラーノの文典も無く、現代の學者としてはラームステットやコトウィッチのものが少々あつたぐらゐで、まだウラヂミルツォフ、ポツペ、モスタールト、シロコゴロフなどの活躍以前のことにこれら諸氏の勞作は當然一つもありませんでした。かうなると滿蒙・シベリアの一角だけでも無い無い盡しのやうなもので、さも文庫が穴だらけのやうに見えますが、支那本部を中心に傾けたモリソン氏の努力は少しも價值を減ずるものではなく、今でもその目錄を繕いてよくもこんなに集めたものと敬服せざるを得ないのであります。假すに日を以てすれば、モ氏の餘力は必ずしもつと滿蒙・シベリアにも及んだに違ひないと思はれます

が、假りにさうとしましても、右に挙げましたやうな書はいづれも名だたる稀観書で、中々チットヤソットの探索では手に入るやうなシロモノではありません。誰が手を出したとしても餘程氣永にやらなければ寄つてくるものではありません。然し蒐集の範圍が擴大され、これらの書物も本腰を入れて集めることとなると、それらが無ければ話になりません。それでその蒐集に一所懸命に乗出し、パリの Paul Geuthner とか Maisonneuve Frères、ライプツィヒの Otto Harrassowitz、同く Karl Hirschmann、ハーグの Martinus Nijhoff、ロンドンに Bernard Quaritch、Kegan Paul & Trencher などの古本目録を目を皿のやうにして物色し、丸善や神田・本郷の古本屋の書棚を暇さへあれば漁り歩いて、文庫が東洋文庫となつて店開きをするまでにはどうかここに挙げたやうなもの集めました。(私の退任するまでにポプロブニコフとフィッシャーとパラスの「蒙古諸部族記事集録」とだけは集められず、ペレジン譯のラシット・ウド・ディーンの「史記彙纂」の一部と共に常に白鳥先生の御藏書を拜借して用に充ててゐた次第でした。ポズドネーフの蒙古文學史は、もともとウラヂヤストークで學生に授けた講義原稿の石版刷で完本は殆ど得難く、白鳥先生と石濱純太郎博士の藏本と文庫のものとを合せてどうか完全に近いものとなるやうです。そのうちにハンガリーの東洋學雜誌 *Keleti Szemle* のバック・ナンバーが入庫し、その第八卷に「蒙古文學史綱」があり、第九卷に「滿洲文學史綱」があつて、この方面の文獻を集めるのに多大の助けとなり共にラウ、フエル氏、眞に大早に雲霓を望むの概がありました)。——これらは廣い東亞地域のほんの一角のことではありますが、中央アジアとか東南アジアなどに就いても同様であります、一々そんな方面に就いては架説致しませんが、足りないものはせいぜい補充もし、新刊の主要なものは逃がさないやうに心がけました。今滿洲のことに關説致しましたが、その際フト氣がつかましたのは

京都大學に清の太祖・太宗の滿文實錄と「五體清文鑑」の寫眞のフィルムのあることでありました。これは去る明治四十年かに内藤虎次郎博士が羽田博士を伴つて奉天に出張せられました時、崇謨閣に祕藏せられるこの二書を寢食を廢して撮影して歸られたもので、私は學生時代からその焼付の影片を製本したものが滿鐵の白山黒水文庫と東大の史學研究室とに各一部あることを知つてゐました。その撮影當時から指を折つて數へるともう既に十年以上を經過してゐるので、フィルムが變色褪色してゐてプリントが出来ないのでないかと考へましたが、若しも一部複本を作るなら一刻も猶豫出来ないと思ひ、京都へ出向いて羽田先生に面會し、まだフィルムが使へるやうなら焼増の御配慮に浴したいと懇願したことでした。先生は複本作製の希望にはいつでも應ずるが、第一、フィルムの保存状態がどうなつてゐるか、それが心配だし、假りに使用に堪へるとしても兩者合計五千枚程に上る數だから焼付を一枚一枚検査して悪いものは焼き直ほさせ、丁數も調べて順序を正さねばならず、中々簡單には行かないこと、そのため適當な助手を選定して之に相當な御禮をしなければならぬことなどを云ひ渡されながら、自ら藏から洋服の箱のやうなものに入つたフィルムを出して來て見せて下さいました。幸ひ變色褪色はそれ程のことでもありませんけれども、どれもこれも薄つすり白く黴が生えてゐて、これはいけないと思ひましたが、大學の寫眞技師の話でアルコホルで拭ひ取れば別に差支へはないとのこと、色々細かい條件は先方の云はれるまゝに承諾して萬事宜しきやうに御願ひして歸りました。焼付けのことは右の技師の方が公務の餘暇にやつて下さることになり、調整の仕事はどなたが衝に當つて下さつたか伺ひそこないましたが、或は若き日の鴛淵博士などではなかつたかとも存じます。かくて一兩月の後出來上り、東京で製本したのが今文庫にあるあの本でありまして、清文鑑の方は後年文庫が五十部だけ玻璃版複製本を作つた時

の底本であります。(今になつてはあのフィルムはいくら何でももう使用には堪へなくなつてゐはしまいかと憂慮せられ、いい時に複本を作つておいたと喜んでをります)。

寫眞複本作製のことで思ひ出しますが、日本に天主教が傳はつた當初、天正・文祿・慶長の頃にイエズス會の神父や宣教師に依つて教理に關する邦語の提要や日本の言葉や文學の學習を目的とする語學書や物語のテキストなどがボツボツ活字版を以て(その或るものはローマ字綴り日本語を以て)出版されました。多く天草・加津佐・長崎等の學林などで出版されたものでありまして世に所謂吉利支丹本であります。いづれも迫害の結果日本内地では殆ど全部失はれてしまつたもので幕末明治に至り偶々内地に残つてゐましたほんのその一部が発見されたり、西洋に送られて古文庫や古刹の片隅に辛うじて佚亡を免れてゐた珍本であります。いづれもこの廣い世界にたつた一部一冊しか残つてゐないものも少なく、時に數部を算するものがあつても殆ど三―四部の上に出づるものはないといふ超稀觀書であります。これが日本の歴史や國語の沿革を辿るに絶好の史料だといふわけで、明治中期早くも駐日英國公使サー・アーネスト・サトウに依つて研究の口火が點ぜられ、村上直次郎博士、新村出博士等に依つて續々探究の結果が公にせられ、大いに學界に新風を吹き込んだものであります。日本關係の西籍も蒐集するといふ方針が立てられました以上、それらの複本を作ることは未收の書を購得することにも増して一部の學者たちから強く要望せられたことでありました。私も學生時代村上博士の日本クリスト教史や西方文物東漸史の講筵に列して多大の興味を持つてをりましたし、新村先生の幾多の業績を通じ、別してはその麗筆に魅せられて色々教へられる所もありましたので、この方面のことにも進んで微力を捧げました。第一に著手したのは、文庫の東京移置後數年の後であります。新村先生の

再度の西游を機とし、先づロドリゲスの「日本文典」、日本イエズス會編の「日葡辭書」、同じく「平家物語」(ローマ字綴)、同じく「エソポのファブラス」(イソップ譬喩譚、邦語譯ローマ字本)、同じく「金句集」(日本語ローマ字綴)、合せて五種を寫眞に撮ることの斡旋を御願ひしたのであります。新村先生は最初留學せられた時、ブリティッシン・ミュージアムの閱覽室で多大の辛勞を費されて或る程度まで筆寫して來られたいはれもあり、この擧には進んでその勞を執つて下さる御快諾を得たのでありますが、「平家」に就いては更に東大の司書官で國文學者でありました故植松安君(後の臺北帝大教授)の格段なる要請もあつたことであります。これらはブリティッシン・ミュージアム所藏の原本から寫したのでありますが、同館の定めとしてネガの持出しを禁じてをられたかで全部ロートグラフ(陽畫が白黒反對に寫るもの)で満足するより致方ありませんでした。當時俗に云ふ南蠻ブームの起つた時代で、猫も杓子もキリシタンとか南蠻情調とかを口にする頃でしたが、さすがに餘程の専門家でないとこれらに手を出す人はなく、先づ故橋本進吉博士や「平家」の國字譯に従事してをられた龜井高孝氏ぐらゐが熱心な利用者でありました。(この線に沿つた仕事はその後も徐々に他の書物にも及び、また東洋文庫と成つてからはありますが、岡本良知君や太田正雄〔木下李太郎〕博士などの徳憑によつて、レタナが「比律賓印書史」に紹介した外他に注意する所のなかつた元和年間マニラ版の日本文ローマ字本のロザリヨ功德記〔二種〕やサンデの「天正遣歐使節對話録」などを寫眞に撮ることの出來たのは私かに喜びとしてゐる所であります。第一右の元和版の如きは今度の戰爭で二種とも天壤間の孤本ともいふべき原本は焼けてしまつたわけで、寫眞ながら辛うじて複本をこの世に留め得たのは仕合はせでありました)。ここで一寸脱線して日本關係西籍蒐集に就いて數言を費しておきますが、モリソン氏の方針のうち

にはこの種の本を特に努力して集めるといふことはありませんでした。何かの機縁で手に入つたものがスポラディックにチラホラあるといふ程度であり、古書に於いて、學術書に於いて特に然りでありましたが、それでもメンデスピントの原語初刊本（リスボン、二六一四）以下各國譯の古版本、フアリア・イ・スーサの「葡領アジア」、アントニオ・ガルヴァンの發見史、乃至モレホン、リバデネイラなどの一六〇〇年代初頭の古刊等もあり、またバルトリの「イエズス會史」の原刊本もあり、グスマンの「イエズス會東方布教史」の一六〇一年の初版本のやうな、沙中の金の如き光つたものもありました。バロスとコウトの本も一八世紀後半の二十四冊ものではありましたが、前のリバデネイラと共にアーネスト・サトウ卿の舊藏本などもありました。然し本格的に歩み出すとなると、先づマッフェイ、モンターヌあたりから始つてケムプエル、トゥンベルイ、ティチング、シーボルトとかフアレンタイン、プロウトン、クルーゼンステルン、ラ・ペルーズあたりから集め始めねばならず、キリシタン史となると、ソリエ、クラッセ、シヤルルヴォア、パジエス何一つないといふ次第ですから殆どスタートラインから出發するやうなもの、殊に何よりも必要な宣教師の書簡や年報類を充實する必要がありました。書簡や年報は支那關係のものは實によく集つてをり、とり分け「典禮問題」に關する當時の刊行物などは同じ屋根の下に揃へてあるものとしては世界一だとモリソンの誇稱した通りであります。が、日本關係はすべてこれからといふ所でありました。これに同情せられて新村博士は、京都大學の圖書館で嚮に一括購入されたサトウ卿舊藏の年報類の假目錄を與へられました。これは當時本邦現存のこの種のもの冠冕でありまして、コルディエの「日本書誌」などもあるとはいへ、蒐集には好箇の手引でありました。左様な閑話は姑く措きまして話を本筋へ戻させよう。ブリティッシ・ミュージアムの稀觀書撮影のことが起ると前後し

まして、羽田先生の再度の外游を機としまして、ピリオテーク・ナシオナルに在るペリオ蒐集、ブリティッシ・ミュージアムに在るスタイン蒐集などの敦煌文獻の録副といふ企てで、之を羽田博士に懇請したのでありますが、博士は幸に之を快諾され、貴重な留學の時間を割いて親しくカメラを操つて自ら撮影現象等のことに従はれたのであります。その技術上の面倒も大へんな勞苦であつたと思ひますが、その前の撮影許可の手續などにも餘人の知らぬ心勞があられたわけでありまして、今日我々居ながらにしてこれら罕觀の史料を利用し得る者は滿腔の感謝を捧げねばならないところであります。その後我が國にも「敦煌學」が大いに興り、「敦煌家」も輩出し、矢吹慶輝・内藤虎次郎・石濱純太郎・小島祐馬・松本信廣・那波利貞・神田喜一郎の諸博士が次々に主として漢文の古文書・古鈔本の寫眞や筆寫本を携へて歸來せられましたので、この類の史料は頓に豊富となり、遂に最近に見るやうなスタイン蒐集の一切の漢文寫本の寫眞が備附けられるやうな盛況を見るに至つたのでありますが、その抑々の機運を拓いたのはこの擧がその早いもの一つでありませう。(一つといふのは佛典や摩尼教經典に限つてではありますが、矢吹慶輝博士の事業が既に啓明會の援助によつて行はれてゐたからであります)。勿論羽田博士は漢文史料の外に異國語で書かれたものをも寫して來てをられますし、「華夷譯語」の異本なども色々(その或るものはサンプル・ペイヂだけではありませんが)影片を用意して來られましたし、またブリティッシ・ミュージアムの嚴しい掟でフィルムは國外搬出は許されませんが、顧愷之の筆といふ「女史箴圖卷」の原寸大のいい寫眞を取つて來られました。この「女史箴圖卷」はなにしろブリティッシ・ミュージアムの名物でありまして、幾多の書物にその部分の寫眞が掲載されてゐましたが、ローレンス・ビニョンの「極東繪畫論」(再版)のものを除いては乾版かフィルムかが不備で白黒の調子

が悪く原畫の趣を彷彿するに足りないものでありましたが、この時文庫の作つたのはパンクロのフィルムを用ゐ、色彩の調子がよく現はれてゐるものでした。丁度その頃東北帝大の福井利吉郎教授が日本美術院の小林古徑・前田青邨兩畫伯を伴つて英國へ出向き精緻な模本を作るといふ計畫が出来上り、渡歐を前にして準備知識を得ておくためといふことで小林・前田の二先生が一週間ほど文庫へ日參せられ、喰ひ入るやうに連日この寫眞と首ッ引きをしてをられたのを記憶してをります。假事務所の二階の階段の突き當りに、たつた三疊敷きぐらゐの小部屋が空いてゐましたのを見つて使つてみましたので、天下の大畫伯を待つに甚だ禮を失してゐましたが、その狭い所で勉強をして頂いたやうなことでありました。この模本は東北帝大の藏に歸し、嘗て天覽にも供し、戰災をも免れて今に安泰なのは誠に喜に堪へませんが、文庫の寫眞が模本の作製に少しでも御役に立つたかと思へば、これは亦羽田博士の勞の一部が酬いられたものと云つてよろしいでせう。(この圖卷の木版色刷の複製が一〇〇部だけ印刷され、一九二三年にミュージアムから狭い範圍に頒たれましたが、これは甚だ不出來なもので、全然原畫の趣を傳へてゐないことに定評があつて、ビニヨンの解説が泣くくらゐであるとの取沙汰でありました。その印刷の由來や木版の彫工〔日本人〕等に就いては、故内田魯庵氏が詳しく「學燈」誌上に書いてをられます)。ただこの荷物が横濱へ著いた時には通關手續きのことで税關の役人と一ト論判やりました。羽田先生の心遣ひで荷物は日本郵船の氷川丸(?)かの船長の携帶品として扱ふやうに託せられたので、ランチで本船へ乗りつけた私には難なく渡して頂けたのですが、埠頭へ上つて税關で檢證を受ける段になつて役人が中味は何だといふのです。フィルムだといふとそれなら相當な税がかかるといひますので、これは生フィルムではない、もう寫してしまつたものだと言へましたが、私の言葉のうちには或る意味では廢品みたやうなものだとの意味があつたの

です。所が役人はフィルムと云へば映畫のフィルムとしか考へなかつたらしく、それなら尙のこと重税がかかるといふので色々陳辯に及びましたが埒があかず、結局開けろといふ命令で箱を開きましたら、書物の寫眞ばかりですから向ふはアテが外れたらしく、古突厥文字で書いた夢占の本（トムゼンが發表したことのある）などが出て來たので、バツが悪さうに「エヂプトの繪文字ですな」などとテレ隠しを云つてゐました。幸にチョークでOKの印を著けてくれましたが、洋服屋が新調の一ト揃へを入れてよこすボール箱に詰めてあつた荷物の様子と、私の風體から見てこれが映畫のフィルムでないぐらゐは直感出来るはずなのに、世にも頭の悪い男だと思ひました。（萬一この記事がその人の目に觸れたら、嘸かし苦笑を禁じ得ないことでせう）。おかげで非常に時間が経ちましたので、雨もよひの空は本降りとなり、私は傘は持たず、和服でもあり、船へ上る關係上郵船の支店から草履に履き代へて行つたのでビショ濡れになり、荷物は濡らすまいとするし、實に慘憺たる姿でありました。

かういふ風に色々なものが集つて來ますと、正式にはまだ公開前ではありますが、些か世間に披露して見たくなるのも人情でありまして、傍ら岩崎男の壯舉を早く世に知らせたくもあり、また整理に名を藉つて文庫が居眠りをしてゐるのでないことも廣く知つて貰ひたくもあつて、小規模ながら敦煌古鈔と吉利支丹版の寫眞とを中心として展示會を開くことになりました。これが大正十一年五月十四日のことであります。會場は東大の山上會議所（俗稱「御殿」）全室を借切ることにし、各方面の在京東洋學者に案内状を送つたのであります。これは文庫としては最初の對外的事業で謂はば文庫のデビューであり、記念すべき催しでありました。それで少しく饒舌に互る嫌ひがありますが、その時配つた陳列品目録の小引を寫して思出の種と致したいと存じます。

晩近東洋諸學の進歩は中亞並に北部蒙古に於ける考古學的探檢の成果を外にして之を語るべからず。顧るに十九世紀の中葉、中亞の高原に流沙に埋れたる上代の遺蹟あるを新に世に紹介せるはジョンソン(英)・フォーサイス(英)・レーゲル(露)の諸氏なり。後一八九〇年英人パウー氏此地を過ぎりて偶々千五百年の舊物古鈔佛典の斷簡を得、次いで佛人グルナル氏亦此地に遊び同じく千八百歲閉既佚の聖經零本を得てより、歐西學者の視聽は翕然として東トルキスタン・タクラマカンの沙嶺に集り、ヘディン(瑞典)・クレメンツ(露)・スタイン(英)・グリユンウエーデル(獨)・ルコック(獨)・ペリオ(佛)・カズロフ(露)・オリデンブルグ(露)等の諸氏、相踵いで駝背に天山・葱嶺の險を越え、アルペンシトックに懸度・崑崙の峻を攀ちてタリムの河盃・河西甘肅の西陲に到るあり、我が大谷光瑞氏亦屢々人を派して同じく此地に佛教東漸の遺址を探らしむ。新疆の風物は極めて蕭條寥落たり。その荒涼轉た岑嘉州が塞下塞上の曲を偲ばしむる中に在りて、これら學者の慘憺たる苦心經營の結果、各々齎し歸れる豊富なる研究資料は倫敦・巴里・伯林・彼得具羅土・旅順・京城等の博物館に寶藏せられ、我等にとりてその貴きこと寸紙もなほ百鏹の黃金に過ぐ。この流風の及ぶところ、ジャヴァンヌ・ドローム・スガラン諸氏の支那本部に於ける古美術・民俗の調査旅行となり、漢民族の本地に於ける文化の跡亦これより漸く明かならんとす。

蒙古にありては一八八九年、ヤドリントツェフ氏(露)がオルコン河畔に異文の古碑を發見して以來、ラドロフ(露)・ヘイケル(芬)兩氏の訪古遠征となり、共に具さにその狀を圖し、親しく唐代の舊石を撫して歸る。後、丁抹の學者トムゼン氏、遂に之を讀破してその突厥の書契なるを發表するや、各國の學者の從ひて之を究むるもの多く、朔方の古史始めて爲にその闕漏を補ふを得たり。人之を中亞に於ける諸種の發見と併せて東洋學界近時の一偉觀となす、また故ありと云ふべし。

斯くの如くにして蒐集せられたる漠北・西域の遺品には壁畫あり、佛像あり、彩綾あり、古文書あり、經典あり、戯曲あり、貨幣・器用・調度の類に至るまで具はらざるなく、その富贍歎ずるに堪へたり。スタイン・ペリオ兩氏の將來品は就中その尤なるものなり。その一部は已に公刊せられて世に出でたりと雖も、なほ寶庫に秘められて未だ人閒に現はれざるもの亦尠からず。モリソン文庫嚮に京都帝國大學助教授羽田亨氏の渡歐せらるるを機とし、氏に囑するにその一部其他二三資料の寫眞複製を以てす。羽田氏忙餘銳意その業に従はれ、幸に茲に陳列する如き諸種の資料を收むるを得たり。うち約半數は羽田氏自ら手を下して撮影・現像等の勞をとられたるものに係り、その閉氏の心勞と煩累とは洵に容易ならざるものあり、文庫は茲にこれらの陳列に際し深く氏の

勞を多とするものなり。(因にこの機會を利用して并せ陳べたる耶蘇會士編日本文典その他の複製は京都帝國大學教授新村出博士の勞を煩はせり。茲に記して深謝の意を表す)。

これは準備の最中、猫の手も借りたいほどの忙しさのうちで印刷所の使を待たしておいて倉卒の際に書き流した稀代の悪文で、二度と世にお目見えをさせるシロものではありませんが、前にも申しました通り、この展覽會は文庫の世間に對するデビニューであり、記念すべき催しとして忘れ難いものがありますので、臆面もなく再録した次第、どうぞ諒とせられんことを望みます。

さて蓋を開けて見ますと意外の賑ひで、内地の在京學者は勿論、丁度その時滞京してをられましたスウェーデンのカルグレン氏や河内のフランス極東學院のオールソー氏、駐日佛國大使クロードル氏等の參觀を迎へ、錦上更に花を添へるの概がありました。握手を求められたクロードル大使の手が有名なる詩人にも似ず、頑丈無類の大きなものであつたこともその日の思出となつてゐます。外にも金髮碧眼のお客さんもあつたやうですが、今さつぱり思出せません。文庫にはその時の來觀者の自署に成る芳名録が保存されてゐると思ひますが、それでも見たら回想の絲がたくられることとせう。翌日だかに發行された「帝大新聞」には、當時記者をしてをられた友人濱田本悠君(宗教學者)が椽大の筆を振るつて大々的にその景況を報じてくれました。その時よく働いて下すつた同僚諸氏にも私は今に盡きぬ感謝の念を捧げてゐるものであります。

そのうちにぼつぼつ文庫新築の議とその運営の基礎方針の正式決定とが相談役の間に話題に乗るやうになつて來ました。初め白鳥先生などは研究所中心で文庫はその附屬圖書館といふ形式で行きたいとの御希望のやうでしたが、熟

議の末、研究事業は必ず附帯させるが先づ圖書館を本義とする立場で進むといふことになり、その名もいろいろ案が
出まして、白鳥先生は邦人の耳には熟さない語だがアジア文庫の名を稱したいと提案されましたが、これも東洋文庫
といふことに決著致しました。さうしてどこに之を建てるかとの段になつて、初め駿河臺の明大の北隣り、前に幣原
喜重郎男の邸宅のあつた處が空地になつてゐたので、そこが候補地に擬せられました。何分五〇〇坪ばかり、敷地と
しては狭きに過ぎるといふので中止となり、或る日相談役一同で駒込上富士前の六義園を検分することとなり、その
結果火難水難の心配もなく、環境も至極閑静といふことで只今の文庫の在る處に決つたのであります。その時は今
の文庫前の電車通は無く、あの通の南北を合せて名園の内部であつたわけでありました。そのうち文庫で使はして頂け
るのは現在の處約千五百坪でありまして、西隣には理化學研究所があり、南には三菱造船會社の研究所があり（これ
は後に理研に合併になりました）、東には内務省の土木研究所があり、一種のアカデミック・クォーターを成してゐま
したのでどなたからも異論はなく、ここに決定したわけでありました。初めは三菱の地所部（今の地所會社）に居られ
た津田鑿といふ技師が退職され、獨立の建築事務所を開かれるといふ時でしたので、桐島氏は一時この人の門出祝に
文庫の建築を託さうかと考へられ、圖面のドラフトなども出來上つたのですが、その後變更になり、地所部の技師長
で丸ノ内に多くのビルを造られ、丸ビルの設計をも一部擔當された（あれは米國のフラー會社との合作）ヴェテラン
櫻井小太郎博士にお願ひすることになりました。博士は京都の方でイギリスに十八年も居られたといふので、いか
にも濃厚な英國風の紳士で、日本風の趣味も廣く、小鼓の名手でそのお手並を拝見したこともありましたが、文庫の建
築に際しても日本の風土の特質を考へて直譯風の設計を避けられ、文庫より一步先きに取かかられた靜嘉堂文庫設計

の經驗を生かされ、例へば當時流行のステイール・スタックを排され、日本でステイールの家具を使ふと梅雨期に水滴を結ぶ虞れがあるとせられ、また書庫の窓は電氣で自動的にブラインドの下りる式を採用されず、萬一電流の切れた時を慮つてすべて手で開閉する二重のワイアー・ガラスの扉を取りつけられ、更にまた書庫に入る電線の電源を断たなければ入口のドアが締まらない方式を考へられるなど、非常に慎重な考慮を回らされたのであります。三菱の地所部には當時博士の下に東大の講師をも兼ねてをられた山下壽郎君、藤村朗君、川本良一君のやうな東大出の若手の腕利きが机を並べてをられました。博士はそのうちの石原信之君を主なる助手とし設計を進められ、大正十一年には工事に著手せられたのであります。

かくて我々はひたすら建築の進捗を待つ一方、整理や新規蒐書のことにも努め、傍ら利用者にも精々便宜を計る仕事に従ひました。新規蒐書のことには就いては色々記憶すべきことがあります。茲にほんの二三を録しておきませう。大正十年前後のことでしたが、或るドイツの古美術商が何かの都合で店を畳んで國へ歸るとかいふので、商賣の參考にしてゐた東洋關係の美術書や古書を賣るといふオークションの案内がありました。三宅坂上の、後に光ヶ丘内科といふ醫院のあつた處の洋館を借りて賣立てがありました。行つて見ると一般公開以前に優先的に下見を請ふといふ案内状と打つて代り、急に昨夜市内の某書肆に一括賣渡してしまつたといふので憤慨はして見ましたがどうにも仕方もなく、その書肆は私も知つてゐる店なのでその足でそこへ廻りました。二階の一室に右の本は山のやうに積んであり、モリソン氏の既に集めてあつたものが大半でしたが、文庫には日本關係のものは殆ど無かつたわけでありまして、欲しいものが澤山ありました。ここの主人は頗る鼻柱の強い人で、それ程の價格でもないものをバカに

高く値踏んで一步もまけないくせに、洋書の時價には概して知識が無く、かなり高價のものを極めて安く賣つて平氣であるやうな人物でした。それで一冊か二冊時價よりは二三倍のものを云ひ値で買ふことを餌に、本當に欲しい重要なものを半値位で百部ぐらゐ買つてやりました。結局全體としては文庫はひどく安い買物をしたわけですが、彼は餘程安くドイツ人から引取つて來たものと見え、それでもすぐに相當の量が捌けたので頻に御禮を云つてゐました。その時買つたものにはアンダーソンの「日本裝飾志」——これなんかは黒の總皮の二厚冊で、それも色革のモザイクで表面に赤い菊の御紋章を鏤め、ゴテゴテした裝飾を施したいやらしいながら豪華なものでした。それからトムキンソンの「日本蒐集」とかオーズリーの「日本美術」とかモース（大森貝塚で有名な）の「日本陶器」、名にし負ふ米國の千萬長者ピーアポント・モルガンの「陶瓷圖録」（不完）、その外名だたる浮世繪コレクシヨンの繪入目録の類などを山の如く仕入れて來ました。もう一つはやはりその頃のことでしたが、戦争で一攫千金の富を致し、朝鮮の鎮南浦あたりで専ら海運業で大當りを占めてゐたNとかいふ新興富豪がありました。船に丸に二引の旗を靡かせてゐましたので専ら二引といふ名で喧傳されてをりました。これが大へん殊勝な考で蒲田の後に松竹の撮影所が出来たあたりと覺えますが、そこへ地を卜して動物學・植物學・水産生物學などの研究所を建て、例へば植物學なら松村任三博士を所長にお願ひするといふやうな次第で、大學の助教授にでも残るといふ秀才を、いい條件で引き抜いて研究事業に携はらせました。さうして金に絲目つけず、必要な書物をどんどん買込んだのでありました。ところが大戰の終結と共にばつたり落目になり、法人組織になつてゐなかつたばかりに一舉に潰れてしまひ、全財産を處分することになつて所藏の圖書を賣拂ふといふことになりました。向うは金に換へるのを急ぐために非常に安く賣るといふ話なので

あります。どんな書物があるかはかねがね噂に聞いてをりましたので、これは買ふべきだと思つて桐島氏に相談し、氏の理會ある決斷によつて三千圓ばかりの現金を出して貰ひ、それを携へて早速蒲田へ飛んで参りました。幾棟かの煉瓦造の研究所が並んでゐるうちの植物學の研究所へ行きますと、凡そ極東諸地に關する植物誌が實によく揃つてゐます。インド・インドネシア・フィリピン・インドシナ・支那・日本に關するものがずらりと並んでゐます。モリソン蒐集にも支那本土の植物誌はかなりよく揃つてゐましたが、日本や南方諸國のものなどは殆どありませんでした。先づシーボルトの「フローラ・ヤポニカ」の金色燦然たる裝釘が目を射、トゥンベルイの同名の本もあり、名ばかり聞いてゐて實物を知らなかつたミックケルの「日本植物誌」もあれば、フランシエ及びサヴァティエの「日本植物目録」もあるといつた工合、ド・カンドールの大著も蒼古な皮裝に金文字を沈めて並んでゐます。それより目を眩らしめられたのは舊スペイン領時代にフィリピンの政府の所藏であつた「比島植物誌」、ブラッカーの「チャワ植物誌」、ロックスバラーの「インド植物稀品圖録」などの目も饒な彩色版の挿圖から成るフォリオ以上の大形の書物、——一體熱帯の植物は葉の緑も豊なれば花の色も濃麗であり、見るだけでも楽しい本ですがかういふものが轉がつてゐる始末です。これらが三千幾らかで買へたんですから、いくら貨幣價值が高かつた時だからといつてめつたにない好運でした。するとこれらの資産を管理してゐる破算管財人が出て來て、まだ外にかういふ一ト山があるんですが如何でせうか。實は京都大學から小泉源七博士が來られてこれだけ京大へ欲しいと云はれるので一特別口にして置きましたが支拂が來年になるか再來年になるか分らないと仰せられるのです。然し私の方は一刻も早く金にして清算を急がねばなりませんのでさういふ申出では應じ兼ねる次第です。もしあなたの方で只今即金で御拂ひ下さるならこれも御讓

り致しますとの話であります。それにはパラスの「シベリア植物誌」を初め數々の珍書があり、喉から手が出さうなほどでしたが持つて來た金はもう盡きてゐるので、すぐ手を打つことも出來ず、それにそんなことをすれば賣主の事情はどうあらうとも小泉博士から必ず文句が出るのは必定なことと思はれたので一兩日の猶豫を請うて一旦引上げ、直に小泉氏と交渉を開始しました。果して小泉氏からは萬已むを得ないが京大からも蒐書を目的として今一人の教官が歐米へ出張してゐる。その人がこの種の本が見付かれば買つてくる事になつてゐるからそれまでこれらを京大に譲れ、もしその教官の手で入手出來たものは順々にそれを君の方へ賣らうといふ御返事でした。同じく學界に籍を置くものがどういふ經緯であらうと本の取りあひをやるなどといふのは餘り品のいい話ではありませんが、私は更に手紙を出しました。あなたの御話は少し筋が違ひはしませんか。こちらがそれを承諾しても研究所への御支拂の方はどうなるのですか。先方は京大に義理を感じてゐる所ではなく、ただ一日も早く現金が欲しいといふのですから、あなたの方と私の方と話が纏つても支拂の點を打開されない以上、あなたの方と研究所との間は收まりますまい。結局本はどこかへ處分されてしまふにきまつてますから、かう致しませう。武士は相見互ひと云ひますから私の方で買つておいて即刻あなたの方に貸出しといふことにしませう。さうして京大の方に出張中の教官の手で入るに従つて返して頂くことに致しませう。それなら料簡して下さるでせうですかと云つて見たのであります。然しそれでも小泉氏の理會は得られませんでしたし、賣主の方からは返答を促されるので遂に文庫で買取ることに踏み切りました。その値は前回の分よりずつと下廻る額であつたと思ひます。これは少しく後味が悪かつたやうにも思はれますが、別に私藏するわけではなく、さう強引な舉に出たとは思つてをりませんが如何でせうか、偏に御諒解を得たいものと思つ

てをります。

そこへ轉り込んだのが假りに岩崎文庫と唱へてをりました和漢書の一大蒐集でありまして、之を岩崎家からモリソ
ン文庫へ寄贈せられた一事であります。これは靜嘉堂文庫とは異なるものでありまして、あれは別家の岩崎家とその先
代の彌之助男から當時の當主小彌太男に引繼がれたもので、これは本郷茅町の本家の方に古くより集められてをつた
別の蒐書であります。その主要なものは和田維四郎先生の手を通じて集められたものでありますが、和田先生は元來
地質學者・礦物學者であり、明治十年頃東京大學で「金石學」を教へられた方でありまして、和漢書にも造詣が深
く、古典籍が日に散佚するのを慨せられ、丁度第一次大戦で日本は好景氣の波に乗つてゐる最中なのを好機とし多年
親交のあつた岩崎久彌男と久原房之助氏とに説いて自分の推薦する古書を購入せられんことを以てし、兩氏とも之を
快諾されて大正年代の初期から兩家の蒐書事業が起つたのでした。久原家購入のものは後に京都帝大へ寄託され、今回
の戦後藤田家に轉じ、古梓堂文庫と改稱せられましたが再轉して五島慶太氏の有に歸し、今はその創設せられた「大
東急記念文庫」として公開されてをります。和田先生は岩崎・久原兩家へ古書を推薦せられるに方り、萬全の策を採
られ、東大では高橋順次郎・和田萬吉・黑板勝美・橋本進吉の諸先生、京大では内藤虎次郎・新村出・吉澤義則等の
諸先生を顧問として圖書の搜索や選擇に當られました。これらの諸顧問は當時學識や鑑識眼からいつてこれ以上の方
は求め得られない先生たちでありまして、これらの方々の御力によつて集められた本が貴重なものでないはずはな
く、それに集める方は資力はいくらでもあるといふのですから、亡佚寸前に在つた古文獻がその運命を救はれました
こといくばくであつたか分りません。和田先生は年に一回ぐらゐ、かくして集つた書物を丸ノ内の保險協會の一室に

在つた鑛山懇話會に陳列され、學界の名家を招じて之を展觀に供されました。私などは未だ駈け出しの書生でありましたが、その席に列つて意外の眼福を得たことを樂しき思出としてをります。その岩崎文庫の内容は各種の系統から成つてゐましたが、あらゆる方面の種類を集め、いづれも孤本乃至稀本に屬し、眞に天祿琳琅の趣がありました。ここに詳しく内容を述べることは差控へますが、昭和九年に東洋文庫から刊行された「岩崎文庫和漢書目録」に一切著録されてゐます。試みにはんの一端を擧げて見ましても、唐鈔本尙書禹貢等の殘簡、平安朝中期を下らざる日本書紀の古寫本（これは推古紀と皇極紀とですが、この兩本紀はこれより古い鈔本はありませんから、結局前者に見える憲法十七條は現存最古のテキストといふことになります）、奈良朝寫本の毛詩斷簡を始め、公卿の日記などでは「勘仲記」

（勘解由小路兼仲の日記、流布本には缺本が多いものですが、これは文永・弘安年間の部分に闕佚が少く、兩度の元寇の記事などに尊重すべきものがあり、嘗て明治天皇の睿覽に供したこともある尤物であります）があり、その他、刊本では世界最古の *dated prints* である百萬塔陀羅尼を始め、春日版の成唯識論以下一連の佛典の初期印刷物、五山版の如きは殆ど完全の域に近いとの評判もあり、古活字版では所謂光悅本・嵯峨本の類が豊富に在り、江戸期の俗に云ふ黒本・赤本・黄表紙の類まで澤山に備はり、名家の自筆本では古くは新井白石のもの、近くは木村觀齋（正辭）先生の萬葉研究録など實に燦爛たるものであり、また名所記や博物書の多いのも一特色でありまして、馬琴の著はした「禽鏡」（鳥類寫生圖）、岩崎灌園の植物圖説類、小野蘭山の遺書などがありました。「本草通串」の彩色圖譜附のものなど、外にあつても一部か二部だらうといふ珍籍もありました。これらのうちには文庫へ寄贈直前に和田氏から岩崎家へ贈られた「雲邸文庫」甲・乙兩部も含まれてをつたので、當時文獻學者やビブリオフィールの垂涎的の

なり、モリソン文庫は鬼に金棒だと謂はれたものでした。かやうな寄贈本の殖える一方、文庫自身の訪書もだんだん進捗し、稀覯本ではデ・モルガのフィリピン志（日本關係の記事多し）のメキシコ版原典だとか、同じくメキシコ版のオヤングレーンの「日本文典」などが入り、吉利支丹版では文祿二年天草版の「ドチリイナ・クリシタン」のやうな全くの孤本や、天正使節・元和使節（文倉常長）に關するもの、リンスホーテンの東航記、ファレンティンの「東インド古今記」以下の日蘭關係の書が續々集りました。漢籍の方は宋元版のやうなものはわざと敬遠し、史部や子部の成るべく研究資料になるものと叢書とを寄せることとしましたが、時に臨んでは珍籍と雖も學問上からは非備へておきたいものは捕へることを辭しませんでした。近頃東洋文庫で影印本が出来たといふ「西域同文志」の如きはそ一つであります。これはパリの「東洋語學校」に一部あるだけしか從來知られてゐなかつたものであります。「永樂大典」の殘本十冊を文求堂が齎した時、丁度そのうちに佚書である元の「經世大典」の站赤（驛傳）の部を謄録したものが五冊も含まれてをりました。この部分は嘉慶頃、清の徐松が宮中の祕庫から借鈔して珍藏してゐたものがモスクワのルミヤンツェフ博物館に傳はり、羽田先生が初めてロシアに往かれた時之を發見され、恰も第一次大戦勃發の寸前に、騒然たる物情の裡に萬難を排して副本を作つて歸られた謂はれのある本で、今その原本が將來されたのですから重價の故を以て見送るに堪へません。そこで援を和田維四郎翁に求め、之を文庫のために買つておいて頂くことに漕ぎつけました。實はこの十冊にはまだ洛陽の歴史地理に關する部があり、その古地圖の模寫なども載つてゐますので（それと同じものと思はれるものが繆荃孫編の「藕香零拾」に收められてゐますが）、京都の小川琢治先生も大分御執心のやうでありましたが、和田先生は小川さんは僕の弟子だから何とか納得して貰ふからと、わざ／＼京都へ

電話をかけられて話をつけて下さった次第であります。（「永樂大典」の殘本はこれより前に七冊だか、モリソン氏の死後、その夫人から譲受けたことがあるのですが、前にモリソン氏の死と爾後の夫人の來訪のことを申し忘れてをりましたので、ここで一寸そのことを差挿んでおきます。大正八年十一月十一日、コンピエーヌの森でドイツ軍と聯合國軍との間に休戰條約が成立し、同盟軍の最後の降服となつて事實上第一次世界大戰は終りました。やがて媾和會議がパリで開かれるといふので各國は全權の選定に忙しく、我國でも西園寺侯や牧野子〔共に當時〕が内定されるといふことになりました。中華民國では正式任命は翌春になつたやうですが、陸徵祥・顧維鈞・王正廷の諸氏が全權としてパリへ向ふことになり、モリソン氏も全權團の顧問として渡佛することとなり、七年の暮一行に先んじて米國經由でパリへ行くこととなりました。その乗船が横濱に過るといふので私は岩崎男の意を體してその秘書久萬俊泰氏と共に横濱埠頭にモ氏を迎へ、その後の文庫の模様を話し、水害は遺憾であつたが幸に實害は最少限度に喰止めることが出來、却つて氏の遺圖が著々實現に向ひつつある旨を告げると共に、水害を受けて修復改装した二三の古書などを示して意を安んずる資とし、大きな鉢植の花を贈つて航海のつれづれを慰める一助に供して貰ひました。モ氏は却つて篤く岩崎男の厚意を謝して東航の途に就かれたのでありましたが、これが氏と最後の別れとならうとは夢にも思ひませんでした。聞く所によれば氏は民國全權團のために誠意を盡して之を助け、或る時はその行過ぎた強がりを宥めるに苦勞されたといふことです。大正八年〔一九一九〕六月二十八日ヴェルサイユ宮殿鏡の間に於いて對獨媾和條約が調印せられ、めでたく大戰も局を結んだわけでありました。然しこの頃からモ氏は肝臟を病み、南英の勝地に病を養つてをられました。遂に立たず、大正九年〔一九二〇〕の五月三十日、條約の成立後ほぼ一ヶ年の後に黃疸のた

めに不歸の客とられました。私はその時何かの用事で京都に行つてをり、丁度歸京の途中でありましたが、靜岡か沼津邊で夜が明け、新聞を買つて見ますと、モ氏の訃報が載つてゐるではありませんか、私は一驚を喫して着京忽々、文庫の當路と御相談をして直ちに夫人宛弔電を打ちました。その後暫くしてモリソン夫人が東京を通過せられることがあり、夫君の半生をかけた事業が現在どんなになつてゐるかを見たいと云はれ、一日文庫を訪ねられました。假事務所の階上階下を案内してよく見て貰ひ、説明も聽いて貰ひましたが至つて満足して引上げられました。多分その少し後、北京に一度歸られてからと思ひますが、正金銀行の支店を通じモ氏の遺品中に「永樂大典」が七冊ほどあつたのを夫人が處分したい意のある旨を報じて來られました。小田切大人はこれには非常に熱心に乗出され、「大典」の殘本は現存部分の内容如何を問はず、一種の文化記念物として是非とも文庫に於いて購置すべきものとの慫慂があり、値段は詳しく記憶致しませんが、確か邦價二萬圓ぐらゐで譲受けたと思ひます。もう一つ付け加へますが、モリソン氏はその Asiatic Library 即ち我がモリソン文庫の外に、オーストラリアに關する洋書のコレクションと、道樂に集めた「ロビンソン・クルーソー漂流記」の諸版本の蒐集とを持つてゐました。これはモリソン文庫讓渡の時には勿論その圏外に在つたものですが、これもこの際處分したいといふ夫人の意向だつたのであります。前者は氏が濠洲出身だつたからでありませうが、この時これは話が成立しませんでした。然し考へて見ると當時三菱は商事會社を新設して三井物産の向うを張り、大いに貿易にも身を入れようといふ時機で、濠洲に對しても羊毛の取引などを盛にすべく新進の士を派して準備怠りない頃でしたから、かういふ蒐集もどこかに備へておけばきつと役に立つたことと思はれます。後者はどういふ動機で集められたか知りませんが、少年讀物として各國語に譯されたり、書き改められた

りしたものが、一ト山あつたといふことです。尤もロビンソン・クルーソーは支那や日本に萬更無關係なものではなく、現にその物語の後日譚と云ひませうか續篇に當るものでは、彼は支那の南方の *Quinchang* に上陸し、そこで阿片を法外の價で日本商人に賣りつけ、それから陸路南京・北京に旅し、次いで長城を越えて大沙漠に入り、カラキタイ〔黒契丹〕即ち大韃靼なる無人境を過ぎ、黒龍江の流域に出た以上すべて小説の筋の上でのことといふのですから、モリソン文庫にもこの物語の古版本があつたくらゐです。

さて駒込に新築が始まる頃には前に大通りが出來て電車も通るやうになり、その北方の東半分が六義園として残り西半分と園の北邊の處少し許りが分譲地として開放されました。六義園は今でこそ東京都に委譲され公開されてをりますが、五代將軍の時柳澤吉保の邸宅であつた處で、今よりもつとこんもりと森の茂つた一角で、池には鴨などが澤山居たやうでした。工事は順調に進み、鐵筋コンクリート半地下一階、地上三階に陸屋根を戴き、クリーム色の煉瓦で化粧張りをした、アカデミックな匂ひのある建物が九分通り出來上りました。書庫は地下共五階、延二百五十坪、ところへ大正十二年九月一日正午近くに突如として所謂關東大震が襲來しました。丸ノ内の假事務所では係員一同平常の如く執務中の

ところへ突發したこの大異變に、腰かけてゐた椅子が急に下から突き上げられると共に自然に抛り出された恰好となり、建物全體が撻ぢれるやうに大きく揺れ、殆ど無意識に部屋を飛出し、壁に掬つかまりながら入口のドアを排して外へ出ました。何しろ震幅一メートルとかいはれた激震でしたから路上に停つてゐた自動車が獨りでに動いて一間も先へ移つてゐる有様で、眞向うの三菱本社の建物は新館と舊館との繼ぎ目が口を開いてしまつてタイルがガラガラと六階五階の邊から降つてくるといふ騒ぎ、絶え間なく揺れる大地にともすれば足を取られて何か支へがなければ轉びさうに

なるので、一瞬茫然として土煙の立登る四邊を眺めてをりました。忽ち氣がついて岩崎家庭事務所その他の煉瓦造の建物を見ますと、恐らく一舉に壊れ去つたと思はれた二階三階の建物が何と儼然としてどこに地震があつたかといふ顔をして鎮まり返つてをるには驚きました。慎重に設計し入念に施工した建造物はさすがにしつかりしたものだと感心もしました。然し文庫のすぐ西側近くに聳えてゐた内外ビルといふ七階ぐらゐの建物は、九分通り完成して外装最中の所でしたが、基礎工事の不備から最初の一搖れでパッサリ瓦壞し、瞬時に潰え去つたので、これは同僚の高橋君が三階の窓口から之を目撃した所で、餘程のショックを受けたと見えて蒼然となつて階段を駆け下りて來られたやうなわけでありました。これでは市中の木造住宅や商店などはどうなつてゐるかと心配になりましたが、晝食時刻に當りますのに係員諸君の辨當の註文も出来ない仕儀になつたと思はれましたので、即刻小使を走らせて東京驛の賣店でパンその他食へさうなものを買いにやりました。然し無駄でありました。驛の賣店に人ツ子一人居ず、食へさうなものにはガラスケースの中に一トかけらもないといふ報告で、恐らくすぐ買占められたか掠奪されたのでありませう。これがたつた十分も経たない大搖れ直後のことでもあります。餘震は絶えず襲つて來るので極めて不安な氣持ちでしたが、私は學校時代から聞いてゐた大森房吉先生などの御説に多大の信頼を置いてをり、最初の衝撃に堪へた建物は餘震で倒壊することは決して無いといふことを信じてをりましたので事務所の方は先づ大丈夫だと觀念し、火の見廻りをした上で二階三階へ上つて見ますと、或る一室だけ大きな書架がドアの上に倒れかかつて扉が開きません。別の或る部屋は通風のため扉を少し明けてあつたのですが、扉と樞との間に倒れた書棚が挟つてドアが締りません。萬一を慮つて書架と書架とを連結しておいた厚み一寸以上の長方形の板きれなどはたわいもなく換ぢ切れて、重い本の詰ま

つた棚がひつくり返つてゐた始末です。然し本には損傷はありませんので安心し、震災に付きものの火の方が心配なので向ひの本社の六階屋上へ餘震によるめく足を踏みしめながら出て見ますと、倒壊家屋は案外目に入らなかつた代りに六ヶ處から黒煙が燎々と立登り、風に靡いて凄じい火の手が見えました。尤もこれは下町方面で、山ノ手一帯には一向火災の様子は見られませんでした。そこで下へ降りようとしますと、六階の社員食堂の入口で呼び止められ、臨時に社員のために晝食の用意をしたから、何にもないが社員外でもかまひませんから先づ腹拵へして行つて下さいと云はれるので、魚の煮つけに澤庵か何かで井飯を御馳走になつて部屋へ歸りました。所員の諸君も當然仲間に入つて貰ふ所でしたが、私が本社の屋上へ行く前にそれぞれ心配なこととせうから自宅へ歸つて頂くことにし、和田さん初め岩井君・秋葉君・高橋君その他みなもう居られなかつたのです。そのうちやがて一時間近く経つたせう、小使の一人が自轉車で神田の自宅を一寸見て来て、火の廻りが早くもう全焼してしまつてゐたが幸ひ家族に怪我もありませんでしたので、すつかり観念して、もう一人の小使と一緒に今夜はここを守りますと云つてくれましたので、氣の毒でありましたがまた心強くも感じました。それに頗る氣のきいた男で、出たついでに私の赤坂の家も大急ぎで見に来て、潰れずにゐるのを確めて来たとのことと、これにも一ト安心していくらか氣持ちが落ちついて來ました。然し餘震は絶え間なく襲ひ、路上に置いてあつた自動車は獨りでに動き出して一メートルぐらゐる前へ出たり後へさがつたりするので兎角足がふらふらしてどうも不安な氣が去りません。それでもいくらか氣持に餘裕が出來ましたので、改めて近所を見渡しますと、丸ビルは前年に竣工したばかりなのですが二階と三階の間あたりにすつかり罅が入り、化粧張りの煉瓦が大分剥け落ちてをり、南の方を見ると、今の第一生命のビルのある處に警視廳がありました。盛に

燃えてをり、ポンプが數臺濠の水を景氣よく掛けてゐるのですが火勢の方が強く、餘炎は有樂町方面までを總舐めに
してゐる有様でしたが、文庫は大分離れてゐる上に、その間には帝劇・東京會館・商工會議所などがあり、更に三菱
の赤煉瓦の建物が幾個もあるので、殆ど火の心配はない見透しはつきました。その時駒込の新館建築の現場から若い
人が自轉車で飛んで来て、あちらは全然損傷もなく、工事もほぼ九分通り終つて内部の化粧や細部の仕事が残つてゐる
だけなので、様子によつては今直ぐに移轉して來られても大した支障はありませんといふ傳言を齎してくれました。
その好意を謝すると共に、今後どうなるか分らないから、若し引移るやうなことになるならよろしく頼むと答へて引
取つて貰つた次第でした。そのうちに日もやうやく暮れかかり、警視廳の火も燃えるものだけ燃やし盡して下火に
なり、あたりも少し靜かになつて來たので、戸締りをもう一度見廻り、あとは二人の小使によく頼んで一應宅へ歸る
ことにしました。(この時岩崎男は大磯の別邸に行つてをられて未だ歸京されず、桐島氏も避暑地から歸られず、留
守であつたやうに思ひます。相談役の上田先年は春から渡歐中でしたが、丁度この日の朝乗船が神戸へ入るといふの
で令息と大學の書記の清島君とがお迎へに出かけた所で、後に聞くと下り特急が三島あたりへ差しかかつた時地震に
ぶつかつたのださうであります。そんなわけでこの日は萬事家庭事務所の方々特に男爵の秘書山崎正秀氏などの指揮
に従つたと覺えてゐます)。

さてその夜は家へ歸つたものの、赤坂の田町を焼いてゐる火の手が私の宅の方にも廣がつて來ないとも限らず、近
隣の人たちも戸外へ出たり入つたり、不安の面持ちで落ちつかずにゐましたが、私も丸ノ内方面の空を焦がす赤い火
の手に大丈夫とは信じつつも萬一を慮つて氣が氣でなく、まんじりともせず一夜を過しました。翌朝夜が明けるの

を待ちかねて家を出で、田町から溜池あたりの潰れた上に焼けた家の餘燼を踏み越えて歩いて行きますと（無論電車などは通りません）、日比谷近くで偶然下町で焼け出された叔父夫婦に出遇ひました。實は今丸ノ内を通つて來たのだがかねてモリソン文庫のことは聞いてゐたから少し廻り道をして前を通つて來たが無事だつたと知らされて初めて胸を撫で下しました。それから文庫に近づきますと昨日とは打つて變つた大混雜で、宮城前の芝生は避難者の群れで文字通り立錐の餘地もなく、三菱のビル街の路上も人や荷物が溢れるやうで、やつと掻き別けて歩くやうな始末でした。事務所に着くと、一夜を籠城してくれた二人の小使が悲壯な目で迎へてくれましたが、深く二人の勞を犒ふと共にお互に文庫の無事であつたことを喜びあひました。係の諸君は大抵山ノ手住ひでありましたため焼けた人は殆どなく、そのうちポツポツ集つて來られました。その協力を煩はして早速善後の仕事に取りかかりましたが、これは水の騒ぎの時に比べては至つてラクでありました。

この震災で都下の圖書館の蒐書や私人のコレクションの焼亡したことは夥しいもので後に内田魯庵氏や和田萬吉先生が詳しく書かれましたが、モリソン文庫が幸に厄を免かれたことは何より仕合はせでした。然し數日經つて見ますとやつぱり二點だけは焼いてしまつてゐることが分りました。勿論それは文庫の外であります。一つはずつと前から佛教學者の古屋諦道といふ方が毎日勉強に來てをられました。この方はもう亡くなりましたが當時淺草の山谷の邊の一寺の住職でありましたが、西藏語も讀める學僧で、丁度地震の頃にはポターニンの *Tangutsko-Tibetskaya* *Okraina* *Kitaya* i *Chentral'haya* *Mongoliya* (二卷) を讀んでをられました。當時特別な筋へは館外貸出の内規があつたので、同氏にこの書の貸出しが認められ、地震の日の朝借用に來られたわけでありました。後で聞くと歸宅

の途中で地震に遇ひ、自坊へ近づいた時は火を逃れる群集に取圍まれて身動きも出来ず、背中に背負つて居られたものがいつの間にか脱落して行方が分らなくなつてしまつたといふのであります。幸にこれは後に文庫で補充が出来たさうであります。萬一出来ない場合には私は山崎直方先生が一部持つてをられるのを先生の書齋で拜見してゐるので、先生に懇望して何とか譲つて頂く積りでをつたのであります。もう一つは岩崎文庫本の光悦の謠曲百番の一つで、「軒端梅」の一帖であります。これは和田維四郎先生の令息幹男氏が經營してをられた精藝出版社が、光悦本の謠曲百番を原本通りに色刷のファクシミール・エディションで複製されるといふので撮影のために貸出してあつたのであります。同社の炎上と共に失はれたのは惜しいことでした（精藝出版社は、大塚巧藝社がまだ擡頭せず、神戸の光村の原色版印刷もまだ盛名を唱はれない頃、美術品の複製印刷では國華社の木版色刷以外に拮抗するものもない美術出版社でありました。「絶代至寶帖」その他で學界に貢獻する所が多かつたことは、美術の研究者のよく知る所でありませう）。それからこれは稍々餘談に互りますが、四五日すると大學の圖書館が焼亡したといふ噂が廣がつて來ました。あの廣い構内のことではあり、ファイア・ブルーフの建物が一炬に亡びるなんていふことは先づあるまいと思つてゐたのですが、三菱の社員で本郷に住む人が今日現に僕がこの眼で確に見て來たのだから間違ひはない。圖書館は勿論文科の本館や研究室は廢墟になつてゐるといふ報告です。よもやとは思ひつつも、母校のことではあり、形式的にはありますが當時なほ私は史學研究室の副手といふ名儀は残つてをりましたので見舞つて見る必要もあり、また七日の日だかに上田先生も清水港から船で品川へ廻航歸京せられるといふのでお見舞つてお迎へに行くことにしました。然し神田橋が焼け落ちてしまひ渡ることが出来ません。仕方がないので焼けずに残つた水道の太い鐵管

を傳つてやうやく錦町の方へ渡り、お茶の水から大學へ来て見ると成程焼けてしまつてゐる。圖書館の書庫のあたりには洋書が何冊も積み重つたまま灰になつてゐて一寸さはれば忽ち崩れてしまふ。附近には宮中から特にお貸渡しになつてゐた満文の金字藏經の燃え残りが二タひら三ひら點々と散亂してゐるやうな有様で實に慘憺たる姿です。マクス・ミュラー文庫や竣工したばかりの書庫に入れてあつた Kohler 文庫なども跡形もなく、在學中庫内で親しんで來た數々の和漢書・洋書も、どこへ行つたか影もありません。當時「典籍の廢墟」といふ言葉が流行しましたが、全くその通りです。正門を入れて公孫樹の並木を少し行つた左の方が史學研究室のあつた建物でしたが、煉瓦の壁やケープルなどが崩れ落ちて折り重なつてゐるだけで書棚や机の置いてあつた見當すらつきません。搔きわけて見れば灰ばかりで、前年支那から買つて來た各地の寫眞帖や案内記、繪葉書の類から方々で寫した寫眞のフィルム三百枚、舞臺姿の役者の人形など影も留めてゐないので、僅かなものながら惜しいことをしたと思ひました。それから谷中清水町の上田先生の御宅へ行きまして御家族も御家も無事だつたのを喜んでゐる所へ品川から先生や令息なども歸着されました。先生は神戸でこの大災を聞かれると、もう東京には何にも無い、家族や家は勿論、親戚故舊、友人知人一切無いものと諦め、腹を据ゑて歸つて來たから、かうして皆に會へたことはほんとに嬉しかつた。然し沿道の慘狀も目撃して來たが、今度あちらで訪ねたヴェルダンの激戦場の跡などはとてもこんなものではない。その荒涼言語に絶するものがあつたといふやうな御話も出ました。さうして「大學で圖書館を焼いぢまつたのは已むを得ないこととして僕はこの際何言も云はないよ。然しだ、貴重書を救うために火の中へ飛込んで、焼死なないまでも一人や二人火傷ぐらゐした人間があつたといふ話も聞かないね」と云はれたことを忘れません。——話が太へん横道へ逸れました

が、この頃になりますと丸ノ内も大分平靜になつて銀行會社なども平常の通り店を開くやうになつて來ましたが、街路に充滿した避難者の數は中々減ぜず、食料の不足から丸ビル一階の明治屋の店などはショーウィンドウが全部破壊されて罐詰類などがすつかり掠奪されたやうなこともあり、朝鮮侵來といふデマなども手傳つて何となしに物情騒然たるものがありました。何分未曾有の變事の後で全く無統制な群集が群つてゐるのでどんなことが出來するか氣がかりであり、思ひもよらぬ餘波を被つて文庫の書物が毀損せられるやうなことがあつては大變だと思ひ、いざといふ時には戒嚴司令部に頼んで特別の保護をして貰ひたいと思ひ、數日の間は司令官宛の請願書を懷にして毎日出てゐたことを覚えてゐます。幸にこれは實際使用せずに済みました。實はそこまで心配したものでした。そのうち、相談役の諸先生の間では急速に協議が進行して財團法人に登記の手續ぎに取かかることとなり、その名も「東洋文庫」と呼ぶことになりました。この時白鳥先生だけはどこまでも圖書館を附屬設備にした研究所の設立を提案されたのでしたが、研究事業も同時に行ふといふ約束の下にやはり本體の圖書館で行くといふことに一決し、名稱も白鳥先生はアジア文庫としたいと唱へてをられました。これは邦人にはアジア云々の稱は熟してゐないので強く主張はしないと云つて撤回せられました。建築の方も仕上げの段階に入つたわけでありませんが、地震の教訓を取入れて模様替へになつた點も二三ありました。例へば書庫の數多くの窓はボタン一つ押せば電流の加減で一齊にブラインドが下りるやうに設計してあつたのですが、地震と一緒に電氣が止つて三越だかが窓の戸締りが出來なかつたといふやうな話から、いざとなつて憑みになるのは人手だといふことになり、一つづつ手で開閉することになり、その上に一重の窓の扉をワイヤーグラスの二重扉にするといふことなどがその一例でありました。また用心の上にも用心といふことで、少し不

體裁ですが書庫に入る電流のコードは、之を抜いてしまつて庫内と電源とを完全に絶ち切らなければ書庫入口の大扉が締らぬやうにすることなどもその一つでした。そのうちに初年度の豫算案も作つて發足と同時に評議會にかけねばならず、その評議員も委嘱しなければならぬといふ所まで來ました。それで上層部でいろいろ相談があつた結果、評議員には東西兩帝大の總長として東京の古在由直博士、京都の荒木寅三郎博士、私學の代表といふ意味で早稻田の總長高田早苗博士、慶應義塾の塾長鎌田榮吉先生、それに學界全體の最長老・總元締といつた意味で帝國學士院長の穂積陳重博士が推されたのでした。最初からの相談役として文庫をここまで持つて來られた井上・小田切・桐島の三氏と上田・白鳥兩先生が同じく評議員となられたことは申すまでもなく、設立の當初は設立者の意志としてこの五人の方々が理事となられ、井上さんが理事會の互選で理事長に就任せられることになりました。岩崎男にも設立者として役員のうちに入つて頂いてはといふ議もありましたが、男爵は至つて謙抑な方で一切自分を表面に出すことを嫌はれ、Endowmentとして社會に提供した以上は理事者の方々に適當に運営して下されば結構ではありませんか。ただ何か援助すべきことが起れば一市民として應分のことは致しませうと云はれ、遂に役員陣には加はられません。ただ。法人となつてからも時々文庫の様子を報告に行きますと、さうですか、少しは御役に立つてゐますかと云はれるだけで、何一つ註文がましいことは只の一度も云はれたことがありませんし、またその名を文庫に冠することも固く避けられました。常に濫い目で文庫の行くへを見守つてゐて下さいました。世には大原社會問題研究所とか、北里研究所とかいふものもありましたが、さういふことを嫌はれたのであります。

井上さんは大震災の當夜、新に出現した山本(權兵衛)内閣の大藏大臣に親任せられ、非常に忙しくなられたにも拘

はず、文庫のことは熱心に面倒を見られ、さあこれからの仕事は俺と君たちとだけでどんどんやつて行くから、些末なことで一々偉い先生方に御心配をかけないやうにしる、俺が萬事引受けるから相談ごとは何でも俺の所へ持つて来いと云はれ、若い者に十分働かせて下すつたことは今でも難有く思つてゐます。開館も近づいたので試みに文庫員處務規定といふやうなものを起草して持つて行きますと、一體文庫で何人の人が働いてゐるのか。これは君何百人もの人が働いてゐる處でなら要るかも知れないが十三四人の事務所なら必要はない。君の机から見渡したなら誰れがよく努め誰が怠けてゐるか一目で分るぢやないか。またオフィスといふものは大抵朝九時頃に出て来て夕方一應の仕事が終れば歸つて行くにきまつたものだ。遅刻した人、早退ける人に君がわけを聞いて見て一々納得出来る理由があるならそれでいいではないか。もし理由なく毎日遅刻したり、毎日早退けをするやうな人は斷つてしまへばよろしいと云はれ、案文は忽ち紙屑籠へ丸められてしまひました。幸ひ私の家が理事長邸に極く近かつたので、毎週二回ぐらゐづつは推參していろいろ指示を仰いだり、報告をしたり、小切手にサインを御願ひしたり、随分頻繁にお訪ね致しましたが、裁斷流るる如しといふ有様で、大概の用事は十分かそこらで濟み、後は新刊の評判とか、ゴルフの話とか、時には時局談などを伺ふのが常でした。朝の七時頃から訪客が詰めかけてゐるので、こちらも氣兼ねをしますと、なに皆俗用の客ばかりさと悠々たるもので、忙中閑の面影を見せてをられました。第一回の豫算を作らねばならなくなつた時も、片手に算盤、片手に硯と筆とを携へて應接間へ入つて來られ、自ら算盤をパチパチ弾いて一ツ支出の部、1.人件費いくら、内譯何がいくらとメモに書いた下書きを見比べながら榛原の野紙行間を埋めて行かれる。一通り終つた所で總計を出すといつて半ば獨り言のやうに、また半ば冗談めかして願ひましては何千何百何十圓ナリ

などと勘定をして、もう一度今度は御破算で願ひましては……など繰返しながら忽ちに原案が出来てしまひました。さすがに銀行家として鍛へられた専門家ですからこんなことは御手のもので、何億といふ金ばかり扱つて來られた方としては年額十萬圓ぐらゐの豫算案などは朝飯前の仕事であつたでせう。(十萬圓といつても當時の金としては大きなもので、今なら四五千萬圓にも當るでせう)。兎に角現職の大藏大臣が直々筆を執つて書き記された豫算案など些か豪とするに足りると思つたことでした。このやうに井上さんは決して名儀だけの理事長ではなく、自分でこの文庫運営の衝に當るといふ概があり、それだけ熱意を持つてをられました。ですからあの清朝の故宮から流出した宮中本の康熙實錄(後半)や光緒實錄が賣りに出た時など、冊數としては相當なものでしたがたつた二部の書物の價が文庫一ケ年の圖書購入費總額に上まはるといふわけなどで御相談に上りますと、文庫で買はなければアメリカへ行つてしまふといふのか。よろしい買ひなさい。金は何とかするといつて快く私どもの請を容れて下さつたやうな次第なのでした。さうして出來上つた豫算案は期せずして當時私どもの習つた圖書館學の第一課にある、總支出の三分法——人件費、圖書費、運営費各三分ノ一といふシステムにはほぼ合致してゐたわけでありました。

新館もすつかり出來上つたので初秋の天氣のいい日を見定めて文庫の引越しが始まりました。駒込の方は秋葉君を大將にして小使の一部や製本工・出入商店の若い衆などに手傳つて貰つて受取方にまはつて貰ひ、丸ノ内の方は和田さん、岩井君を主として専ら積出し役に當つて貰ひました。大切な本を運ぶのですからガラクタを運ぶやうな眞似は出來ません。當時は今のやうにコンテナなどといふ氣のきいたものはありませんから、一々念を入れて包装し、丁寧にトラックに積み込んで私は助手席に乗り込み、水に傷んだ本を運んだ時を回想しつつ日に幾度となくお茶の水が

ら大學の前を通つて駒込と丸ノ内との間を往復したものでした。やがてその排架も濟みましたので、もういつ開いてもいいといふ所まで漕ぎ着けましたが、この書架に就いて一言させて頂きます。その頃我が國にもステイル・スタックが大流行の時でしたが、設計者の櫻井博士はどうしても之を採用されませんでした。博士は日本の氣候に照らして金屬製の書架は梅雨期などに水滴を結ぶ憂ひがあるといはれて木製の書架を主張されました。また硝子戸を取付けることにも反對されましたが、これは私の狭く貧しい知見からもぜひさうして欲しいと思ひましたが、その通りになりました。その代り塵除けにカーテンは掛けることとし、メクラ縞の厚手の布を用ゐましたが色合ひといひ感じといひ、丁度北京のモリソン邸の書庫とそつくりになつたのも偶合ながら一奇縁でありました。——かくて大正十三年十一月十九日文部省から法人設立の許可も下り、愈々十一月二十九日を以て世間に向つて開館の披露をすることに成り、この日と續く二日を期して稍々大がかりな記念展覽會を催すことになり陳列品の選定や展觀書目の編纂、諸方への案内狀の發送などで庫員一同多忙を極めました。またせめて洋書の著者名カードのデュブリケートを作らなければならぬといふので、臨時雇のタイプストが六七人働いてをり、急に賑かになりました。展覽會は甲・乙の兩部に分ち、甲にはモリソン氏の蒐集書とその後の新加洋書のうちから選ぶこととし、乙の方には舊岩崎文庫の和漢書から目星しいものを陳べるといふことになり、甲は更に三部に分ち、第一にはこの年がマルコ・ポーロ（一二五四—一三二四）の歿後六百年に當るといふので幸ひモリソン氏もその新古刊本をよく取揃へておましたので之を陳べることとし、第二には支那・日本に於けるクリスト教の初期傳道に關する稀觀書を選び、バルトリその他の日本西教史の代表的なものや日本の所謂吉利支丹版などの珍しいもの、デ・モルガの「フィリピン志」（秀吉時代の日比關係の貴重な記事が多

い)のメキシコ版原本とか、同じくメキシコ版のオヤングレーンの「日本文典」とか bibliophile 垂涎の珍本などを
含めたものを一類とし、第三には廣くインド以東に關する大形の大著述で、特に地理や動植物關係の彩色圖版を主と
するもので、専ら目に訴へて少々素人の度膽をぬくやうなものを展ずることとし、乙類は主として鈔本・刊本とり交ぜ
て珍しくもあり、學問上貴重でもあるものを選び出して甲類に添へることにしました。とても一度や二度で目星しい
ものだけでも陳べられるものではないので、選擇には相當頭を拵りましたが、兎に角展觀目錄に載せたやうなものが
陳列されることになりました。(この目錄の編輯・印刷がまた一ト役で、時間がないのでとても十分なことは望めま
せんでしたが、是が非でも當日までに拵へ上げなければならぬので岩井君と二人で轉手古舞を演じ、牛込東五軒町
あたりの印刷所へは朝暗いうちから出校正に赴き、活字ケースの並んだ工場の一隅で朝食を口にするやうな場面もあ
りました。乙類の原稿は樋口慶千代君が書いてくれたので助かりましたが、甲類の方は急いだための調べ落しや不用
意な誤もあり、今から考へて冷汗ものでしたが、大塚巧藝社で作つたコロタイプの挿繪が十數葉入つた相當贅澤なも
のが出來上りました)。これを閱覽室の階上階下三室に陳べて開館式を待つといふ所まで來ましたが、その支度に忙し
く、私は到々當日まで三日間は文庫の地下に泊込んで駈けまはつてゐました。さてその前日、すつかり書物を並べ、
殊に甲類第三のものは自ら見せ場があるので、どの頁を開いておいたら一番來觀者の注意を惹くかといふので、ここ
でもないあすこでもないと同分苦勞しましたが、先づこれでよしといふ所へ、もう日も暮れ方に近く井上理事長が下
檢分にやつて來られ萬事OKといふことでしたが、井上さんは私に向つて君今晚これをどうする積りかと尋ねられま
した。私は勿論このままにしておきます。各室には二人づつの寢ず番を附け、私も泊りますし、用心の上にも用心は

しますから決して間違ひはありませんといふと、いけません。書庫へお藏ひなさい。何も君自身が運び込むといふわけではない。人に手傳はせてお藏ひなさい。明朝早目に並べればよろしいと云はれるのです。然しこれだけ多數の本を、さうして特に見せたい所を探し出して開いてあるのですからと云ひかけると、いいえいけません。お藏ひなさい。君は大丈夫だといふけれど、今晚どんな意外な事變が突發してこの書物が燃えてしまふとか失はれるといふことがないとも限らない。さういふことがないと君はどうして保證出來ますか。庫へさへ入れておけば萬一の變事があつても、それから先は不可抗力、君に責任はありません。さあお藏ひなさいお藏ひなさいとせき立てられるので、疲れてゐる同僚諸君を煩はし、また小使をも動員して一應庫へ逆戻りをさせました。それを見極めて井上さんはもう大丈夫、今夜は安心して眠りなさいといつて歸つて行かれました。率爾に聞けば井上さんの註文はチト辛くもあり、取越苦勞に過ぎるやうにも聞こえますが、よく考へて見ると一言もありません。井上さんは明斷流るるが如き方でしたが、一面その慎重ぶりはまたかやうな次第でした。なほこの展觀に就いてもう一つ忘れ得ぬことがあります。それは當時内規として東大・京大・史料編纂掛などに限り館外貸出しの特例があつたのですが、慶長十五年長崎版の *Cerqueira, Manuale ad Sacramento* 一冊が京大圖書館に用立ててありました。それを開館式までには返して頂く約束になつてゐたのですが先方にも何か御都合があつたと見えて中々返つて來ません。約束の日は迫つて來ますし、實は陳列書の中にもう加へてしまひ目錄にも載せてしまつたので内心氣が揉めて落着きませんでした。前日になつても到着しません。愈々駄目だつたら當日尋ねる人には事情を話して諒解を求めるより仕方はないと肚をきめてゐました所、當日の早朝、新村先生の御心づかひで京大圖書館の司書藤堂祐範氏が命を受けてわざわざ夜行列車で上

京、本を携へて文庫まで持つて来て下さいました。早速陳列ケースに入れて缺番を満たしましたが、新村先生が約を果された御心添へと藤堂君の勞とを多としたことでありました。

さて大正十三年十一月二十九日、愈々財團法人東洋文庫の開館の日であります。定刻に門を開くや招待した方々が續々と詰めかけて來られました。大臣あり將軍あり、財界の名士あり、いづれも名の響いた名士でみな自家用車を駆つて乗りつけられるトップクラスの人たちばかりで、外國の大使・公使なども見え、ドイツ大使で佛教學者であつたウィルヘルム・ゾルフ氏の顔も見えました。これだけの人を集め得たのも抑々が岩崎男の事業であるといふこと、また招待者が井上理事長名儀であつたことが大いに利いたことと思ひます。この第一日は専門の東洋學者といふ側は案内に入つてゐないので、皆忙しい方ではあり、専門外の人でありますので、ざつと一見して戻られる人が多かつたのですが中に二人だけ非常に長い時間をかけ、目錄の解説と對照して陳列品を穴のあくほど丁寧に見て行かれ、また色々と質問をされた熱心な人がありました。一人は陸相宇垣中將であり、他は今の東伏見邦英氏であります（まだ臣籍に降られない時代で、皇后様の弟君に當られますから久邇宮を名乗つてをられた頃で、學習院の中等部に在學中でした）。宇垣將軍は西洋人の東洋研究があらゆる方面に互つて精緻を極めてゐるのに餘程關心を持たれたらしく、東伏見さんは後年京都大學で美術史を専攻され、卒業後同大學の講師を勤められたほどで、この頃から既に旺盛な好學の念に溢れてをられたからであります。共に當日來賓中の異色として今に忘れずをる所であります。御客さんたちは陳列を見終つた後、休憩室に充てられた講演室で茶菓の接待を受けてそのまま歸られた方もありますが、都合のつく方は残つてをられ、電燈の灯る頃から休憩室を會場として開館を祝つての小宴が催されました。立食の饗應であ

りましたが、名はレセプションのкоктейル・パーティーとは云ふものの、當節流行のビール二杯とカナペ二つ三つでおしまひのお粗末なものではなく、中々豊富な御馳走が出ました。井上理事長以下、上田・白鳥・小田切・桐島の諸理事も出席され、酒の巡るに従つて談笑の聲も賑かに、和氣藹々たるものがあり、係員一同も御相伴に席に連つたのでありますが、席上井上理事長が立つて岩崎男の美學を讃へ、文庫の使命の重きを述べられると共に將來の抱負の一端を披瀝せられ、文庫をして世界の東洋學のメッカたらしめんとの理想を高く標榜せられ、そのためには來賓諸氏の濫ぎ御支援を望むと挨拶を結ばれました。上田先生は丁度その夜令嬢の御婚儀の披露宴がありましたので途中でその方へ向はれましたが、井上さんは私を呼ばれ、さきほど「チャパン・アドヴァタイザー」の社長フライシャーが來たから、このインノーギレションの情景を各國へ傳へると云つたら早速電信を打つと云つて歸つた。君、明朝の歐米各地の新聞には一齊に東洋文庫開かるといふ電報が載る。愉快だねえと云はれ、終始ニコニコして嬉しうにしてをられました。さうしてほほ客も散じた頃、文庫員一同を集めて「これから諸君によく頼んでおきたいことは、今後ここを利用する人に東洋文庫へ本を讀みに來ることは他のどこへ勉強に行くよりも楽しいと思はせるやうに心がけて下さい。外には何も云ふことはありません」と云はれました。圖書館は本をツンドク處ではなく、出來るだけそれが讀まれるやうにし活用されるやうにすることを本旨とするといふのは現今の圖書館學の第一課に謳つてある所でありますが、さてこれが中々實現むつかしいことは誠に残念であります。井上さんの要望はこのところを指摘されたのだと思ひ、私は常々感心してをります乾隆帝の言葉、——四庫全書が成り、内廷四閣の外に江浙は人文の淵藪と號して學者に嘉惠するために所謂江南の三閣を設けました時に特に發した上諭を想ひ起しました。曰く「原以嘉惠士

林、俾_レ就_レ近抄錄傳觀、用光_ニ文治_ニ、第恐地方大吏過_レ於珍護、讀書稽古之士、無_レ由_レ得窺_ニ美富_ニ、廣布流傳_上、是千箱萬帙徒爲_ニ插架之供_ニ、無_レ裨_ニ觀摩之實_ニ、殊非_レ朕崇_ニ文學_レ、傳_ニ示無窮_ニ之意_上と。うるさいことを云つて讀者が寄り付かなくなることを戒めてあることは、職を圖書館に奉ずるものの心得を端的に道破してゐると思はれる言葉であります。

これで「東洋文庫は生れ」ました。長いこと愚にもつかぬ回想雑談で貴重な紙面を汚しましたが、編輯者から御注文もあり、それに甘へて兎角餘談にも互りました。大へん恐縮に存じましたが、私のこの話は一と先づこれで終りに致します。

附記

(一) 大正十二年の春からモリソン氏蒐集の圖書の目録を印刷し、出来れば開館式の日に関係へ寄贈する心組みでその仕事に取かかつてゐました。これは「モリソン文庫」がどのやうな内容を傳へるのが目的で、記念の意味で世に遺すことが主でありましたので、文庫譲渡の際にモ氏の作製した著者名カタログをほぼそのまま附印することにしたもので、英文書・佛文書といふやうに用語別のもので分類目録でもなく、完全な一貫した著者名目録でもなく、色々不満な點もありましたが取敢へずそのまま出すことにしたものでした。さうして英文の一部一冊が將に刷上らうとする時、九月一日の震火の際、有樂町のチャパン・アドヴァイザー社の印刷場で全部焼けてしまひ、校正刷が一二通残つただけでありました。それで校正刷に基いて再印に著手し、佛文書以下の部分も印刷を進めることにし、甚だ不完全なものでありましたが開館式まではどうやら間にあひました。これが“Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison, now a part of the Oriental Library, Tokyo, Japan.” Tokyo, 1924. 2 vols. と稱するもので、これに高橋邦枝君を煩はして書いて貰つたモリソン氏の小傳を附載したものであります。巻頭のモリソン氏の稿に成る序文も文庫の由来や内容を知るに恰好な資料を供してくれま

(二) 震火のために焼けたものには椅子・テーブル・書架その他家具一式があります。よく乾燥した木材が急に得られないの

で、その或るものは上海へ注文したものもあり、今現に存するものでも來賓室・會議室の卓子や帽子掛・外套掛の類はそれでありませんが、後者の高さが少し高過ぎるのは、西洋人向きに出来てゐたレディー・メイドのものを買ったからであります。

正誤表

第(三)回にも思はぬ誤記もあり、校正の見落としもありましたので、左に正誤乃至一二の補記を試みます。

正

頁

行

一四 餘・四二

與四二(昭和二十九年までは存命)

六

四

一・繁・勝次

トル

七

一 最終行に次の一項を補入します。

六頁

河上俊彦氏。滿鐵理事。元ロシア各地の總領事。日露戦争の時ウラヂウオストクの我が居留民引上げに手腕を振るはれ、旅順開城の後乃木將軍とステッセル將軍との水師營會見の際通譯を勤められた人。龍居氏の一行に加はり北京に居られました。昭和十年歿。

二 昭和三十五年度に於ける東洋文庫

東洋文庫は、大正六年、故岩崎久彌氏によつて中華民國總統府顧問ジョーシリアーネストロモリソン氏の藏書が購入され、東洋學關係の専門圖書館としてモリソン文庫が設立されてより、昭和三十五年をもつて、ここに四十四年、大正十三年の財團法人東洋文庫の發足以來三十六週年を迎えた。その間、今次大戰後の經濟變動によつて致命的な打撃を蒙り、創設以來の傳統を有するその研究・出版事業、ならびに藏書の補充を従來通りにすすめることは、一時非常に困難になつたが、幸い、文部省、國立國會圖書館、および内外の個人・團體からの援助を得て、事業を活潑に繼續し得るに至つた。昭和三十五年度においても、ひきつづき文部省大學學術局當局を通じて日本政府から、あるいはハーヴァード・エンチン研究所から、それぞれ補助金を受け、また、昭和三十四年には、本文庫に財政的援助を與えてその事業を促進するため、東洋文庫維持會が設けられたが、その後も、多くの團體が文庫の使命に深い理解を示されつつあることは、感謝に堪えない。

文部省の補助金による三十五年度の出版物には、榎一雄著「エフタル勃興前後の中央アジア」(論叢四六)、「欽定西域同文志」上(叢刊一六)、「歐文紀要」No. 20があり、五月十一日より六月十五日、および十月五日より十一月九日にわたる春秋二期、十三講師による「東洋學講座」を公開し、十二月中旬には、イタリア文化會館、毎日新聞社との共催のもとに「中央アジア考古美術寫眞展」を開催した。

文部省の補助金を得て三十五年度に購入した圖書は、單行本、和・漢・朝鮮書三八五部、洋書一九七部、計五八二部、定期刊行物、邦・華文一六二部、歐文六四部、計二二六部である。このほか、三十五年度の年間交換圖書數は、國內國外の研究者および研究機關に寄贈した本文庫關係の出版物、單行本二、一五七部、同じく定期刊行物四、一七八部、内外からの受贈圖書、單行本七、二六六部、定期刊行物一、四〇三部に達した。以上の入庫圖書については、三十五年より、和・中國・朝鮮書、洋書の二部に分つて「東洋文庫新着圖書目錄」を印行・速報することとなり、すでにそれぞれについて第四號までが刊行された。單なる古資料の保存圖書館としてではなく研究圖書館として斯學の進展に即應し得るためにも、戰中戰後の空白を補填し、また新刊圖書を逐次收藏して、その水準を維持することは、東洋文庫に課せられた重要任務の一つであるといえよう。

次代の中堅となるべき學徒を養成する研究生制度は、本文庫が戰前から意を注いできたところであり、昭和三十一年度以降、文部省はその補助金の一部をこれに充てることを認められたが、本三十五年度においても、二名の新進學徒が研究生として採用され、ハーヴァード・エンチン研究所資金による研究生とともに研鑽に努め、著々その成果を擧げている。

三十五年度にはまた、前年度にひきつづいて、文部省科學研究費交付金（機關研究）による「中世以降における東アジア諸地域の貴重文獻の整理研究」が進められ、全國各地に散在する古刊朝鮮本のマイクロフィルム、一三三三、一四七齣、および米國國會圖書館所藏舊北京圖書館善本のマイクロフィルム、二五八リールが蒐集された。本機關研究は、さきの大英博物館所藏スタイン將來敦煌文獻マイクロフィルムの收藏等々とともに、東洋文庫が、内外の研究

者・研究機關の要請に應じて、東洋學に關するマイクロフィルム・センターたる機能を整備せんとする事業の一環であるが、本三十五年度までには、ようやく朝鮮本の貴重書について、ほぼその撮影を完了したにとどまつて、漢籍稀觀書の撮影整理にはほとんど未だ著手し得ていない状態にあり、今後の事業の永續が切望される。

以上のほか、ロックフェラー財團の補助によつて研究活動をおこなつてきた近代中國研究委員會は、その成果の一部として「近代中國研究」第四輯を公刊し、また明代史研究室は、アメリカの明代傳記辭典編纂計畫に協力して、「明代史研究文獻目錄」を編纂・印行した。

昭和三十五年度において特筆すべきは、研究部における研究室體制の確立、また財團法人開國百年記念事業會の藏書その他を引繼いだ近代日本研究室の發足、および情報室の創設である。日本近代史を専門とする研究機關がまだ存在しない我が國の現状にあつて、明治以降の豊富な傳記資料を中心とする本研究室の設置は、この分野の研究者に多くの便宜を供し得るものと思われる。また、内外の研究者・研究機關の要望に應じて、文庫はその情報・連絡の機能を整備することとなつた。インフォメーション・センターとして、この情報室の今後の充實と發展とが望まれる。

以上の機構改革にもなつて、昭和三十五年度には、次項職員表に見られるように、人事面に大幅の移動・増員がおこなわれた。

研究顧問兼東洋學連絡委員會委員藤田亮策博士は、昭和三十五年十二月十二日死去せられた。長年月にわたつて東洋文庫の發展のため盡力せられた博士の靈に對し、感謝を捧げ、深く哀悼の意を表する。

なお、昨三十四年度の年報に掲載の分にひきつづき、財團法人東洋文庫創立三十五週年に當つてG・トゥッチ名譽

研究員が次のメッセージを寄せられた。

東洋文庫の創立三十五週年を記念して、貴文庫のこれまでの活動に對し心からの賞讃と感謝の言葉を申し述べ得ますことを、非常な喜びに存じます。東洋文庫がこれまでに挙げられた成果の悉くを僅か數行にまとめ上げることが不可能でありますし、また、東洋の文化の分野に於ける研究の進歩に對して洩り知れず貢獻している貴文庫の多數の出版物について、そのあらましを述べることは、たとえどんなに簡単に述べるにしても、不可能なことであります。貴文庫がこの目的達成のために過去三十五年間に拂われた御努力が完全に成功されたということ、また東洋文庫の活動に参加なさつたすべての方々が、この成果に誇りをお感じになるべきだということを申し述べるのは、公正な申し分だと信じて居ります。これらの成果は、東洋文庫關係者各位の非常に高い學識、崇高な目的への献身、並びに洋の東西を問わずこの活動に寄せられた全世界の理解などを通じてなし遂げられたものであります。出版物は歴史、藝術、科學、考古學、哲學など廣範圍にわたり、數種類のシリーズとして刊行されています。これらは種々異なる主題の取扱い方法にもかかわらず、東洋文化全般についてより良く、より深い知識を世界中に擴めることを唯一の目的とし、新しい情報を提供し、東洋の文化に關する最新の研究をまとめて、それと關連のある一連の思想にとつて、その理解を助けるなど、學者及びこの貴重な文化遺産の一部分だけでも知ろうとする人々すべてに、非常に豊富な資料を提供して來たのであります。

貴文庫發展の畫期をなす重要な里程碑であり、また東洋文庫の皆様が大きな満足と誇りを感じられるこのめでた

い創立記念日に心からの祝詞を述べるに當り、貴文庫のこれからの御發展ならびに貴文庫が文化の世界でますます
廣く認められ、東西の學者から等しく感謝されるであらうことを信じて居ります旨を、同時に申し述べさせていただきます
だきたいと存じます。

ローマ大學教授・イタリア中東亞研究所長

G・トゥッチ

三 職 員

理事會 理事長 細川 護 立 (文化財保護委員會委員)

專務理事 榎 一 雄 (財團法人東洋文庫研究部長 東京大學教授)

理事 有 光 次 郎 (株式會社吾孀製鋼所取締役會長)

岩 井 大 慧 (國立國會圖書館支部東洋文庫長)

小 倉 正 恆 (アジア文化圖書館理事長)

澁 澤 敬 三 (日本民族學協會會長 國際電信電話株式會社會長)

德 川 宗 敬 (日本博物館協會會長 日本圖書館協會顧問)

山 本 達 郎 (東京大學教授)

和 田 清 (日本學士院會員 東京大學名譽教授)

監 事 岡 東 浩 (東山農事株式會社常務取締役)

評 議 員 石 黑 俊 夫 (三菱地所株式會社會頭)

磯 野 長 藏 (株式會社明治屋本店社長)

梅 原 末 治 (京都大學名譽教授)

大 濱 信 泉 (早稻田大學總長)

總務部

部長

茅誠司

(東京大學總長)

小泉信三

(日本學士院會員)

新村出

(日本學士院會員 京都大學名譽教授)

高橋龍太郎

(協和發酵工業株式會社取締役)

高村象平

(慶應義塾大學總長)

平澤興

(京都大學總長)

俣野健輔

(飯野海運株式會社社長)

河野六郎

(東京教育大學教授)

平野豐

箕輪友吉

助手

穴澤サクノ

丸龜美貴子

三井惠子

用人

奧島久仁子

勝間袈裟五郎

勝間勇次郎

圖書部

司部
書長

熊田 信次郎

長本 英雄

岩井 大慧

石黑 彌致

宇都木 章

金子 良太

田川 孝三

森岡 康

榎一 雄

岩井 大慧

岩村 忍

梅原 末治

辻直 四郎

津田 左右吉

原田 淑人

藤田 亮策

研究部

研究顧問
部長

(京都大學人文科學研究所教授)

(日本學士院會員 東京大學名譽教授)

(日本學士院會員 早稻田大學名譽教授)

(日本學士院會員)

(奈良國立文化財研究所長) 昭和三十五年十二月十二日死

東洋學連絡
委員會委員

村田治郎
(京都大學教授)

去

山本達郎

和田清

岩井大慧

梅原末治

金倉圓照

(東北大學名譽教授)

杉本直治郎

(廣島大學名譽教授)

塚本善隆

(京都大學人文科學研究所教授)

辻直四郎

津田左右吉

仁井田陸

(東京大學東洋文化研究所教授)

原田淑人

福井康順

(早稻田大學教授)

藤田亮策

松本信廣

(慶應義塾大學教授)

宮崎市定 (京都大學教授)

村田治郎

山本達郎

和田清

名譽研究員

P・ドゥミエヴィル (コレージュ・ド・フランス教授)

S・エリセイエフ (前ハーヴァード・エンチン研究所長)

W・フックス (ケルン大學教授)

B・カルルグレン (スウェーデン王立極東古代博物館長)

E・O・ライシャウアー (ハーヴァード大學教授、ハーヴァード・エンチン研究所長)

(所長)

W・サイモン (英國學士院會員、ロンドン大學教授)

G・トゥッチ (ローマ大學教授、イタリア中東亞研究所長)

研究員 (專任) 北村甫 (東京大學講師)

高島稔

永積昭

松村潤

研究員(兼任) 青山定雄 (中央大學教授)

荒松雄 (東京大學東洋文化研究所助教授)

市古宙三 (お茶の水女子大學教授)

岩生成一 (東京大學教授)

梅原末治 (京都大學名譽教授)

神田信夫 (明治大學教授)

河野六郎 (東京教育大學教授)

佐伯富 (京都大學教授)

末松保和 (學習院大學教授)

鈴木俊 (中央大學教授)

周藤吉之 (東京大學教授)

關野雄 (東京大學東洋文化研究所助教授)

田中正俊 (橫濱市立大學助教授)

中嶋敏 (東京教育大學助教授)

藤枝晃 (京都大學人文科學研究所助教授)

三根谷徹 (東京大學助教授)

研究生

護 雅 夫

(東京大學助教授)

山 根 幸 夫

(東京女子大學教授)

山 本 達 郎

(東京大學教授)

生 田 滋

池 田 溫

岡 田 英 弘

菊 池 英 夫

佐 々 木 正 哉

斯 波 義 信

鳥 海 靖

西 田 守 夫

山 口 瑞 鳳

石 田 扶 美 生

岩 田 澄 江

大 澤 仁 子

大 場 千 賀 子

助 手

寫眞技師
寫眞助手
製本技師

片桐一男
川合ナオエ
草野祐子
國岡妙子
竹之内信子
秩父良子
寺山祐子
平野玲子
廣瀬洋子
兒野壽満子
陸富代
堀内安雄

四 事 業

1 刊行圖書

○榎一雄著『エフタル勃興前後の中央アジア』 東洋文庫論叢第四十六 昭和三十六年三月 A5版 七五〇頁
紀元五、六世紀に中央アジアに雄視したエフタル民族の出現の過程とその人種の歸屬に關する論考（第一部）を中
心に、その前後の中央アジア史に關係のある論文と書評とを蒐録してある。

第一部 エフタル勃興前後の中央アジア

1. 魏書粟特國傳と匈奴・フン同族問題
2. ソグディアナと匈奴
3. キターラ王朝の年代について
4. 初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシヤン
5. エフタルの起源とその人種について

第二部 西域史上の諸問題

6. 大月氏・スキタイ同族考
7. 所謂シノリカロシユテイー鏡について

8. 樓蘭の都城とカロシユティ—文書の年代
 9. ササン朝末期の王統に關する兩唐書波斯傳の記載について
 10. 唐代の拂菻國に關する一問題——波斯國酋長阿羅憾丘銘の拂菻國——
 11. 成都の石筍と大秦寺
 12. 成都のチベット名について
 13. 宋代の大秦國について
 14. 海青牌のアラビア文字銘文
 15. 乾隆朝の西域調査とその成果——特に西域同文志について——
- 第三部 批評と紹介
16. モルゲンステイルネ氏「パミール方言の研究」
 17. ベイリイ氏「コータン語のラーマ王物語」
 18. イークヴァル氏「甘肅省西邊における漢・回・藏三民族の文化的交渉について」
 19. ハーラン氏「中央アジア」
 20. ヘリチカ氏「シベリア及びアメリカにおける前齒除抜の風習」
 21. セリグマン・ベック氏共著「極東古ガラスの分析的研究」

22. セデス氏「カムボジアにおける十二獣環の起源」

○満文老檔研究會譯註『満文老檔』V（太宗2） 東洋文庫叢刊第十二 昭和三十六年三月 B5版 四二四頁 圖版

四葉

満文老檔は清朝初期すなわち太祖・太宗二朝にわたる三十年間（一六〇七—一六三六）の編年體の記録であり、清初史料の中核をなすものであると同時に、滿洲語研究資料としても極めて重要なものである。本書は現在京都大學に所藏されている内藤湖南博士將來に係る奉天故宮崇謨閣藏の有圈點満文老檔の寫眞を底本として、これをメルレンドルフの飜字方式によつてローマ字に轉字し、逐語譯と意譯を附したものである。すでに太祖の部分三冊と太宗天聰の卷の前半を刊行し、本書はそれにつづく天聰五年正月より天聰末年に至るまでの二十八卷を収めている。

○『欽定西域同文志』上冊 東洋文庫叢刊第十六 昭和三十六年二月 A5版 八〇〇頁

西域同文志は清朝の高宗乾隆帝の準・回兩部平定を記念して作製された「平定準噶爾方略」、「皇輿西域圖志」及び準・回兩部の新地圖の編纂と並行して纂修されたもので、十八世紀中葉における天山南北路・青海・チベットの地理・歴史・人名辭典とも稱すべきものである。滿・漢・蒙・藏・準・回の六體にて記され、清代の西域及びチベット研究に不可欠の寶典であるとともに、十八世紀中央アジアの言語資料として不滅の價値を有している。ただ、本書は流布が少なく、稀觀書として利用が困難であつたので、今回東洋文庫所藏の殿版によつて、その複製を行い、研究者

の便を計つたものである。本上冊には全二十四巻の中、左記の十二巻が收められている。

巻一 天山北路地名

巻二—三 天山南路地名一—二

巻四 天山南路山名

巻五 天山北路水名

巻六 天山南路水名

巻七—十 天山北路準噶爾部人名一—四

巻十一—十二 天山南路回部人名一—二

○東洋文庫歐文紀要 *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*. No. 20. (1961).

Kazuo ENOKI 榎一雄 : Dr. Mikinosuke ISHIDA and Dr. Hirosato IwAI.

Writings of Dr. Mikinosuke ISHIDA.

Writings of Dr. Hirosato IwAI.

Mikinosuke ISHIDA 石田幹之助 : The *Hu-chi* 胡姬, mainly Iranian Girls, found in China during the T'ang Period.

Hirosato IwAI 岩井大慧 : The 17-Article Constitution of Crown Prince Shōtoku. 聖德太子.

Yoshiyuki Surrō 周藤吉之： Relationships between the *Shi-huo-chi* 食貨志 in the *Sung-chao-kuo-shih*

宋朝國史 and the *Shi-huo-chi* 食貨志 in the *Sung-shih* 宋史.

Masao Mori 護雅夫： A Study on Uygur Documents of Loans for Consumption.

Activities of the Toyo Bunko.

○近代中國研究委員會編『近代中國研究』第四輯 昭和三十五年七月 A 5版 三九〇頁 英文要旨八頁

近代中國研究委員會委員の左記の研究成果を収めている。

「清末中國における外國綿製品の流れ」

「長江流域教案の研究」

『基督教與中國文化』にみられる吳雷川の思想——中國におけるキリスト教思想受容の一側面——」

山本澄子

「近代中國における族塾の性格」

多賀秋五郎

東洋文庫所藏近百年來中國名人關係圖書目錄

市古宙三編
岡妙子

○近代中國研究委員會編『近代中國關係文獻目錄彙編』昭和三十五年十二月 油印 B 5版 四六頁

東洋文庫の藏書を中心として、一九四五年八月から現在までに發行された圖書に收載されている文獻目錄・研究手

引・動向の類の目録である。圖書館學、出版目録、ユニオンカタログ・所藏目録、一般的な文獻目録、翻譯（邦譯・中譯）、新聞・雜誌の紹介・解題、新聞・雜誌の記事目録及び索引、個人の著書目録及び研究文獻目録、歴史（アヘン戦争以降）、思想・文化・教育、文學・語學、法律、産業・經濟、地方志・地理その他、臺灣・蒙古、華僑、印刷出版關係、歐文の一八項目に分類されている。

○山根幸夫編『明代史研究文獻目録』 昭和三十五年十二月 油印 B5版 二六六頁

アメリカでは、*yasu*の *Eminent Chinese of the Ching Period* と同様な明代傳記辭典の編纂が J・K・フェアバンク教授らによつて企畫されつつあるが、本書はこの事業に協力し、その基礎的作業として、明治初年以降の日本人および一九〇〇年以後の中國人による研究業績名を分類・収録したもの。著者名索引のほか、右の目的にしたがつて、研究論文に見える明代著名人物名についての索引をも附している。

○『昭和三十四年度財團法人東洋文庫年報』 昭和三十五年十月 A5版 一八七頁

2 講演會

東洋學講座

春期

「ホロズテペ遺跡の發掘」

アンカラ考古學博物館長 ラーシロテミゼル

アンカラの北東三五〇キロメートルの地點にあるホロズテペ遺跡は、アナトリアにおける初期青銅器時代の墓地・住居跡で、一九五七年、トルコ文部省・トルコ歴史協會の手で、直接には、アンカラ大學タフシン・オズグチユ教授らによつて發掘された。遺體・副葬品は、木棺中に入れられていたらしく、副葬品としては、銅・青銅器（四本脚の机、たかつき、水さし、水鏡、カスターネット、サイプラス型短劍、槍先、人形、牡牛像、鹿像、一種のガラガラ、先金具そのほか）、黄金製品（腕輪？、頸飾りそのほか）、銀製品、エレクトロンつまり金銀合金製品、土器類（茶碗、壺そのほか）などがある。この遺跡は、アラジャフユク遺跡などと比較してみると、大體紀元前二一〇〇年ころのもので、それより若干降りうる可能性はある。

「トルコの表紙裝釘技術」

イスタンブール回教博物館長 ケマル・リチュエ

イスラーム圏における書物の表紙は、技術、裝飾モチーフから見ても、十五世紀に至るまでは大體共通しているが、それ以後になると、その内部の諸民族・諸國家それぞれに獨自の特長があらわれてくる。つまり、一般的には、厚紙を何枚かはり合わせた上になめし革をかぶせ、その上に、メダル様の模様を、型（らくだ革）で押しつけて施すのである。十五世紀以後のトルコの表紙は、技術的には上述の方法とほぼ同様であつたが、模様のモチーフ、その構圖において、ほかのイスラーム民族、特にイラーンのものとは異つた特長をもつようになり、十六世紀、中でもス

レイマン一世の治世には、特にすぐれたものが作られるに至つた。そしてこの時代にはまた、金・銀の上に寶石をちりばめる技術も行われた。ところが、十七世紀末から十八世紀になると、上述の傳統的方法に並んで、ニス塗装や、刺繍や鑄型によつて模様を施す方法その他の新しい技術が生まれ、また寫實的なモチーフやロココ式藝術の影響をうけたものが現われ、十九世紀になつて、傳統の様式によつて代るに至つた。しかし、共和國宣言以後、傳統的技术に新しい生命がふきこまれ、再びすぐれたものが生まれつつある。

以上、いずれも幻燈を用いてトルコ語によつて講演され、通譯には護雅夫氏が當つた。

第三百十回 昭和三十五年五月十八日

財団法人東洋文庫創立三十五周年記念講演

「一般に知られざる東洋文庫の藏書について」

日本大學教授 石田 幹之助

モリソン舊藏本をはじめ東洋文庫の藏書中より、『グールドの手寫着彩本』『アジア鳥類誌』七卷 Gould, John: The Birds of Asia. 7 vols., London, 1850~1883. やシュラーギントヴァイト兄弟のカラコルム山脈、崑崙山脈、西部チベット探險の成果である『インド及び高アジア』四卷 Schlagintweit, Hermann, Adolphe & Robert: Results of a Scientific Mission to India and High Asia. 4 vols., with plates, Leipzig, 1861~1866. など、いずれも世界に著名な貴重書でありながら近時の一般研究者には却つて知られなくなつた稀觀書數種を展示して、東洋文庫の豊かな藏書的一端について、その内容、收藏の由來が紹介・解説された。

「わが東洋文庫の業績を顧みて」

日本學士院會員
東洋文庫研究顧問

原 田 淑 人

往時の東洋文庫研究部とその學問的業績を回顧して、今後とも精細にして充實せる業績が公刊されるようにとの要望が述べられた。

第百三十一回 昭和三十五年五月二十五日

「東南アジア銅鼓觀」(資料展示)

京都大學名譽教授
東洋文庫研究顧問

梅 原 末 治

銅鼓は中國では諸葛亮の陣太鼓と傳えて割合に早くから知られた古文物の一つであるが、その實物の綜括的な研究は前世紀末のヘーゲルに依つて基礎が置かれたと言ふことが出来る。氏は一九〇二年刊行の *Alte Metalltrommeln aus Südost-Asien*. に於いて、分布の廣いこの種銅鼓が四種に分類され、當時の佛領印度支那の北部に遺存する中の第一型式が古いものであることを明らかにした。この第一型式、即ちここに言う東南アジアの銅鼓の性質は、爾後の東京・安南に於ける佛蘭西學者達の手でなされた聯關した考古學上の重要な新事象の檢出、殊に一九二〇年代の安南ドンソン遺跡の示す事實に依つて、遺品の實年代が考えられることになつたばかりでなく、銅鼓が同地に於ける初期金屬期の文物を特色づけるものたるを一般に示すことになつた。一部にドンソン文化と言われているのがそれである。併しドンソン遺跡の實際がなお充分に傳えられず、他方基くところの實物そのものに就いての觀察の不充分よりして、ドンソン文化乃至銅鼓そのものの評價に就いて今日なお所見の區々たるものがある。一九二七年ウィンに

於いてヘーゲル蒐集の銅鼓類を目睹したことに端を發し、ドンソン遺跡の調査に刺戟されて、ゴルベフ博士と共に考古學上よりこれが研究に従い、その遺跡をも親しく訪れる機會を持ち得た私は、ここに從來集め得た資料を展示し、その所見を述べる。

さて現存の東南アジアでのヘーゲルの第一型式の銅鼓類は、印度支那の東京・安南地區に濃密な分布を示し、その定型で而も最も整つたものから、裝飾圖紋の上でそれを承けた類が存し、この後の段階の遺品が北では中國の雲南や貴州に、また南東ではマライからインドネシアの諸地方に見出されている。ところで、そのうち整つた古い銅鼓が既に一つの發達した特殊な形をしていて、それに先立つものが他に見出されないことは、形の上でゴルベフ博士がその祖型をよい音響を出す石板を植物質の籐臺の上に載せたものとする想定の當つてゐること、引いて、本來此の印度支那北部で行われ出したものなることを示唆する。次にこの種遺物の實年代觀であるが、ドンソン遺跡での共存物中に認められる中國遺物のそれよりして、ゴルベフはその一點が前漢にあるとし、原田博士は別に後漢代と論じ、カールグレンは戰國時代と見るなど異なる見解があるが、外形に於いて同じ此の第一型式にあつて、他方で器を飾る裝飾紋の上からすると、ドンソン出土品は中での後のもので、うちに明器化したものをも含み、それ等の伴出の中國遺物は前漢代と認められる。これに對し原田博士提示の後漢代の銅洗と同じ双魚紋を一面に印した遺品は圖紋の最も崩れたもので、且つ銅洗の形を模作した類である。従つてこの類よりも整つて、且つ特色の著しい銅鼓は自から時代の遡るものとなる。これは別に明らかにせられた同地に於ける同一の圖紋を印した銅利器——沓形銅斧、銅戈などの示すところなり、その銅戈の基くところの中國の銅戈が遺存して、それが周代のものであることなどによつて、戰國から春

秋時代に遡ることが認められる可きである。カールグレンは是等の銅鼓の圖紋を以て中國の戰國時代の紋様の同似を擧げて年代を論じているが、圖紋そのものの性質に於いて、また表現の上で同一視出来ないものがあつて、舞踏、船、家屋、人物像等に表わされた風俗の上に、かえつてその地の性格が強く認められる。従つて東南アジアの銅鼓は中國に於ける古い青銅の文化が印度支那に波及した際、既に同地の民衆の間に行われた祖型たる樂器を銅を以て代え、それが引續いて盛行したものであつたことになる。終戦後中國南半でも銅鼓の確實な出土が傳へられているが、それ等は孰れも漢代と認められて、圖紋の上でドンソンの遺品と趣を一にする。顯著な雲南晉寧石塞山の遺跡出土例の如きも、戰時中に見出されて、いま倫敦の英國博物館に收藏するものに、より古式の銅鼓例を見るが、中共治下での發掘遺物は明らかに前漢時代のもので、一見最も古い銅鼓に似た著しい類にあつても、實際は本來の樂器ではなく貯貝器として、現實にうちに貝が藏されているのである。この事はハイネゲルデルンの強調しつづける東南アジアの銅鼓で特色づけられる文物が——銅の知識は別として——中國の南方から同地に及んだとすることや、その年代觀が、現在の考古學の示す事實と相反すると言ふことになるのである。

第三百三十二回 昭和三十五年六月一日

「古代中國西域交渉史の一側面」

東京大學教授
東洋文庫研究部長

榎 一 雄

コータン附近の遺跡から出土する所謂シノロカロシュティール錢は、その形式、重量、漢字錢文等から考えて、戰國末期の秦の圓錢とバクトリア王國等で行われたギリシア式貨幣の様式を結合させ、中國の秤量にリンクさせて造られ

たもので、その製作年代は紀元前二世紀末から紀元前一世紀初に至る間、即ち張騫の遠征に前後する時代のものと推定される。さらに、そのカロシユティ―文字の銘文は土王の名と稱號とをブラクリットで記している。これはコータ地方においてギリシア系・中國系・インド系文化の交流が、この頃既に極めて活潑に行われていたことを示すもので、漢字銘文のあることは、中國商人がこの地方の取引に参加していたことを物語っていると解釋出来るであろう。

第三百三十三回 昭和三十五年六月八日

「佛像の起原論をめぐつて」

東京國立文化財研究所研究員 高 田 修

佛像がいつ、どこで、どのようにして生まれたかという重要問題は、その互るところ極めて廣汎で、且つ容易に解決しえない多くの難問題を含んでいる。從來多くの學者によつて追究されたが、未だに首肯しうる解決に到達していない。ガンダーラ起原説は最も有力に主張され、これを支持するものが多いが、諸説區々で、年代論の如き相當の開きがある。これに對するマトゥラー起原説は、同様に年代的に押さえにくい難點をもつとはいへ、決して立論の根據が弱いというわけではない。

私は佛像の起原問題について早くから關心してきた關係もあり、昨年現地において遺跡を探つたり、問題となつてゐる佛像などを調査し、今までの見解に對して多少の修正や改變が必要であることを認めた。しかし自身の佛像起原論を開陳するだけの十分な用意がまだととのつていない。それでここではその序説的な意味で、佛像の發生に關し、論議の對象となつてゐる彫刻や銘文を提示し、これに對する諸家の説をあげて批判するだけにとどめた。同時に、從

來有力に説かれてきたガンター起原説が、マトゥラー起原説に對して、必ずしも優位にあるとは限らず、年代的にも、様式的にも、まだまだ問題の存することを示唆した。

第三百三十四回 昭和三十五年六月十五日

「ウィグル文契約文書、特に消費貸借文書について」

東京大學助教授
東洋文庫研究員

護 雅 夫

ウィグル文消費貸借文書にみえる各要項につき、順を追うて説明を施したが、ミューラー・ルコック・ラドロフ・マローフ・フェルファールト・ジャフェロウルなどのとなえた説と特に異なる點、また新しい見解を列擧するとつぎの如くである。

(一) 金錢貸借の場合の填補利息は、從來、「一兩についてのもの」と考えられているが、これは誤りで、正しくは「元本についてのもの」である。従つてそれは、今までの見解によると、月に一割から二割五分の高利になるが、そうではなく、月に二分五厘から三分三厘位でなければならぬ。

(二) 金錢以外のものの貸借における賠償利息文言《*ni yangin'a* (郷里の慣例に従つて云々)》は、中國文書の「於郷例生利」などの文言の直譯である。

(三) 今まで「もし自分が死んだなら」と翻譯されていた《*bar yoo bolsar män*》《*ištin taštin bolsar män*》《*ör-i qodi bolsar män*》などのウィグル文は、正しくは、「若し自分が逃げたならば」ととるべきであつて、これは「留住保證 (*Stillesitzbürgschaft*)」の文言である。

(四) そのほか、種々の點からみて、ウィグル文消費貸借文書には、その形式のみならず内容、文言のディテイルに至るまで、中國文のそのの影響が、つよくあらわれている。

秋期

第三百三十五回 昭和三十五年十月五日

「北方民族の奇習ジャダに就いて」

國立國會圖書館支部東洋文庫長 岩井大慧

元の遣臣で、明には仕えなかつた陶宗儀という人に「輟耕錄」という隨筆がある。中に「禱雨」と題して、「往往蒙古人の雨を禱る者を見るに、淨水一盆を取つて石子數枚を浸すのみ。その大なるは雞卵の若く、小なるは等しからず。然る後黙して密咒ヒツジを持って、石子を將つて洵漉ヒツジ玩弄す。此の如くすること、やゝ久しうすれば、輒ち雨あり。石子を名づけて鮮答ヒツジと曰ふ。乃ち走獸の腹中に産する所なり。獨り牛馬にあるもの最も妙なり。恐らくは亦是れ牛黃・狗寶の屬のみ」と。鮮答は蒙古語の音を漢字で表わしたので、他の文獻には札苔、札達、碎答、查達、楂達等とも書かれらる。Jada, Yada, Dsada などと綴られて、西歐文獻にも出て來、「魔術によつて雨を降らす」とか、「雨多き悪天候に變える」とか、また「天候を悪くする石」とか、「雨雪を降らしたり、やませたりする力のある魔術的の石」と言つた解釋がついている。この魔法は太古から内陸アジアの遊牧民族の間に行われていた。そして歴史上にこの術を戰爭の時に使つて勝利を得た例が「南史」蠕蠕傳や、「新唐書」薛延陀傳などに見える。併しそこでは未だ「鮮答」と言う名稱は見出せない。所が蒙古王朝以後、「元朝秘史」やラシッドの「蒙古集史」や「黑韃事略」などになると明記

されている。

この石が動物(牛・馬・羊等)の腹に生ずるもので、一種の糞石であるところから、西歐では bezoar とも呼ばれる。ところがこれも亦、中國側の文献には、唐代から見られる。婆薩、婆娑、麻沙に石を附けて呼ばれ、この糞石を削つて細かい粉末として飲めば、醫藥となることも、早くから文献に見える。宋馬志「開寶本草」に「淡色石の如し。その味淡なり。胡人尤もこれを珍貴とし、指輪として常に帶しゐて、食後數度これを嘗む。以つて毒を防ぐ」と見える。李時珍「本草綱目」にも、病氣に効くことを記している。

そこでこの婆娑石 (bezoar) も、前記の鮮答石 (雨石) も、全く同じものを指した別の呼稱であることを承知すべきである。鮮答も婆娑も共に、もとはペルシア語で、前者は Zadū という言葉がトルコや蒙古に傳わり、「雨石を表わし、後者は Pazahar という語が訛つて了い、解毒の意味を有つので、これが西歐へ行つて英語の bezoar となつた。こう史料を詮義して見ると、鮮答は祈雨・禱雨に、婆娑は解毒・醫藥の方面へと、同じ動物の腹に生じた糞石が、奇しくも兩方面に使われていたことが證せられた。それを使う人は巫覡であることも留意すべきことであろう。

第百三十六回 昭和三十五年十月十二日

「殷墟建築址」

中華民國中央研究院研究員 石 璋 如

河南の安陽地域には殷代の遺址がはなはだ多く、すでに發掘せられたものには、小屯・四盤磨・後岡・王裕口・高井臺子・侯家莊南地・武官南霸臺・侯家莊西北岡・大司空村・同樂寨・范家莊など十一遺址がある。なかにも、建築

趾としては、小屯で發掘された基址がもつとも大きく、整つてゐる。併せて五十三カ處に及ぶが、いまこれを、(一)組織と形式、(二)遺物とその用途、に分つて説明することとする。

(一)組織と形式

五十三カ處の基址を、甲、乙、丙の三組に分けることが出来るが、これは分布地域による區劃であるばかりでなく、その間に形式の相違も窺われるのである。

(1)甲組——甲組は北にあつて十五カ處の基址よりなつてゐる。現在判明してゐる面積は、東西九〇メートル、南北一〇〇メートルである。この甲組の基址は、相互の連關がやや散漫であるが、主として東に向いてゐる。すなわち、大きな基址は東あるいは西、小さいものは南あるいは北に向いてゐるのである。この東西に向いてゐるのが主房であり、南北に向いてゐるのが屬房である。また、整つて行列してゐる礎石をもち、階段の痕跡のある基址もある。

(2)乙組——乙組の基址は、甲組の基址の南にあり、二十一個の基址よりなつてゐる。その現在判明してゐる面積は、東西一〇〇メートル、南北二〇〇メートルである。この乙組基址の組織はやや整つており、北から南へ一體をなして連なつてゐる。甲組と反對に、南あるいは北を向いてゐるものが主房であり、東あるいは西を向いてゐるものが屬房である。乙組の大多數の基址の上には整然と行列状をなした礎石があり、また、礎石が密集して門のかたちに排列されてゐるのが見られる。この門の方向は、南向きが多く、東向き及び北向きのものもある。遺趾の東部は洹河の水によつて侵蝕されてゐるため、西向きの門跡は比較的少ない。

(3)丙組——丙組の基址は乙組の基址の西南にあり、十七個の基址よりなつてゐる。現に判明してゐる面積は、東

西三五メートル、南北五〇メートルである。この丙組の基址ははなはだ整つており、南・中・北の三段に分れて、その長さは一七メートルである。南面のものが主房、東西に面しているのが屬房であつて、非常に對稱的になつてゐる。中央の大基址上には、さらに五個の小基址があつて、その中心の基址は長方形であり、四隅のものは方形である。この種の組合せは、丙組の特色となつてゐる。

(二) 遺物とその用途

この三組の基址に附随する遺物はすべて相同じなものではなく、その用途も異つてゐる。

(1) 甲組の第四基址と礎石——甲組の第四基址は長方形であつて縦横四對一、礎石の排列は、はつきりと五架七間をなしており、内部の間隔は十三個の小單位に區劃されてゐる。その用途は居室であつたと思われる。

(2) 乙組の第七基と墓葬——乙組の第七基は大きな墓址である。正門は南に向き、門外の左・中央・右に各一人が埋められ、南面して跪き、戈を持つてゐる。中央の南には別に一人が埋められ、これは北面して跪き、左手に盾、右手に戈を持つてゐる。門内の左右に各一墓があり、左の墓には三人、右の墓には二人、あわせて五人が埋められてゐる。これらの南には、車馬や俯伏せの埋葬などが多く、宮殿の址と考えられる。

(3) 丙組第一基址と玉璧——丙組の第一基址は丙組の基址群の中心をなし、その南邊には階臺の殘跡があり、整然と行列状をなした柱礎がある。階下の南から二個の玉璧が出土したが、一個は白璧、他の一個は蒼璧であつた。別に基址の上から、多數の俯身葬と焼かれた羊・牛などの獸骨が出土した。これは祭壇に用いられたものと思われる。

この講演は中國語によつておこなわれ、通譯には藤堂明保氏が當つた。

「インドにおける史蹟の調査」

東京大學教授
東洋文庫理事 山本達郎

一九五九年十月から一九六〇年六月にわたつて、東京大學はインド史蹟調査團を派遣し、十三世紀から十六世紀前半までを中心として、イスラム系の諸遺蹟並びに文獻の調査・蒐集を行った。荒松雄氏が歴史調査一般、三枝朝四郎氏が寫眞撮影、大島太市氏が地上寫眞測量、月輪時房氏が考古學的調査、山本が團長として企畫・統括を擔當し、東洋文化研究所が主體となり、生産技術研究所の丸安隆和教授の協力を得てこれを遂行した。箱型ジープで各地を旅行したが、奴隸・ヒルジ・トゥグルク・サイイド・ロディー諸王朝にわたるデリー附近の遺蹟に調査の重點を置いた。測量の方法として地上立體寫眞を用いたことは、この種の調査として始めての試みであり、正確に寸法を量ることによつて、當時使用された尺度の問題や建造の過程に就いても考察する企畫である。

十三世紀から十六世紀前半までの間に、建築物は様式に於ても構造からみても大きく變化しており、これに續くムガル時代への變遷の過程を辿ることが出来る。多様な遺蹟の中から、墓・モスク並びに水に關係する遺蹟の代表的なものを選んで、やや詳細に調査を行った。墓には色々の形があるが、大部分は正方形の平面をもつており、八角のものも頗る堂々とした構築である。墓の西面は一般に壁となつていて、モスクのミヒラブに類似した形態をなしている。モスクはインド教建築とは著しく異つて解放的な感じを與えるが、西アジアのモスクにはみられないインド的な展開が認められる。モスクの一部に特別な一室或は區劃があり、それが女子のための場所であつたらしいことも興味深

い。十四世紀の後半、フィローロズシャー・トゥグルクの頃から建築の手法が大きく變化し、割り石を用いて構築した上に漆喰を塗つて、その上に文様を施すようになり、それ以前の表面に切り石を用いてこれに文様を彫る方法が廢れて來る。この様に材質が變化すると、裝飾文様も流動性を帯びたものとなる。水に關する遺蹟としては圓い井戸、方形で階段のあるバオリ、水門の類を調査したが、當時の生活を示す興味深い特色が現れている。一般に石の積み方、ドーム、アーチ、裝飾文様など時代的な變遷を示しているものに就いて、更に資料を蒐集・整理し、また聖者崇拜その他、宗教思想の特質・變遷が遺蹟の分布や形式・刻文などと關係する點を檢討して行く計畫である。

第百三十八回 昭和三十五年十月二十六日

「故宮博物院所藏繪畫の調査」

東京大學東洋文化研究所教授 米澤嘉圃

昨年の五月、同志の鈴木敬（東京藝術大學助教）、川上涇（東京國立文化財研究所員）兩氏とともに、故宮博物院（臺灣臺中市所在）所藏の特に繪畫について約一カ月間調査する機會をもつた。われわれの過目した畫蹟は、五二八件、延べ約千點にのぼるが、故宮所藏繪畫の全體からみれば、二、三割程度にすぎないであろう。しかし、有名品はひとつとおりに見てきたつもりである。故宮は中國繪畫の世界最大の寶庫には相違ないが、だからといって、すべてが眞蹟であるとか、あらゆる種類の作品が網羅されているとかいうわけではない。集められた時期が、十八世紀の清代で新しいことや、集めた主人公が皇帝であつて絶大な資力があつたが、「正統派」的趣味に偏つていたことなどが、このコレクションを制約し性格づけた要因といえよう。

もつとも、めぼしい畫蹟が、すでに清朝滅亡とともに多數散逸したことも考慮しなければならないが、われわれの見たかぎりでの特色をあげると、まず第一に元畫の部門が充實していることである。わが國ではほとんど見られない李成・郭熙派や董源・巨然派（南宗畫派）をはじめ多くの眞蹟があり、われわれを驚喜させた。明畫の部門では特に珍しい作家や作品を見出したわけではないが、わが國で見えるものよりは、質的に一段と勝っており、大いに眼福を得た。宋畫には模本が多いが、きわめて精巧なものがあり、しかもわが國にない北宋の山水畫はよい参考となつた。院體畫はなかにはよいものもあるけれども、わが國の傳世品に比べると、質的に劣る。またわが國に多い末末元初の水墨畫が、ここでは見られなかつたことも特徴的である。

第百三十九回 昭和三十五年十一月九日

「詩經研究の方法」

一

熊本大學教授 松本雅明

中國古代の研究に、「詩經」の占める位置はきわめて大きいが、これほど問題の多い古典も少ない。その研究はさまざまな立場でなされているが、私は、正しい結論は、一時の思いつきでなく、研究方法の充分な検討によつてのみえられると思う。それにはまず、「詩經」にみえるさまざまな條件が矛盾なく満たされることが必要であらう。私は一九五七年に、東洋文庫より『詩經諸篇の成立に關する研究』を出版したが、その後いくつかの批評があつたので、それに答える意味においても、もういちど方法の問題をまとめてみたいと思う。

はじめに、詩自身の内部にみえる要素を考えてみよう。

1. 現在、最も古い詩の解釋として、毛氏の學派のものが残っているが、戰國末から漢代にかけて、ほかに魯・韓・齊の三つの學派があり、その斷片が古典の引文のなかに見えている。しかしそれらの學派の間では、詩のつくられた時代や意味について、非常な相違がある。それは、學派が現れた時代の思想によつて詩を解釋し、自分の思想を詩によつて説明しようとしたからである。すなわち古代人の生活のじかの表現である素朴な詩、ことに民謠である國風を、政治的・倫理的に理解し、それによつて儒教のいう聖王の世の復原を志したのである。そこから、詩を正しく批評するためには、一應それらの解釋を離れることが必要である。

2. 民謠である國風は、十五の國に分類されているが、周の詩が周南・召南・豳・王の四つにわけられ、衛の國の詩が邶・鄘・衛の三つにわかれている。しかし詩の内容からみると、それらの場所もしくは年代による分類には混亂があり、あまり意味がないように思われる。また魯・宋・許のような、もつとも有力な古い國の民謠がのこつていないのは、なぜであろうか。じつは周の歌の半ばは、魯の歌ではないであろうか。もちろん鄭・陳・秦のようにまともりと特徴をもつものもあるが、だからと云つて、この分類をすべて前提として詩の研究をすすめることには、やはり問題があると思われる。

3. 詩篇の成立の時期を明かにするすのは、先の毛氏や三つの國の學派的な記録のほか、「左傳」「國語」「韓詩外傳」がある。「左傳」は古くから最も重要とみられたが、じつは「左傳」において、「書經」の諸篇を引くのをみると、その多くは戰國前期に成立した新しい篇を古い時代にかけている。このことは詩の引用についても當然い

いえられるのであつて、それらの説はほとんど信賴できないと思われる。

右のように、これらの資料は、詩研究の前提となりえないことが分るのである。

二

つぎに反對にまず研究の前提とすべきことからあげよう。

1. 詩には「興」という、他に見えない獨自の發想法がある。それは、はじめに自然をうつし、つぎにそれと無關係な主文である人事を導くものである。召南「野有死麕」の、

野有死麕 野に斃れしさお鹿を

白茅包之 白き茅はつつみけり。

有女懷春 おとめ子は春をおもえば

吉士誘之 よきおのこ誘いぬ。

また邶風「旄丘」の、

旄丘之葛兮 きと高き丘の葛くず

何誕之節兮 なぜに節ふしまの長き。

叔兮伯兮 叔よ 伯よ

何多日也 なぜに日ひ敷かきのさわに經ちゆく。

のようである。このような修辭は春秋の後期以後はなくなつてしまうので、我々はその發生の理由、それが生きてい

る社會、またその形式化し失われてゆく過程や時代を考えなければならぬ。

2. つぎに疊詠といわれる詩形がある。それは第一、二、三章などが、ほとんど同じ形をとり、韻字だけを異にするものである。それも單純なものから複雑なものに及び、ついに非疊詠に移つてゆく。これも春秋中期以後にはなくなつてしまふ。

3. 自明のことであるが「民謠」の定義が問題になる。民謠はもちろん農民も都市生活者も貴族も歌う全體の歌でなければならぬ。しかし從來、時として、貴族に對立する農民の歌とする考え（例えば B. Karlgren 氏）がみられることがあるのは、明かに誤りである。

4. 國風と、宮廷の祭禮の歌である雅（小雅、大雅）と、宮廷の祖先祭の歌である頌との關係が、捉えられなければならぬ。すなわち民族的・集團的なものから貴族的なものへの分化がおこり、職業詩人、僧侶階級の出現が問題にされる必要がある。

5. 詩形、主題、修辭において、豊富な相違があることは、すでに拙著において指摘した通りであるが、それらの組合せ、時代における變化が追求されなければならない。

6. 天文曆法に關する資料、事件・人名・地名・國名などの固有名詞に關する資料もかなりある。しかしそれらは斷片的で、從來、重要視されすぎたように思われる。それは、或る個人や事件が歌われていても、直ちにその時の歌とはかぎらない。物語化された古代を讚美、もしくは非難し、現實の戒めとすることは、どの時代でも見えることであるから、その點細心の注意を要する。

このような種々の特徴について、われわれはそれがいかなる社會や集團を背景とするかを考えなければならぬ。ことに興とか疊詠とかにおいて、はじめきびきびしたリズムがみられたのが、後に象徴的・形式的、もしくは複雑になつてゆくところには、明かに社會の變化が豫想される。古代においては、歌謡は何らかの意味で集團を背景とし、歌そのものにマジックな力があつたであろう。すなわち歌は、古代人の社會生活の規律としての祭禮に關係をもつていたと考えられる。それはもちろん「社」における農耕儀禮であり、その中心は收穫祭である。その歌舞は神とともになされ、行動という形の祈りにほかならない。しかも歌舞の多くは、歌合戦であつたらう。きびきびしたリズムや、興・疊詠は、舞踏や歌合戦における發想を考えなければ、理解しがたいところである。

しかし最近、中國古代は都市國家であるという説が宮崎市定氏、貝塚茂樹氏らによつてとかれてゐる。それは原始的氏族社會から群をなして發生し、西周・春秋時代に榮え、戰國時代になると領土國家にうつり、秦漢にいたつて大帝國に發展するという。その理由として、「都」や「邑」が城と郭（内城）からなり、そこに「良」とよばれる市民階級があり、また晉や鄭では成文法がつくられた。またそれは強大な指導國家と平等な獨立國家にわかれていた、ということがあげられる。

なるほどギリシア、フェニキア、ローマなどのような都市國家に似た一面がないわけではないが、「良」の範圍は狭く、農民はそこの中にはいつていないと思われるし、春秋になると都市國家間の距離があまりに離れすぎてくる。中國古代はギリシアやフェニキアと全く異り、農業が中心で、商工業はきわめて素朴であるのに、都市國家が成立しう

るであろうか。それは農民の生活にはきわめて不自由であろう。また「詩經」をみると、戀愛の場面は多く村落、田園の間である。また「十室の邑」^(十世)という語があり、「五家を隣となし、五隣を里となす」(周禮)、「二十五家を社となす」(史記索隱、呂氏春秋の高誘の注、左傳の杜預の注)などが見えている。これは十戸ないし二十五戸の、村落の單位があつたことを意味する。また春秋時代に戰爭で領土を獲得したとき、その廣さを「書社五百」「書社三百」、或いは「千社を要求する」などという語が、「左傳」「荀子」「呂氏春秋」などにみえている。「書社」とは社の人名を記録することであるから、社を單位とする村落が存在し、その數でほぼ領土の全體の人口もしくは廣さが類推されることがわかる。

このように中國古代は都市國家ではなく、村落を基盤とし、諸侯の國の首都として大きな都市が發展したのである。村落の牆壁は自衛と水害を防ぐためのものであろう。

國風の多くが社における農祭の歌舞に用いられたのであり、また歌の多くが戀愛詩であるとするなら、その生産の祭りは、同時に若者たちにとつては、ヨメえらびムコえらびの祭禮ではなかつたろうか。グラノー氏のかつての説は新たに思ひおこされねばならない。しかし村落は基本的には同族の住民であろうから、族外婚をとる中國の社會では、二つもしくは三つの村落の連合の祭禮が必要であらう。そうみると、社にもたしかに五十戸とか百戸とかのものがあるように思われる。社の祭禮には、おそらく小さいものと大きいものが二重にあつたであらう。姓はほんらい結婚忌避の集團をあらわすが、それがゆきわたるのは都市生活において異族が混りあつたからで、村落のものは原初の閉鎖的な形をとつていたと思われる。

このように、國風の多くは村落の祭禮における舞踏歌で、疊詠とか興とかは、歌合戦の發想から生れたものと思われる。しかるに春秋にはいるときびぎびしたりズムは消え、興も形式化し、詩形は複雑になり、また非疊詠の歌があらわれてきたのは、村落そのものが變化してきたからであろう。すなわち村落が分解し、古い共同体を維持してきた社會に、領主・自由民・農奴の階層があらわれ、そこから古い祭禮の機能が失われてきたとみられる。收穫祭は若者たちにとつては自由な婚約の祭ではなくなり、小雅の農祭の詩にみられるように、多くは領主の私家の祭、ふるまい酒に變つてしまう。野外の舞踏歌から室内の酒盛歌に變化すると思われる。このような社會の變化は、詩の中に、故郷をすてて異郷に放浪する人、村々をわたり歩く行商人、吟遊詩人が見えはじめることによつても、知られる。

また他方では、宮廷獨自の歌謠、その作者である職業詩人がみられるようになる。しかも前六世紀に入つて、詩の荒廢の時代がはじまるのは、詩がもはや祭禮における社會的な機能を失つたからに、ほかならないであろう。

大雅や頌のなかにももちろん西周の末の作品はかなり入つている。しかし大雅の年代をきめるには、國風との比較のみならず、「書」から雅への移行を明かにすることも必要である。「書經」のうち周の初期につくられたことの明かな諸篇から、いかにして大雅の敘事詩への移行がなされたのであろうか。「書」は散文であり、その中心思想は周が殷王朝をつぐことにあるのに、大雅では韻文にかわり、周の傳統のみを歌つている。これは周王朝のもつ歴史的意味がかわり、後者において、王朝が政治的に無力化し、諸侯統合のシムボルと化したこと、従つてかつてない莊嚴な儀禮が要求されたこと、などを背景として理解するしかないように思われる。すなわち「書」では現實の權力が問題

になるのに、「詩」では權威は傳統もしくは神話のなから生れてくるのである。

小雅における饗宴歌は、多く國風の影響のもとに生れたものと思われる。

頌はもちろん國風や雅と異なる起源をもち、王朝の祖先祭の呪詞から發生してきたものであろう。しかしのちに國風や雅の影響をうけて發展しており、「大武」「象舞」における神と司祭との對話は、のちに戰國時代に「楚辭」に發展してゆくと思われる。

かくして「詩」の研究においては、私は、(1)詩自身に即して理解し、後の詩説からはなれること、(2)その社會的背景、ことに祭禮との關係においてとらえること、(3)詩の中のさまざまの要素が矛盾しない方法を見いだすこと、(4)本講では直接にはふれなかつたけれども、同じ文化段階にある他の民族の歌謡と比較すること、すでに拙著においてふれたように、日本の歌垣・奄美大島の八月踊・安南リム Lim 村の歌謡・バリ島農民の歌などとの比較によつて理解することが必要であると思われる。しかし文化段階が異なる場合には、細心の注意を要することもちろんである。

3 談話會

昭和三十五年四月十六日 「崇徳元年の証明について」

松村 潤

崇徳元年（一六三六）清の太宗は、弟の多羅武英郡王阿濟格^{アジグ}を總司令官に任じ、明へ遠征を命じた。すなわち滿洲軍は大凌河上流を迂迴して内蒙古より長城を越えて北支那に侵入し、三箇月間に互つて各地に轉戦し、北京周邊の十

數城を攻略し、十八萬に及ぶ人口牲畜を掠奪して滿洲に凱旋したのである。

この遠征については滿洲側の記録である大清太宗實錄と明側の記録である國權などを對照することによつて、その大略をうかがうことが出来るが、さらに注目すべき資料として、一九三四年清の内閣大庫より發見せられたる二十六片の滿文木牌が存在している。これら木牌は崇徳元年の明遠征に際して總司令官たる阿濟格のもとより太宗に送られた報告書であり、古滿洲語で書かれている。これについてはすでに李徳啓氏が「阿濟格略明事件之滿文木牌」と題して、その解讀を發表しているが、なお多くの疑問點を含んでいるので、ここに更めて解讀を試み發表した。とくに滿文老檔との比較對照によつて、崇徳元年の遠征すなわち入關以前における滿洲の明に對する軍事活動の實態を明かにすることが出来たのと同時に、滿文老檔の資料的性格を知る極めて重要な資料であることが判明した。

昭和三十五年五月七日 「同治年間の教案について」

佐々木 正 哉

キリスト教が中國に入る際に最も大きな障害をなしたものは、中國の儒教的な世界觀・道德・習俗との衝突であつたが、阿片戰爭以後になると中國人の西洋人一般に對する敵意がそのままキリスト教にも向けられた。同治年間に相繼いで起つた貴州教案・湖南湘潭衡州教案・南昌教案・揚州教案・天津教案等はその代表的なものである。またキリスト教宣教師の内政干渉・教民保護が地方官や民衆の反感を買い、民教の鬭争を捲起することもあつた。四川西陽教案・遵義教案等はこれである。

昭和三十五年六月十八日 「安史之亂前の兵制運用上の二、三の問題」

菊池英夫

安史之亂を契機とする唐の諸制度の變化は、實はそれに先立つ開元・天寶期に、國初以來の制度の具體的運用面において芽生えていたものが多い。所謂府衛・鎮戍の制から北衙禁軍・軍鎮守捉制へ、衛士防人から長征健兒（官健）へという轉換も開元・天寶期に略々完成し、これを基礎とする節度使體制が安史之亂及び以後の政局の中心問題となつた。この制度轉換は上述の制度運用面において如何に準備され形成されていつたかを二、三の面から考究する。先ず、所謂府兵制における制度の建前から云つて、一般擔稅戸たる州縣載籍民丁と折衝府による兵役點充者とはどのような關係にあつたかを見る。折衝府と州縣との行政事務における幾つかの接觸面を推定し、そこでの文書手續等を考へ、西域發見兵制關係文書の中にそれを窺わしめる材料がないかを考察する手掛とする。次に天寶の州縣戸口統計により戸口の分布と各州配置軍府の分布密度とを對比すると、軍府が決して戸口分布に則應したものでなく、財源地帯と兵源地帯との地域分擔が明確に看取される。幾つかの假説を設けて推算すると、その點兵率は關内道諸州で二乃至五丁に一兵、隴右では二乃至三丁に一兵以上、中には全丁男を點兵しても管内におかれた府の兵額を充しえたと思われぬ州さえあつて、かかる邊境の人口稀薄、蕃漢雜居地帯の軍府行政に一つの問題を投げる。これに對し河東諸州では三、四乃至一〇丁に一兵、河南では八乃至二〇丁に一兵といった結果が出る。軍府配置の偏倚性は國初貞觀の戸口分布を參考にすれば更に大であつたように思われる。それは偶然でなく、唐朝が統一國家形成に當つてその統一を支えるべき兵・財各種の負擔を、天下各道各地域に配分賦課するに際しての統治政策の表われと見ることができ。しかも貞觀から天寶の間に天下の戸口分布は一大變動を遂げ、河南北の躍進は特に顯著である。これが唐の統治體制に

とつて何を意味し、上記の兵制體制に如何なる問題を投げかけたか。塞外民族の侵寇激化による邊防體制の諸問題に對應する、唐朝支配内部の條件として分析されなければならない。そしてそこに、軍府行政運用面での數々の變態現象や、新兵制に向つての種々の底流が形成されてゆくことになる。

昭和三十五年七月十六日 「近代日本における議會政黨の形成」

鳥海靖

この報告での課題は、あらゆる意味で近代日本の政黨の原型がつけられたと考えられる帝國議會初期を中心にして、政黨の政治的機能の發展、藩閥政府と民黨との妥協・提携を政黨構造との關連で考察することにある。

帝國議會の開設はそれまで對立をつづけて來た「藩閥」勢力と政黨勢力に新しい政治的條件を與えた。政府は超然主義を唱えながらも、現實の政治運営にあたつては政黨・議會の存在の是認が前提となつたし、政黨もまた憲法の運用を通じて政黨内閣を實現することを最大の課題とした。こうして、兩者の對立を基本とした政治狀況は次第に變化し、兩者の提携のための政治的條件がつけられていつた。

政黨は衆議院で多數を占め政黨内閣を實現するために、統制力の強化が要請されていた。しかるに、たとえば、當時最大の政黨であり民黨の中核的存在であつた立憲自由黨は第一議會でその不統一ぶりを暴露し、黨の分裂という最悪の事態を招いた。ここにおいて黨幹部は黨内における統一的なリーダーシップの確立をめざして黨組織改革に着手した。黨内の派閥抗争に勝利をおさめ黨のヘゲモニーを握つた板垣・星派を中心に、明治二十四年十月までに何度か黨則改正がおこなわれたが、その中心的意圖は次のようなものであつた。すなわち、第一に、黨を代議士中心に改組

して黨全體を院内政黨化することによつて、これまでの院内・院外の二重構造的缺陷を解消し、第二に黨の中央指導部を強化して、政策決定を少數の黨幹部の手に集中することによつて、院内政黨内部での黨幹部の統一的なリーダーシップを確立しようとするものであつた。一見こうした改革は成功したかに見えたが、その後もいぜんとして黨幹部のリーダーシップは不安定であつた。これは黨組織改革が中央組織改革に終始し、地方組織はいぜん中央との結びつきが極めてルースなままに放置されていた點に原因があつた。黨構造の矛盾はさしあたつて次の二點にあらわれた。第一に黨と地方的利害とが著しく密着した。地方的利害の對立がしばしば黨内の對立を激化させ、幹部の統制力を弱めた。幹部は統制を保つために、やむなく、黨を構成する「地方名望家」層に利益の還元とパトロネージの分配をはからねばならなかつた。第二に、黨の一般的政策決定と代議士選出過程とが完全に分離した。前者は黨幹部が掌握し得ても後者は「地方名望家」の手中にあつたから、總選舉ごとに幹部のリーダーシップはおびやかされた。

こうした黨構造の矛盾は政黨の政府への接近のテコとして作用した。分配すべき利益の獲得のためには政府との妥協が必要であり、さらに解散・總選舉は幹部の地位をおびやかしたから、政府との衝突は避けねばならなかつた。かくて、第四議會ごろを契機に自由黨の政府への接近がはじまる。そうした経過を経て日本の議會政黨が形成され、地方自治制とともに「地方名望家」的な民意の調達の機能を果すルートとして、體制内に自己の地位を見出したのである。

漢書西域傳に鄯善の首都として記されている扞泥城は、後漢紀十五に驩泥城とあるのによつて、扞（杆）泥城（北史・魏書の西域傳、太平御覽七九二引漢書西域傳）とするのが正しく、それは鄯善國の遺蹟（ニヤ・エンデル及び所謂樓蘭遺蹟）から出土したカロシユティー文字の文書に都城 Kroraina の一名として用いられている kuhani, kh-yani の音譯で、都城・城塞を意味する名稱であると考えられる。カロシユティー文字の文書の年代は、紀元三、四世紀のものと思われるので、紀元前七七年、漢が樓蘭王を殺し、これを漢の保護國として、國名を鄯善と改めた際も、都は依然クロライナに置かれていたと見なければならぬ。

また後漢書の東夷傳に「安帝永初元年、倭國王帥升等、獻生口百六十人、願請見」とあるのを、通典と日本書紀纂疏・釋日本紀解題に引く東（後）漢書とに、それぞれ倭面土地（又は國）王帥升及び倭面上國王帥升・倭面國に作つているので、このどの形が正しいか、またこれらが日本の何處を指しているか、について多くの研究が行われている。しかし、これは現存の後漢書の安帝本紀に「永初元年冬十月、倭國遣使奉獻」とあり、東夷傳に右のようにあるが正文と見るべきで、倭面土地（又は國）王帥升等は倭國王帥升の文字が傳寫の際誤記重複した結果生じたものであらう。従つてそうした誤つた名稱の讀み方や位置を研究することは、全く意味のないことと言わなければならない。

昭和三十五年十月二十九日 「第二十五回國際東洋學者會議（モスクワ）に参加して」 山本達郎

第二十五回國際東洋學者會議は、一九六〇年八月九日から十六日まで、モスクワ大學でおこなわれた。從來の會議が西アジアの研究に重點を置き、前回のミュンヘンにおける會議では十四部會にわかれていたのに對し、今回は、東

アジア部門についても關心が増し、日本部會を含む二十部會によつて大會が構成され、大會参加者は一千七・八百名にのぼり、研究發表は七百件におよんだ。プログラムに豫定された報告數を部會別に擧げると、次の如くである。

エジプト學(三九)、アッシリア學(三二)、ヒッタイト學・ウラルト學(一九)、セム學・ヘブライ研究・聖書考古學(四五)、ビザンティン學およびその關連研究(三〇)、アラブ諸國史(四一)、アラブ言語學(二六)、イラン史(二九)、アフガニスタン(二四)、イラン言語學(三八)、中央アジア史(三七)、アラブ諸國史より中央アジア史にいたる五部門聯合部會(四)、アルタイ研究(一般二〇)、トルコ言語學一三、モンゴル・トゥングースマンシユー言語學一四)、トルコ史(三〇)、コーカサス研究(四八)、インド研究(一般八、言語・美術三七、歴史・哲學三五)、東南アジア(三五)、シナ學(一般六、中國史二九、中國言語學二六)、朝鮮(一二)、モンゴル史(一二)、日本(四四)、アフリカ研究(一般三、歴史三一、言語學一一)

一般に現代に關する發表が多くなつてゐる傾向が窺われ、從來の傳統的な東洋學とこれらアジア・アフリカ各地の諸民族の動きやイデオロギーの問題に關する研究とがどう關聯させられるかという所に、重要な課題があるように思われる。しかし、いまのところ、新しい問題意識からする示唆に富む考えが出されてゐると同時に、一方では、安易な型にはまつた解釋もあらわれてゐる情況にあるといえよう。

モスクワの學會が始まるまえ、タシケント・ボカラ・サマルカンドに旅行し、會議のちレニングラードのアジア民族研究所・エルミタージュ博物館を訪れたが、ソヴェトにおける東洋關係資料の蒐集の豊かさには注目すべきものがある。例えばコズロフ探検隊の持ち歸つた西夏史料は西夏文研究に缺くことの出來ぬものであり、同じく敦煌文

書は、約一萬點にのぼるといわれる。その他、タシケントの古文書館など、いずれも豊富な資料を收藏している。
〔東洋學報〕四三卷二號、一四七一—一五〇頁参照。

昭和三十五年十二月二十四日 「歐米諸國のインド研究」

荒 松 雄

約五カ月にわたつた西歐、合衆國旅行では、各地の大學、文書館、博物館等を訪ね、各國のインド研究の現状を調べた。歐州諸國においては、英佛兩國の一部學者を除き、インド學は古典研究の傳統的傾向がつよいに對して、アメリカ諸大學では、主流が近代、現代に關する研究であり、しかもその研究が、アメリカの戦後の人文、社會諸科學にみえる共通の方法によるところが多く、さらに共同研究體制の組織が強調されていた點が目立つた。また、當然のことながら、西歐諸國では殖民地喪失から來る現實的關係の變化のため、南アジア諸國の研究が、その意欲、體制の面で變化がみられ、むしろ研究が總體的には下降の印象も受けたのに對して、アメリカでは、中年の研究者を中心に、開拓者の意氣さえ感じられた。アメリカのアジア政策と學界との關連や相互影響の問題も興味がある點であつたが、アメリカのインド研究は、日本の學界のそれとは、内容、アプローチ、方法もかなり違つるので、互いに批判し合う點が、將來大いにあるであろう。各地の學者とは面識をもつよう努めたので、今後の學界の交流には何か役に立つかも知れない。

昭和三十六年一月二十一日 「考工記車制の一問題——『綆』の系譜——」

西 田 守 夫

周禮考工記の輪人と車人の條に出てる「綆」は假借に違いないが、車のどこを指すことばであるか漢の鄭司農、鄭玄以來、唐の賈公彥、宋の林希逸、清の安徽派の人々、阮元、朱駿聲、孫詒讓その他、さらに日本の考古學者やカールグレンのような言語學者に至つても諸説があつて一定した解釋はない。戰後中國の夏鼐は發掘された輝縣や長沙の車に基き、輻をやや傾けて牙を外に出し車輪のまん中を凹ませて皿狀にすることと考えた。

しかし考工記輪人の條には、眡其綆欲其蚤之正也とあつて、下の「其」はこの前文の幾つかの例から綆を指していると思ふ。江永のように、綆非別有一物也とは言い難く、輪の状態でなく、やはり部分品で、しかも剛性の問題ではあつても鄭玄が、算すればおどらずと考えたような運動力學上の問題ではないらしい。また一方、「綆」は形聲字であり、更は複聲母をもつと考えられているが、金文や篆文を見ると、更には、さらに丙という音符を含む。この丙、從つて綆の上古音は陽部で、方とともに張つている、又は並ぶ意味があることは、説文に綆は汲井索也(いま通訓定聲による)とあるし、また漢墓出土の明器の井戸に滑車がつき、二つの瓶が附いているのを見ても確かめうる。並と并とは部は違うが音が近く、甲骨文や金文を見ると、ともに會意で、ならんだ二人が描かれている。鄭司農が綆を關東の方言で「餅」の如く讀んだのも綆の音が并に近く併ぶ意味があるためらしい。さらに餅の屬する耕部と對轉關係にある支部の「算」を以て綆を説明しているわけで、以後、賈公彥や戴震らを経て最近の發掘報告者も前述のような解釋をするようになった。しかし陽部は魚部と對轉するから、綆はそのまま「輔」と同類のことばと考えて差支えない。夏鼐が輝縣の戰國墓出土の車に基き夾輔と名づけているのは、轂を挟んで輻を輔ける二本のそえ木で、恐らく詩小雅正月に據つたろうが、その輔こそが綆だということにならう。

昭和三十六年二月二十五日 「福建商人の發生——宋代商業史の地域史的考察——」 斯波 義信

福建商人は宋代に發生する。唐までの福建は自然條件に阻まれた化外の地であつた。唐末・五代・宋にかけ、文化教養の高い北方人の移住植民、海外貿易の刺戟が福建を急激に開けさせた。狭い土地には人口が溢れ、純農業以外にも諸産業がさかえ、生業の機會は増した。交換は奢侈を廣め、階層分化も進んだ。農村では幼兒殺害や生分の風習を生じたが、一方、他境に出稼ぎに出る者、なかんずく士人・僧侶・道士・藝人・商人を志して積極的に外地に活躍する者が現れ、地縁で相互に團結して共通の勢力を扶植した。福建商人の職種は、海陸の貿易商・運輸業・金融業・家産管理人・仲買人・茶鹽の密賣人などであり、なかでも海商が一般的であつた。しかしまた僧侶・道士・農民の副業機會的商業も見落せない。このような福建商人の發生は、唐から宋にかけての商業發展の一縮圖でもあり、今後もかような地域史的特殊研究の累積によつて、商業史を検討する必要がある。

4 展 示 會

第四十七回展示會

中央アジア考古美術寫眞展 昭和三十五年十二月十三日より十七日まで 東京上野松坂屋にて
イタリア中東亞研究所長・東洋文庫名譽研究員トゥッチ博士を團長とするイタリア學術探檢隊は、一九五六年以

來、西パキスタン・アフガニスタン・イランにおいて、遺跡の發掘調査に従事しているが、そのうち五九年までのスワット河流域（西パキスタン）、ガズニ（アフガニスタン）における發掘状況および出土品の一部の記録寫眞を、イタリア文化會館および毎日新聞社との共催によつて展示した。

スワット河流域は、紀元前四世紀、アレキサンダー大王の遠征を受け、その後ウディアーナ國が出來て、佛教の中心となり、チベット佛教（ラマ教）の成立にも非常な影響を與えたが、一〇—一二世紀、ガズニ王朝の支配を受けて回教化される。遺跡は先史時代から始まり、回教時代にまで及んでいるが、なかでもプトカラの佛教遺跡から一括出土した多數のいわゆるガンダーラ美術の遺品は、これまで明らかでなかつたガンダーラ美術の年代と様式の研究に光明を與えつつある。また、ガズニはガズニ王朝（一〇—一二世紀）の首府で、回教文化の一大中心として榮えたが、イタリア調査團は、これまで知られていたガズニ市周辺の回教遺跡の他に、市の北方のガズニ王朝宮殿址、その東北、ラウザ丘陵の高級住宅遺跡、およびガズニ平原中央のタバハサルダールの佛教寺院址を發掘した。このうち高級住宅址からは多數の陶器が出土したが、特に宮殿址出土の大理石浮彫りは、オムマヤ・アッバース王朝時代の繪畫から初期ベルシア畫への展開を示す資料として重要である。

5 圖書收藏・閱覽

財團法人東洋文庫は、一九一〇年代までの中國に關する歐文文獻のほぼ完璧なコレクションであるモリソン文庫

(約二萬四千冊)を中心とする洋書およそ三十萬冊、さらに三千部に及ぶ中國の地方志や同じく八百種に達する族譜などを含む漢籍、朝鮮本・滿洲本・蒙古本・安南本・西藏本・梵本・暹羅本など約五十萬冊、また我が國の廣橋家文書などの古文書・古版本・古寫本、江戸時代の文學書、名家の自筆本・舊藏本を系統的に收めた岩崎文庫(八千百四十二部、およそ三萬八千冊)を主とする和書、その他、稀觀書寫眞、ロートグラフ、並びにマイクロフィルム約十萬冊を所藏しており、本年度の新收圖書は次の如くである。

	和書	中國書	朝鮮書	洋書	計
單行本	五、八二九冊	一、四五四冊	五一冊	五一四冊	七、八四八冊
定期刊行物	七九九冊	二六八冊	三九冊	五二三冊	一、六二九冊

圖書閱覽の事務は、現在のところ國立國會圖書館支部東洋文庫が管掌しており、昭和三十五年四月以降、三十六年三月に至る閱覽概況は左の通りである。

閱覽日數 二九六日
 閱覽者數 三、六八九人
 閱覽圖書數 五三、一九九冊
 考查件數 一九六件

國立國會圖書館支部東洋文庫の圖書閱覽規則は左記の如くである。

國立國會圖書館支部東洋文庫圖書閱覽規則

(圖書の閱覽のできる者)

第一條 國會議員、及び東洋學を研究しようとする者で國立國會圖書館長又は東洋文庫長が適當と認めた者は、この文庫の圖書その他の圖書館資料(以下圖書という)を閱覽することができる。

(閱覽時間)

第二條 圖書の閱覽時間は、午前八時四十分から午後四時三十分までとする。

(閱覽を行わない日)

第三條 この文庫は、次の各號の場合には閱覽業務を行わない。

一 日曜日及び祝日

二 木曜日の午後

三 國立國會圖書館長が臨時に必要と認めた場合

(閱覽料)

第四條 圖書の閱覽は無料とする。

(閱覽手續)

第五條 圖書を借り受けるには、申込票に所定の事項を記入して文庫に提出し、圖書閲覧票の交付を受けなければならない。

第六條 閲覧者は、文庫職員の指示に従い、所定の閲覧室において閲覧しなければならない。

(施設等の參觀)

第七條 この文庫の施設または圖書の參觀を希望する者は、文庫長の許可を受けなければならない。

(庫外貸出)

第八條 この文庫の圖書は、庫外貸出を行わない。

(利用の制限)

第九條 1 この文庫の規則又は指示に従わない者若しくはその他の不都合の行爲をした者に對しては、文庫の利用を停止又は禁止することがある。

2 他人に迷惑を及ぼすおそれがある者に對しては、入庫を拒否する。

(亡失、毀損等の處置)

第十條 圖書を亡失又は毀損した者は、指定の圖書を代納するか、又は相當の代價を辨償しなければならない。閲覧票の紛失によつて生じた損害についてもまた同様とする。

附 則

この規則は公示の日から施行する。

6 資料複寫

資料複寫事業には、東洋文庫がみずからの所藏資料を一層充實せしむるためにおこなうものと、廣く内外研究者・研究機關の閱覽・利用の便に供するためおこなうものがある。前者については、昭和二十八年以來、文部省科學研究費交付金を受けておこなわれた大英博物館藏スタイン博士蒐集敦煌文獻のマイクロフィルムをはじめ、『解放日報』・ノースリチャイナリハラルドのマイクロフィルムなど、多くの貴重資料が著々この事業を通じて蒐集せられてきたが、本三十五年度には、機關研究「中世以降における東アジア諸地域の貴重文獻の整理研究」にもとづいて、蓬左文庫などの所藏朝鮮本六、二三九冊分、米國國會圖書館藏舊北京圖書館善本など漢籍六、七五九冊分、計一二、九九八冊分のマイクロフィルムを收め、また内外に對する資料複製サーヴィスについては、本年度、寫眞撮影總數六六、二一〇齣、マイクロ・ポジ・フィルム一二、六〇七呎、焼付引伸三五、七一七枚、計三九三件を扱つた。

なお、寫眞撮影規定は左記の如くである。

東洋文庫寫眞撮影規定

A

一、東洋文庫所藏圖書の寫眞撮影を希望する場合は、豫め圖書撮影申込書を提出して、その承認を得る必要がある。

す。

二、承認を得た圖書は東洋文庫当事者がこれを撮影し、その焼付印畫紙またはポジ・フィルムを交付します。

三、ネガ・フィルム或は乾板は、別に定むる所により交付します。

B

一、東洋文庫所蔵本以外の圖書の寫眞撮影を希望する時は、Aの第一條に準じ、豫め圖書撮影申込書を提出してください。

二、右圖書の撮影は文庫当事者がこれを行い、希望によりフィルム（ネガ、或はポジ）または焼付印畫紙の交付に應じます。

三、撮影料は普通圖書マイクロフィルム撮影料金に準じます。印畫紙焼付料金も亦これに準じます。

寫眞撮影料金

A 研究者用

一、撮影料

普通圖書マイクロフィルム撮影

一コマ

一〇圓

但し、最初の五コマまでは

一五〇圓

貴重特別圖書マイクロフィルム撮影

一コマ

一五圓

但し、最初の五コマまでは

二五〇圓

カットフィルム、乾板（キャビネ版・密着一枚付）

一枚 四〇〇圓

ポジ・フィルム焼付

一呎

二五圓

但し、最初の二呎までは

一五〇圓

スライド

一コマ

二〇圓

製本

二一〇圓

二、印畫紙焼付

CH、手札

一枚 一〇圓

CH、キャビネ

一枚 一五圓

CH、A 5

一枚 二〇圓

CH、A 4

一枚 五五圓

CH、B 5

一枚 四五圓

CH、A 4 (袋綴)

一枚 七〇圓

CH、A 3

一枚 一三〇圓

有光紙 手札

一枚 二〇圓

キャビネ

一枚 五〇圓

八切

一枚 八〇圓

7 情報連絡

國內國外の東洋學研究の狀況を明らかにし、かつ内外の各學會・研究機關・研究者相互の連絡に任ずることは、わが東洋文庫がその世界學界に占める傳統的な實績にもとづいて寄與すべき重要な事業であるが、今回確立された東洋學インフォメーション・センターでは、昭和三十五年度に左のような調査・翻譯・情報の諸活動を開始した。

A 調査事業

一、日本におけるアジア研究の現状に關する調査

國內の主要大學における昭和三十三年度の東洋學關係の研究・講座内容を調査し、ハーヴァード・エンチン研究所の財政的援助を得て、『日本の大學におけるアジア人文・社會科學關係の講義』一九五八年度―日本におけるアジア研究の現状調査(1)―(東洋文庫東洋學インフォメーション・センター、一九六〇年十月、A5版、一九五頁)を刊行し、これと併行して、國內の圖書館・博物館についても調査をおこない、二五一機關より回答を得、同じくアジア關係研究團體を調査した結果、三一六機關より回答を受けた。また、昭和三十四年度および三十五年度に發表された東洋の美術(日本における洋畫を含む)に關する文獻目錄の作製に着手し、カード約五、〇〇〇枚を整備した。

二、アジアに關する書誌目錄の調査・編輯

日本國內主要圖書館並びに研究所の藏書目録、日本人がアジアに關しておこなつた調査研究の文獻目録をはじめ、日本の文學者の著作目録、日本人がアジア以外の諸國の文學・法律・經濟・社會等について研究した論著の目録等々を調査し、カード一、五〇〇枚を集成し、その一部を『アジアに關する書誌目録——人文科學・社會科學——』一九五七年度（東洋文庫東洋學インフォメーションセンター、一九六〇年八月、B6版、五三頁）として、ハーヴァード・エンチン研究所の財政的援助のもとに刊行した。

三、國外におけるアジア研究の現状に關する調査

世界各國の主要大學および研究機關におけるアジア諸言語の語學教育についての基礎調査を開始した。

四、日本關係歐文圖書目録の編輯

すでに公刊せられている諸文獻・書誌に收載の諸目録にもとづいて、目下基礎調査を實施中である。

五、日本のマスコミユニケーションに現われたアジア關係記事に關する調査

昭和三十四年一月より十二月にいたる日刊新聞に現われたアジア關係のニュースについて調査し、カード約一、八〇〇枚を整備した。

六、中國歴史學・考古學關係の研究情報に關する調査

歴史學關係については、「時代區分」に關する文獻カードを作製中であり、考古學關係では、その發掘・研究に關する地方別文獻カード四、五〇〇枚を整備している。

B 翻譯事業

宋史提要編纂協力委員會を援助して、『宋史提要』のために、收載論文要旨の翻譯をおこなった。
 以上のほか、情報連絡の活動として、内外の研究者・研究機關との間に東洋學關係の考查業務をおこなっており、
 昭和三十五年度においては、海外學界との間に左表のような調査連絡をおこなった。

ヨーロッパ				アジア				地域	項目 (件)	
ソ ヴ エ ト	オ ラ ン ダ	ド イ ツ	イ ギ リ ス	そ の 他	イ ン ド	ヴ ェ ト ナ ム	韓 國		中 華 人 民 共 和 國	受
四	二	四	一二	六	一		一	二	圖書關係	
八	一五	一五	二七	四	三		一〇	七	寫眞關係	
			五	三		三	一		學術關係	
一		三	一四			五	一		その他	
				一					計	
				一					受	
	一	二	二	二	二				出	
	四		一		一	一	一		受	
四	三	六	一九	一二	三	三	二	二	出	
九	一九	一八	四二	五	四	六	二	七		

合 計	ア メ リ カ 合 衆 國	ヨ ー ロ ッ パ		
		そ の 他	フ ラ ン ス	イ タ リ ア
五 二 一 二 八	一 一	二	四	三
二 一	二 二	一	二	四
四 九	八		一	
二	二 〇	五		
五	一			
二 〇	三		一	
一 八	五	四	一	一
九 五	四	一		五
二 〇 〇	二 五	六	六	四
	四 九	一 七	三	九

五 研究 活 動

1 研究者 養成

東南アジア・インド・イスラム諸地域に關する研究は、從來、わが國において必ずしも十分でなかつた。ことに、この方面の研究には特殊な言語を習得する必要があり、そのうえ資料の整備もはなはだ困難であつて、その重要性にかかわらず、今なお未開拓な分野が多い。戦前からこの方面の資料を整え、またその研究をも併せおこなつてきた東洋文庫は、この現状にかんがみ、昭和三十一年度より文部省の補助を得、戦前におこなわれていた研究者養成制度を復活した。文部省およびハーヴァード・エンチン研究所の補助金による本年度の研究は左記の通りである。

「近世インドネシア史研究」

生 田 滋

「唐代社會經濟史研究」

池 田 溫

(蒙古史研究のため在米)

岡 田 英 弘

「六朝隋唐制度史の研究」

菊 池 英 夫

「近代中國排外運動の研究」

佐々木 正 哉

「中國社會經濟史の研究——特に宋代の商業史的研究を中心として——」

斯 波 義 信

「近代日本政治外交史研究」

「周代青銅器文化の研究」

(チベット語學研究のため在佛)

鳥海靖

西田守夫

山口瑞鳳

2 機關研究

研究課題 「中世以降における東アジア諸地域の貴重文獻の整理研究」

研究擔當者 岩井大慧

研究協力者

今井吉之助 (尊經閣文庫長) 榎一雄 (東京大學教授) 織茂三郎 (蓬左文庫主任) 金倉圓照 (東北大學名譽

教授) 河野六郎 (東京教育大學教授) 末松保和 (學習院大學教授) 鈴木俊 (中央大學教授) 田川孝三

(東洋文庫員) 田村實造 (京都大學教授) 塚本善隆 (京都大學人文科學研究所教授) 長澤規矩也 (法政大學

教授) 仁井田陞 (東京大學東洋文化研究所教授) 福井康順 (早稻田大學教授) 故藤田亮策 (奈良國立文化

財研究所長) 松本信廣 (慶應義塾大學教授) 宮崎市定 (京都大學教授) 山本達郎 (東京大學教授) 吉川

幸次郎 (京都大學教授) 米山寅太郎 (靜嘉堂文庫長) 和田清 (東京大學名譽教授)

東洋學に關する文獻のマイクロフィルムセンターとして、内外の研究者・研究機關の要請に應ずるため、東洋文

庫は、前年度に引續き文部省科學研究費交付金（機關研究）を得て、十七世紀以前に撰述刊行された貴重朝鮮本、米國國會圖書館藏舊北京圖書館善本のマイクロフィルム撮影並びに整理をおこなつた。その結果、朝鮮本については、尊經閣文庫（一一三部・八三三冊・六〇、六五四齣）、靜嘉堂文庫（一〇五部・五九八冊・五〇、六五七齣）、大阪府立圖書館（五八部・二六〇冊・二〇、二四五齣）などに收藏されている古刊本、計二二〇、六二七齣をマイクロフィルムに撮り、また、米國國會圖書館所藏の中國書については、三一三リール・三一、三〇〇フィート（二一九、一〇〇齣）のマイクロフィルムが到着した。なお、朝鮮本マイクロフィルムのネガ・フィルムは、それぞれ原本所藏の各機關にこれを納め、ポジ・フィルムのみを東洋文庫に收藏した。

中國古籍をはじめ、以上の撮影をもつてしてなお残されている貴重文獻は、尨大な數にのぼり、また、既に收集せられたマイクロフィルムを活用し得るためこれを整理するにも、多大の費用を必要とする現状にあつて、今後の本事業の繼續發展が切に望まれる。

3 職員の研究業績

青 山 定 雄

（論文）「宋代における四川官僚の系譜についての一考察」〔和田博士古稀記念東洋史論叢〕、東京 講談社、一九六一年二月、三七—四八頁〕

生田 滋

(書評) 「イスカンダル著『ヒカヤット・アチエ』」(『東洋學報』四三卷四號、一九六一年三月、一一八一—一二二頁)

池田 溫

(概説) 「敦煌」(『世界の歴史』6「東アジア世界の變貌」、東京 筑摩書房、一九六一年三月、一八七—一九九頁)

(書評) 「西域文化研究第二、敦煌・吐魯番社會經濟資料(上)」(『史學雜誌』六九編八號、一九六〇年八月、五三—八六頁)

(講演) 「西州における均田制の性格」(東京大學東洋文化研究所研究會、一九六〇年六月七日)

(座談會) 「戸令・戸籍・計帳」(『日本歴史』一五一、一五二、一五三號、一九六一年一、二、三月) 竹内理三・井上光貞・土田

直鎮・青木和夫の諸氏との談話速記

市古 宙三

(論文) 「鄭觀應の『易言』について」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、一〇七—一二五

頁)

(書評) 「小野川秀美著『清末政治思想研究』」(『東洋學報』四三卷一號、一九六〇年六月、一三〇—一三五頁)

岩井 大慧

(論文) 「明史朝鮮傳有頭注日本複製本について」(補遺)(『朝鮮學報』二五輯、一九六〇年四月、四九—五〇頁)

「眞夏に雪を降らせた話」(『青淵』一三七號、澁澤青淵記念龍門社、一九六〇年八月、一八一—二〇頁)

「オランダ古文書について」(『公文書館制度研究會調査資料』二號、一九六〇年八月、三七—五八頁)

「各國の西域探検と佛教」(下)〔駒澤史學九號、一九六一年一月、一八一—二六頁〕

「馬糞石が人命を救ふ話」〔日本歴史〕一五一號、一九六一年一月、三九—四三頁〕

「麗板『人天眼目』とその種々板考」〔和田博士古稀記念東洋史論叢〕、東京 講談社、一九六一年二月、一一七—一二二頁〕

(講演) 「北方民族の奇習ジャダについて」(東洋文庫秋期東洋學講座、一九六〇年十月五日)

「ジャダによる禱雨と醫藥劑史料」(日本民族學大會、熊本醫科大學にて、一九六〇年十二月二日)

岩 生 成 一

(論文) 「十七世紀初期バンタン移住日本人について」〔和田博士古稀記念東洋史論叢〕、東京 講談社、一九六一年二月、一三三—一四〇頁〕

(講演) 「日本における蘭醫ウイルレム・テン・ライネについて」(蘭學資料研究會例會、一九六〇年十一月十九日)

宇 都 木 章

(論文) 「『社に戮す』ことについて——周禮の社の制度に關する一考察——」(中國古代史研究會編『中國古代史研究』

東京 吉川弘文館、一九六〇年十一月、一六一—一八八頁)

「禮記の郊祀についての憶説」〔和田博士古稀記念東洋史論叢〕、東京 講談社、一九六一年二月、一七五—一八五頁)

「非命の詩人——屈原——」〔世界の歴史〕3〔東アジア文明の形成〕、東京 筑摩書房、一九六〇年十一月、二

梅原末治

(編書) 『日本蒐賈支那古銅精華』第二、第三冊(大阪 山中商會、一九六〇年十二月、一九六一年一月、九二、九〇圖)
(論文) 「新出土の銅鐸鎔范片其他」(『古代學研究』二五號、一九六〇年八月)

「古式古墳觀」(『大和の古代文化』、大阪 近畿鐵道株式會社、一九六〇年十月)
「殷中期とされている鄭州出土古銅器の性質」(『史學』三三卷二號、一九六一年二月、一一—二四頁)
(講演) 「戰國・漢時代の物質文化」(白鶴美術館學術講演、一九六〇年五月三日)

「南方アジア銅鼓觀」(東洋文庫春秋東洋學講座、一九六〇年五月二十五日)

「東亞に於ける古鏡」(慶應大學史學會、一九六〇年十一月十四—十六日)

「古鏡より見た日本上古」(天理大學研究所、一九六一年二月七日)

「日本に於ける古銅器の蒐集とその研究」(國際文化會館、一九六一年三月二十四日)

「沖の島の出土鏡を中心として」(歴史地理學會、一九六一年三月二十五日)

榎 一 雄

(著書) 『邪馬臺國』(日本歴史新書、東京 至文堂、一九六〇年七月、A5版、二〇八頁)

『エフタル勃興前後の中央アジア』(東洋文庫論叢第四十六、東京 東洋文庫、一九六一年三月、A5版、七五〇

頁)

(論文) 「中央アジア・チベット」(『日本における歴史學の發達と現状』、東京 東京大學出版會、一九五九年八月、三六四

—三七二頁) 英譯を Le Japon au XI^e Congrès International des Sciences Historiques à Stockholm

—L'état actuel et les tendances des études historiques au Japon—, Tokyo: Nippon Gakujutsu

Shinkokai, 1960. pp. 351~357. に收む

「中近東史を貫く特色」(『高等學校社會科セミナー』三號、東京 講談社、一九六〇年十一月、一〇—一二頁)

「職方外紀の中央アジア地理」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、二二—二二

二頁)

「石田幹之助著『長安の春』解説」(『世界教養全集』一八卷、東京 平凡社、一九六一年二月、四六〇—四六二頁)

(書評) 「リッチ版・青木一夫譯『東方見聞錄』マルコ・ポーロ」(『朝日ジャーナル』三卷三號、一九六一年一月、四八

—四九頁)

「ペリオ著『マルコポーロ注釋』第一卷」(『東洋學報』四三卷三號、一九六〇年十二月、九二—九四頁)

(講演) 「古代中國西域交渉史の一側面」(『東洋文庫春期東洋學講座』一九六〇年六月一日)

「不明の二地名——杼泥城と倭面土國——」(『東洋文庫談話會』一九六〇年九月十七日)

「邪馬臺國について」(福岡県高等學校社會科歴史部會、福岡県糸島郡前原町縣立糸島高等學校にて、一九六〇年九

月二十二日)

「樓蘭」(第五十九回史學會大會公開講演、東京大學にて、一九六〇年十一月五日) 要旨を「史學雜誌」六九編一

二號、八三一―八五頁に收む

「チベットにおけるイタリア宣教師の活躍」(駒澤大學史學大會、一九六〇年十一月二十日)

「インドの話」(茨城大學、一九六〇年十一月三十日)

「マルコポーロとその時代」(内陸アジア協會、跡見學園短期大學にて、一九六一年一月三十日)

岡田英弘

(著書)『滿文老檔』IV(東洋文庫叢刊第十二、東京 東洋文庫、一九六一年三月) 滿文老檔研究會の一員として、神田信

夫・岡本敬二・石橋秀雄・松村潤の諸氏と共同執筆

(論文)「元の藩王と遼陽行省」(『朝鮮學報』一四輯、一九五九年十月、五三三―五四三頁)

「開元城新考」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、二四七―二五四頁)

神田信夫

(著書)『滿文老檔』IV(東洋文庫叢刊第十二、東京 東洋文庫、一九六一年三月) 滿文老檔研究會の一員として、岡本敬

二・石橋秀雄・松村潤・岡田英弘の諸氏と共同執筆

(論文)「滿洲史」(『日本における歴史學の發達と現状』、東京 東京大學出版會、一九五九年八月、三五―三五六頁)

英譯や *Le Japon au XI^e Congrès International des Sciences Historiques à Stockholm—L'état actuel et les tendances des études historiques au Japon—*, Tokyo: Nippon Gakujutsu Shinkokai, 1960.

pp. 338~343 に收む

「清初の文館について」(『東洋史研究』一九卷三號、一九六〇年十二月、三六一—五二頁)

「清初の會典について」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、三三七—三四八頁)

(記事) 「清史稿の新版を手にして」(『書報』三四號、一九六一年一月、一〇—一二頁)

(講演) 「清初の會典について」(東方學會第五回國際東方學者會議、霞山會館にて、一九六〇年五月二十日)

「清初の滿鮮關係の一齣」(朝鮮史研究會例會、一九六〇年十二月十日)

菊池 英夫

(論文) 「唐代府兵制度拾遺」(『史林』四三卷六號、一九六〇年十一月、一〇二—一二七頁)

「安史之亂前の兵制運用上の二、三の問題」(東洋文庫談話會、一九六〇年六月十八日)

(講演) 「玄宗朝を中心として見たる『軍』制度の一考察」(東京大學東洋史談話會、一九六〇年十月二十六日)

(動向) 「唐宋時代を中心とする所謂『雇傭勞動』に關する諸研究」(『東洋學報』四三卷三號、一九六〇年十二月、四九—

六六頁)

北村 甫

(論文) 「チベット文字轉寫とチベット語表記」(『日本西藏學會會報』七號、一九六〇年十月、一一—四頁) 西田龍雄氏

と共同執筆

河野 六郎

(書評) “Serruis, Paul L-M.: The Chinese Dialects of Han Time according to Fang Yen. Berkeley

& Los Angeles, 1959.”〔東洋學報〕四三卷三號、一九六〇年十二月、八六一—九二頁〕

佐伯 富

〔著書〕『中國隨筆雜著索引』（京都 東洋史研究會、一九六〇年六月、A 5版、一一五六頁）

『元典章索引稿』第四篇（京都大學人文科學研究所元典章研究班、一九六一年三月、B 5版、二二五頁）

〔論文〕『近世中國における觀音信仰』（『塚本博士頌壽記念佛敎史學論叢』、京都 塚本博士頌壽記念會、一九六一年二月、三七二—三八九頁）

佐々木 正哉

〔講演〕「同治年間の教案について」（東洋文庫談話會、一九六〇年五月七日）

斯波 義信

〔論文〕「宋代における福建商人の活動とその社會經濟的背景」（『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、四八五—四九八頁）

「江南」（『世界の歴史』6『東アジア世界の變貌』、東京 筑摩書房、一九六一年三月、八一—一二二頁）

〔講演〕「宋代における地方市場の一考察——墟市の分析を中心として——」（東京大學東洋史談話會、一九六〇年六月二十六日）

「福建商人の發生——宋代商業史の地域史的考察——」（東洋文庫談話會、一九六一年二月二十五日）

末松 保和

(論文) 「推古朝の外交」 (『歴史教育』八卷四號、一九六〇年四月、一一八頁)

「玄菟郡の戸口數について」 (『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、五三七―五四四頁)

(講演) 「日鮮貿易における胡椒について」 (朝鮮史研究會例會、一九六一年二月二十一日)

鈴木 俊

(論文) 「麻田考」 (『中央大學文學部紀要』二〇號〔史學科第六號〕、一九六〇年十一月、六五―七二頁)

「隋の均田制度について」 (『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、五四五―五五二頁)

周藤 吉之

(論文) 「宋朝國史の食貨志と『宋史』食貨志との關係」 (『東洋學報』四三卷三號、一九六〇年十二月、一―四八頁)

「南宋の田骨・屋骨・園骨について——特に改典就賣との關係——」 (『東方學』二二輯、一九六一年三月、七三―八六頁)

「南唐・北宋の沿徵」 (『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、五六五―五七六頁)

關野 雄

(編書) 『世界考古學大系』5 『東アジアI』 (東京 平凡社、一九六〇年九月、B5版、二二二頁)

(論文) 「饗養文異形盃」 (『國華』六九卷九號〔通卷八二號〕、一九六〇年九月、三七―三七二頁)

「盧氏涅金考」 (『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、五七七―五八七頁)

「龍山文化の解明」(駿臺史學)一號、一九六一年三月、一一三頁)

(動向)「東亞考古學—昭和三十一年度」(日本考古學年報)9、一九六一年三月、六一—一〇頁)

(講演)「布錢と鐵製耕具」(日本考古學會例會、一九六〇年七月二日)

高 島 稔

(書評)“Ansari, Ghous: Muslim Caste in Uttar Pradesh—A Study in Culture Contact. Lucknow, 1960” (東洋學報)四三卷一號、一九六〇年六月、一五二—一五九頁)

田 川 孝 三

(論文)「李朝初期の貢納請負」(史學雜誌)六九編九號、一九六〇年九月、一一三—一三六頁)

(講演)「世宗・文宗の佛教擁護と僧徒の經濟活動」(朝鮮史研究會例會、一九六〇年九月十七日)

「大院君の執政と朝鮮」(陸上自衛隊調査學校、一九六一年三月二十三日)

田 中 正 俊

(論文)「明末清初江南農村手工業に關する一考察」(和田博士古稀記念東洋史論叢、東京 講談社、一九六一年二月、五九九—六一四頁)

(動向)「補農書をめぐる諸研究——明末清初土地制度史研究の動向——」(上) (東洋學報)四三卷一號、一九六〇年六月、一一〇—一一六頁)

(紹介)「東京教育大學アジア史研究會編『中國近代化の社會構造』(歴史評論)二三號、一九六〇年十一月、七六

一七七頁)

(講演) 「一田兩主制と頑佃抗租」(社會經濟史學會第二十九回大會、中央大學にて、一九六〇年五月二十日)

「中國近世史研究の二、三の問題」(國學院史學會史學講座、一九六〇年九月一日)

「中世中國における國家權力と土地所有關係」(歴史學研究會古代・封建合同部會、一九六一年二月二十八日)

鳥海靖

(講演) 「近代日本における議會政黨の形成」(東洋文庫談話會、一九六〇年七月十六日)

「丸山眞男著『忠誠と反逆』をめぐつて」(東京大學近代史研究會、一九六〇年十月二十四日)

中嶋敏

(論文) 「北宋徽宗朝の大錢について」(和田博士古稀記念東洋史論叢、東京 講談社、一九六一年二月、六三一―六三

八頁)

永積昭

(論文) 「パタニ國の支配層について——十七世紀のパタニ國II——」(「南方史研究」二號、一九六〇年六月、一五七

―一七六頁)

(書評) 「ド・フラーフ著『マタラム王スルタン・アグン(一六一三―一六四五)及びその先王パネンバハン・

セタ・イン・クラピヤク(一六〇一―一六一三)の治世』(「東洋學報」四三卷一號、一九六〇年六月、

一四八―一五二頁)

西田 守夫

(講演) 「考工記車制の一問題——『屨』の系譜——」(『東洋文庫談話會、一九六一年一月二十一日』)

藤 枝 晃

(論文) 「敦煌寫經の字すがた」(『墨美』九七號、一九六〇年五月、一一四〇頁)

「敦煌出土の長安宮廷寫經」(『塚本博士頌壽記念佛敎史學論集』、京都 塚本博士頌壽記念會、一九六一年二月、六四七—六六七頁)

「吐蕃支配期の敦煌」(『東方學報』京都三一冊、一九六一年三月、一九九—二九二頁)

(記事) 「曜齋印談」(『淡交』三十六年一月號、一九六一年一月)

松 村 潤

(著書) 『滿文老檔』Ⅳ(『東洋文庫叢刊第十二』、東京 東洋文庫、一九六一年三月) 滿文老檔研究會の一員として、神田信夫・

岡本敬二・石橋秀雄・岡田英弘の諸氏と共同執筆

(論文) 「崇徳三年の滿文木牌について」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、八八—三七八頁)

(講演) 「崇徳元年の証明について」(『東洋文庫談話會、一九六〇年四月十六日』)

護 雅 夫

(論文) 「匈奴——古代遊牧帝國の形成——」(『世界の歴史』3 『東アジア文明の形成』、東京 筑摩書房、一九六〇年十

一月、二七、二九〇頁)

「東突厥官稱號考——突厥第一帝國における Sad ——」(上)(下)〔史學雜誌〕七〇編一、二號、一九六一年一、二月、一一三三、二九一五八頁)

「Siçin 四至」〔和田博士古稀記念東洋史論叢〕、東京 講談社、一九六一年二月、九五九—九七〇頁)

「ウイグル文賣買文書——特に賣主と買主とについて——」〔遊牧社會史探求〕9冊、一九六一年三月、一一七頁)

A Study on Uygur Documents of Loans for Consumption, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*. No. 20 (1959, March). pp. 111~148.

(概説) 「ウイグルの發展」〔圖說世界文化史大系〕26〔東西文化の交流〕、東京 角川書店、一九六〇年七月、一九二—一九九頁)

「匈奴の發展」〔圖說世界文化史大系〕13〔北アジア・中央アジア〕、東京 角川書店、一九六一年二月、六四—七三頁)

「中國の西域發見」〔圖說世界文化史大系〕13〔北アジア・中央アジア〕、東京 角川書店、一九六一年二月、七四—八二頁)

(書評) “Esin, Emel: *Türkistan Seyahatnamesi*. Ankara, 1959.”〔東洋學報〕四三卷三號、一九六〇年十二月、一一二—一一五頁)

(翻譯) 「ヒツタイトの浮彫」 (トルコ語) (「オリエント學會會報」三卷六號、一九六〇年八月、一一—一三頁)

(講演) 「ウイグル文法律文書、特に消費貸借文書について」 (東洋文庫春期東洋學講座、一九六〇年六月十五日)

森岡 康

(講演) 「李朝の綱常罪について」 (朝鮮學會第十一回大會、京都樂友會館にて、一九六〇年十一月六日)

山根 幸夫

(編書) 『明代史研究文獻目錄』 (東京 東洋文庫、一九六〇年十二月、B5版、二六六頁)

(論文) 「明清時代華北における定期市」 (「史論」八集、一九六〇年十一月、四九三—五〇四頁)

「丁料と綱銀——福建における里甲の均平化——」 (『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六一年二月、一〇二七—一〇三八頁)

年二月、一〇二七—一〇三八頁)

「清代の人身賣買に關する詩——『國朝詩鐸』について——」 (『比較文化』七號、一九六一年三月、一三一—四一頁)

(書評) 「江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』」 (『東洋學報』四三卷四號、一九六一年三月、九八一—一〇二二頁)

(紹介) 「清水泰次『明の太祖の體刑剝皮實草について』」 (『法制史研究』二一、一九六一年三月、二五八頁)

(講演) 「明代南北シナにおける税制の差違」 (東北中國學會、山形大學にて、一九六〇年五月二十二日)

「歴史學における比較研究の方法について」 (東京女子大學比較文化研究所談話會、一九六一年一月十九日)

山本達郎

(論文) 「越南の家譜」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京 講談社、一九六二年二月、一〇三九—一〇五〇頁)

(講演) 「インド史蹟調査團現況報告」(東京大學東洋文化研究所研究會、一九六〇年五月六日)

Recent Trends of Studies on «Chin-tien» land allotment System, XXVth International Congress of Orientalists, Moscow, 9~16 August 1960.

From T'ang to Sung, A Transitional Period in East Asian History, Comité International des Sciences Historiques, XI^e Congrès International des Sciences Historiques, Stockholm,

21~28 Aout 1960. 報告内容は同會議の Rapports III, Moyen Age に收む

「インドにおける史蹟の調査」(東洋文庫秋期東洋學講座、一九六〇年十月十九日)

「第二十五回國際東洋學者會議(モスクワ)に参加して」(東洋文庫談話會、一九六〇年十月二十九日)

「デリー諸王朝の遺蹟」(東方學會第十回全國會員總會、關西大學にて、一九六〇年十一月四日) 要旨を「東方學」二一輯に收む

「敦煌發見オルデンブルグ及びベリオオ將來戸制田制關係文書十種」(史學會第五十九回大會東洋史部會、一九六〇年十一月六日)

「インド史蹟調査及びそれに關聯する諸問題」(日本民族學協會・日本人類學會月例研究會、一九六〇年十二月三日)

「一九六〇年度『國際歴史學會議』『國際東洋學者會議』報告」（日本學術會議歴史學研究連絡委員會・日本歴史學協會その他主催、一九六〇年十二月五日）

4 各種研究室・委員會

東洋學連絡委員會

研究連絡組織の確立や共同研究の推進等々、學術體制緊密化の要請は、戦後の學界に見られる世界的な現象であるが、戦前からその研究事業に國際的規模の實績をあげてきた我が東洋文庫は、このような機能をますます發揮し、民間機關としての自由な立場から東洋學の振興に貢獻すべく、昭和三十三年より、廣く代表的東洋學者に委嘱して東洋學連絡委員會を組織し、文庫の研究事業に關する助言を得ることとなつた。

本三十五年度の東洋學連絡委員會は、五月二十三日、十一月七日の二回に互つて開催され、東洋文庫事業計畫とその運営に關して協議がおこなわれた。

敦煌文獻研究室

一九五四年以降、榎一雄氏らの盡力により大英博物館所蔵スタイン將來敦煌文獻全部のマイクロフィルムが我國にもたらされたのを機會に、敦煌文獻の整理・研究促進のため敦煌文獻研究連絡委員會が東洋文庫内に設置された。本年度の事業は左の通りである。

一、日本國內の公共團體乃至個人所蔵の敦煌文獻の調査

大谷大學圖書館・唐招提寺・天理圖書館所蔵の關係資料を調査の上、焼付寫眞をそなえた。

二、國外の敦煌資料の調査

重松俊章氏のご好意により、氏の筆録されたペリオ文獻八十餘點につき記録を得た。大英博物館所蔵スタイン第

一次・第三次中亞將來文獻中、未整理斷片のマイクロフィルム撮影を進めた。

三、綜合研究

鈴木俊氏を代表者とする文部省綜合研究「西域出土古文書・古文獻の調査研究」の一環として、中亞發見漢文文獻に關する從來の著録・研究すべてを分類整理し、カード化する作業を行った。

宋代史研究室

宋史提要編纂協力委員會は、パリに本部を置く Sung Project (宋史提要編纂會)との協力事業を行うために設けられ、昭和三十一年からは東洋文庫に附設されて、宋代史研究文獻提要の編纂に従事し、昭和三十五年三月これを完成した。よつて昭和三十五年度には東方學研究日本委員會を通じ、ハーヴァード・エンチン研究所の補助を受けてその出版に着手するとともに、つぎの諸事業を行った。

一、すでに昨年度に新規事業として一部着手された宋代政治史年表の作製に従事し、宋史本紀を典據として約二十四卷分の原稿カードの作製を終つた。

二、同じく京都支部においては、宋代主要文集中、司馬文正公集以下四文集の索引カードを作製した。

三、かねて計畫していた宋人傳記索引の一部として、宋人の墓誌銘・神道碑等のカードを作製した。

四、Sung Project の希望によつて宋代研究文獻提要の翻譯を進めた。

五、國內及び國外の宋代史關係研究文獻の目録カードを作製し、その速報を Sung Project のパリ本部及び國內關係者に頒布した。

明代史研究室

かねてよりアメリカではハーヴァード大學の Fairbank 教授、プリンストン大學の Mote 教授らを中心に、一九四三年に刊行された *Eminent Chinese of the Ch'ing Period* に倣ひ明代の傳記辭典の編纂が企畫され、一九五八年夏、Fairbank 教授より和田清博士にこの計畫に對する協力の要請があつた。一九五九年秋、この事業を進めるための基礎的作業として日本人・中國人による明代に關する研究文獻の目錄の作製を依頼された。そこで和田博士の指導の下に山根幸夫・田中正俊研究員らを中心に明代史研究委員會を組織し、アメリカの *Ming Biographical Dictional Project* との協力體制をつくつて、文獻目錄のためのカード作製に着手し、一九六〇年十二月、『明代史研究文獻目錄』（B5版、二六六頁）を完成した。本書には、明代における中國とその周邊の國々に關する日本人および中國人の研究文獻題目が分類・収録されており、日本人の研究業績については明治初年以降、中國人のそれについては一九〇〇年以降、それぞれ一九六〇年までに及んでいる。また年譜については明・清代のものも收められている。この目錄は傳記辭典編纂の便に供する目的をも有しているため、卷末には、著者名索引のほか、各論文にあらわれる明代重要人物の人名索引をも附してある。

本委員會は、また、アメリカ側との協力だけでなく、わが國における明代史研究を推進するため、「千頃堂書目集部索引」「日本現存明人文集綜合目錄」「明代督撫年表」「*Eminent Chinese* 漢名索引」などの編纂を企畫・進行

中であり、また、明代地方行政資料の整理研究の一環として呂坤「實政錄」の講讀をおこなっている。

清代史研究室

清朝成立過程の研究、とくにその中核資料たる滿文老檔の譯註刊行を中心に事業を進めているが、本年度においては、昨年度その譯註を完成した「滿文老檔」V(太宗2)すなわち清の太宗の天聰五年正月より天聰末年に至るまでの二十八卷の刊行を行った。なおこれと併行して太宗崇徳の卷の譯註作製にもあたり全三十八卷の譯註原稿のタイプ印刷を終了した。また清太宗實錄の天聰年間の固有名詞索引の作製にかかり、そのカード記入を終えた。

近代中國研究室

近代中國研究委員會は、和田清博士・山本達郎教授を中心として、昭和二十八年から設立の準備が進められ、翌二十九年十一月、ロックフェラー財團の財政的援助を得て、正式に發足した。その目的とするところは次の二點にある。

(一) できるだけ広く異つた分野の研究者を集め、政治的偏見をはなれて、實證的研究をする。

(二) 日本における研究の實情を歐米諸國に紹介するとともに、歐米諸國における近代中國研究の實情を學ぶ。

(一)の目的のためには、二十五名の研究員がそれぞれテーマを定めて研究に従事し、月二回研究會を開いて意見の交換を行い、その成果は『近代中國研究』に發表してきた。(二)の目的のためには、毎年一名の研究員を歐米に派遣して

きた。

本年度は、これまでの成果を検討して、今後、研究をいずれの方向にのぼすべきかを討論した。その結果に基づき、現代中國に重點をおく新しい研究計畫を立案、その實現のための準備をすすめた。

このような將來の準備と併行して、次のような編集、出版を行った。

I 編 集

『東洋文庫所藏近代中國經濟關係圖書目錄』

『中國における近代中國研究論文目錄 一九五六—六〇』

II 出 版

『近代中國關係文獻目錄彙編』 B 5 版 謄寫版 四四頁

『近代中國研究』第四輯 A 5 版 二五四、一三六頁 英文要旨八頁

「清末中國における外國綿製品の流入」

「長江流域教案の研究」

『基督教與中國文化』にみられる吳雷川の思想——中國におけるキリスト教思想受容の一側面——」

山 本 澄 子

「近代中國における族塾の性格」

多 賀 秋 五 郎

「東洋文庫所藏近百年來中國名人關係圖書目錄」

岡 古 宙 三 子 編

近代日本研究室

近代日本研究室は開國百年記念文化事業會より寄贈された近代日本關係文獻をもとに一九六〇年四月一日より發足した。右の文獻類は開國百年記念文化事業會が、明治文化史・日米文化交渉史を編輯するために蒐集したもので、全部で約六、〇〇〇點（うち刊本約五、七〇〇點、マイクロフィルム・寫本・原本類約三〇〇〇點）に及ぶ明治時代についての文獻が中心であるが、なかでも、傳記類はかなり網羅的に集められており、貴重なものである。

本研究室は、本年度はもつぱら研究室を整備し、内外の近代日本研究者の便に供するため、右文獻類の整理・分類カードの作製にあたった。そして、この機會に、右の文獻類をも含めて東洋文庫に所藏されている近代日本關係文獻目録の編輯・刊行に着手し、六一年三月末現在で、文獻カード・目録原稿の作製の作業をほぼ完了した。従來、東洋文庫にはかなり多くの近代日本研究に關する貴重な文獻が所藏されているにもかかわらず、利用者は比較的少なかった。本研究室の發足を契機に、今後、多くの近代日本研究者にこれらの文獻類が利用されることが望まれる。

中央アジア・イスラム研究室

昨年度に引きつぎアジア地域総合研究の一環として、「イスラム諸國の社會構造の研究」を分擔した。事業としては圖書資料の蒐集に重點を置き、トルコ語及びアラビア語文獻のいずれも現地出版のものを購入した。なおペルシア語文獻については大英博物館所藏のサファヴィー朝關係資料をマイクロフィルムによつて將來した。この総合研究で蒐集した文獻については日本學術振興會より「アジア地域総合研究文獻目録」第3巻が刊行されている。本総合研究は本年度をもつて一應終了し、明年度よりはあらたに機關研究（B）として資料の蒐集にあたることとなつてゐる。東洋文庫内アジア地域総合研究施設「昭和33・34・35年度における文獻蒐集について」（パンフレット）参照。

チベット研究室

東洋文庫は、故河口慧海師よりチベット大藏經ナルタン版、デルゲ版カンギユル、チヨネ版カンギユル、寫本カンギユル及び藏外文獻の寄贈を受けた際、河口師を中心に藏和大辭典の編集を計畫、準備を進めて來たが、第二次世界大戦と河口師の逝去により中絶、戦後再び編集を企畫、昭和三十年より新たに藏和辭典編集委員會を組織、文部省補助金を受け、辭典編集資料の収集と整理に當つて來た。本年度より右委員會を擴大、チベット研究委員會とし、藏

和辭典編集資料の整備を繼續するほか、言語學、宗教學、歴史學等各方面から綜合的にチベット研究を行うことになった。

本年度の主な事業とその経過は次のようである。

(一) 藏和辭典編集資料の整備

前年度に引續き、収録語彙の補充、譯語の検討のため、ラサ版藏々辭典(北京版・格西曲札「藏文辭典」)、「翻譯名義大集」デルゲ版、荻原雲來「梵漢辭典」のカード化を完了、「攝眞實論釋」の語彙カードの整理等を行つた。

(二) 十三世ダライ・ラマ傳記の研究

本年度より三年計畫で、ハーヴァード補助金により十三世ダライ・ラマ全書中の「傳記」のテキストとその譯註を出版する。本年度はテキストの寫眞複製を作製、讀み合わせを開始した。

(三) チベット大藏經總索引の作成

イタリアの中東亞研究所の提案により、同研究所との協同事業として、チベット大藏經カンギユルの地名・人名・神佛名事項索引の作製を企畫、豫備調査として涅槃經の諸版のテキストの比較検討、一部について語彙収集を行い、具體的な作業方法を検討した。

(四) 日本現在チベット藏外文獻の整理

前年度に東洋文庫所藏文獻につき基礎目録カードを作製、缺丁調査等を行つたが、本年度はそのうち特に歴史關係文獻について詳細な調査を開始し、また、東京大學所藏文獻の基礎目録カードの作製と分類とを完了した。

(五)チベット人との協同によるチベット語・チベット史・ラマ教の綜合的研究

本研究はロックフェラー財團補助金により本年度より三年計畫で各國のチベット研究センターと提携して行われる事業である。本研究室は(一)現代チベット語辭典の編集、(二)古代・中世チベット史の重要文獻の研究、(三)ラマ教新舊兩派の比較研究の三項目について研究を實施するが、右研究に協力するチベット學者をインドより招聘するため、委員二名をインドに派遣した。

南アジア研究室

南アジア研究室では先にオランダのハーグの國立古文書館(*'t Algemeen Rijksarchief*)所藏の「オランダ東インド會社到着文書集」(*Overgecomen Brieven*)の目錄をマイクロフィルムに撮影し、昭和三十四年度よりその文字並びに整理を行つて來た。今年度はその繼續事業として一六七一年より一六八〇年に到る分の轉寫を行つた。但し、一六八〇年の分は一部未了である。これに附隨して東京大學史料編纂所所藏のマイクロフィルムと本目錄との對照を行い、同所所藏のものについてはその旨註記した。既刊の文書集目錄との對照も前年に引續いて行つた。また本目錄について簡単な索引を作製した。なお三十四年度に轉寫した分は製本して登録し、一般の閱覽に供している。

附 東洋學術協會

會長 和田清

評議員 石田幹之助

白鳥清

山本達郎

編輯委員 青山定雄

越智重明

嶋田襄平

田川孝三

本田實信

常任委員 和田清

池田溫

北村甫

鳥海靖

護雅夫

岩井大慧

末松保和

和田清

荒松雄

金子良太

末松保和

辻直四郎

三上次男

和田久德

宇都木章

佐々木正哉

永積昭

山根幸夫

岩生成一

津田左右吉

市古宙三

栗原朋信

鈴木俊

中嶋敏

三根谷徹

榎一雄

斯波義信

西田守夫

梅原末治

原田淑人

岩生成一

河野六郎

周藤吉之

坂野正高

村上正二

神田信夫

高島稔

堀敏一

榎一雄

三上次男

衛藤藩吉

佐伯富

關野雄

藤枝晃

山本達郎

菊池英夫

田中正俊

松村潤

幹 事 木村壽賀子

東洋學報四拾參卷一號——四號内容目次

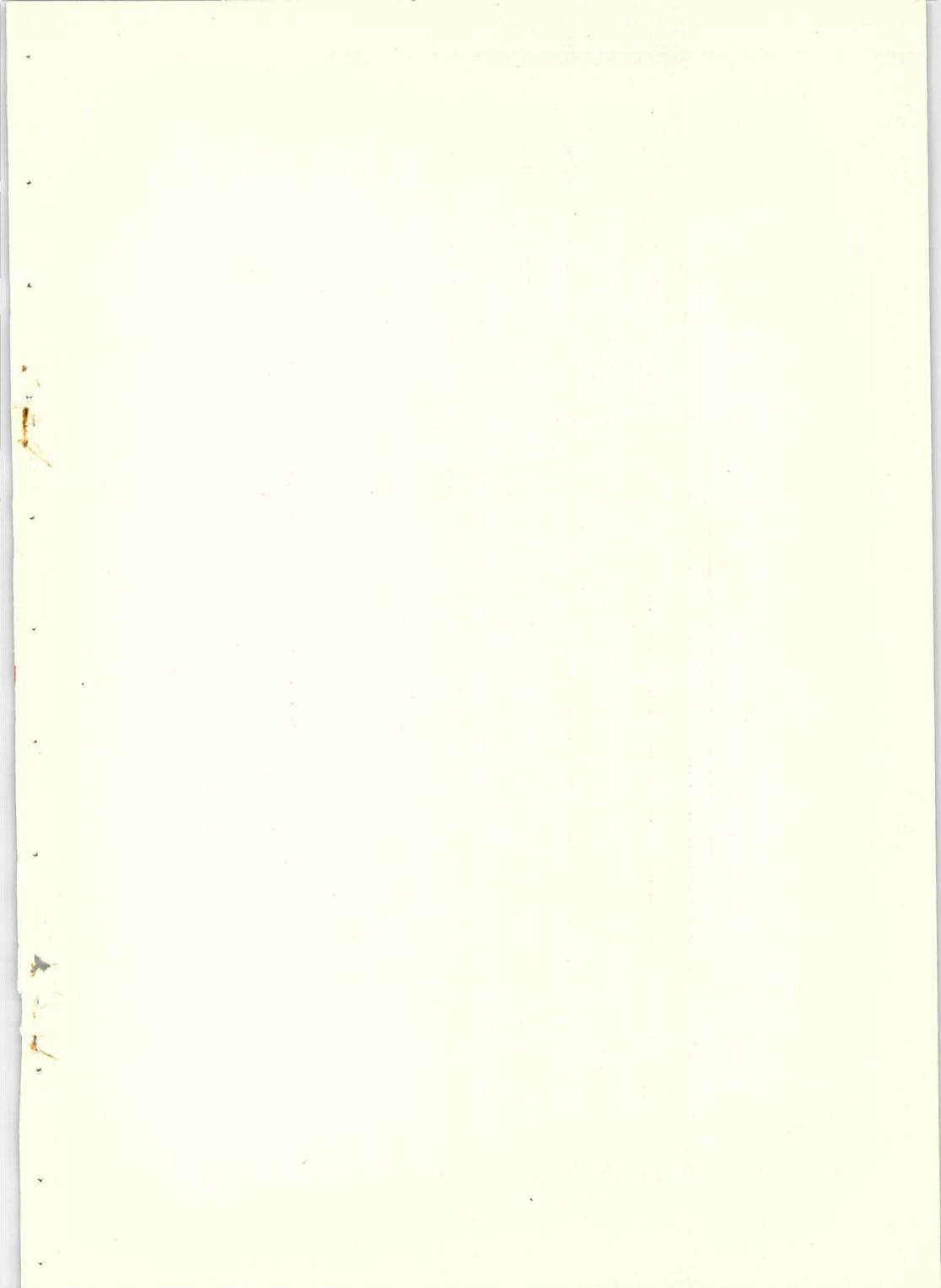
四拾參卷一號(昭和三十五年六月)

戰國前期における尙書の展開——孟子の引文を中心として………	松本雅明
中期蒙古語の諸問題——特に小林高四郎博士「元朝祕史の研究」と	
村山書簡との合致を中心として——(上)………	村山七郎
西晉の田制・賦税に關する近年の諸研究………	越智重明
補農書をめぐる諸研究(上)………	田中正俊
雲南省博物館編 雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告………	市川健二郎
金谷治著 秦漢思想史研究………	山田統
臺灣銀行經濟研究室編 十七世紀臺灣英國貿易史料………	生田滋
フォックス著 英國の提督と中國の海賊………	坂野正高
小野川秀美著 清末政治思想研究………	市古宙三
エンダコット著 香港史………	内田直作
李羅英著・朝鮮問題研究所譯 朝鮮民族解放闘争史………	山邊健太郎
松田壽男著 古代天山の歴史地理學的研究………	嶋崎昌

ド・フラーフ著	マタラム王スルタン・アグン（一六一三～一六四五）	永積昭
及びその先王（一六〇一～一六一三）の治世
アンサーリ著	ウツタル・ブラデーシュにおけるムスリム・カースト	高島稔
四拾參卷二號（昭和三十五年九月）
李朝における僧徒の貢納請負―世宗末・文宗朝を中心として―	田川孝三
中期蒙古語の諸問題―特に小林高四郎博士「元朝祕史の研究」と
村山書簡との合致を中心として―（下）	村山七郎
中共史研究ノート	衛藤藩吉
新中國における雲南史研究の動向	藤澤義美
河南省文化局文物工作隊編 鄭州二里岡	伊藤道治
栗原朋信著 秦漢史の研究	宇都木章
曹操論集―曹操論争よりみた中國「中世」史の理論―	好並隆司
江西省輕工業廳陶器研究所編 景德鎮陶器史稿	佐久間重男
ウェーリー著 中國人から見た阿片戦争	田中正美
リヴェンソン著 儒教國家中國とその近代の運命―知的連續性の問題―	近藤邦康
榎一雄著 邪馬台國	植村清二

- グローリエ著　ポルトガル及びイスパニア史料による
十六世紀のアンコールとカンボディア……………金山好男
- ラインスマ著　強制栽培制度の没落……………田中則雄
- グネー著　マラータ人の司法制度……………深澤宏
- 第廿五回國際東洋學者會議（モスクワ）に参加して……………山本達郎
- 四拾參卷三號（昭和三十五年十二月）
- 宋朝國史の食貨志と「宋史」食貨志との關係……………周藤吉之
- 十六世紀におけるパイ・イ語―漢語、漢語―パイ・イ語單語集の研究……………西田龍雄
- 唐宋時代を中心とする所謂「雇傭勞働」に關する諸研究……………菊池英夫
- ソ連におけるイラン史研究の近況……………本田實信
- セリュイス著　「方言」による漢代のシナ語方言……………河野六郎
- ペリオ著　マルコポーロ注釋　第一冊……………榎一雄
- 酒井忠夫著　中國善書の研究……………窪徳忠
- 胡繩武・金冲及共著　論清末の立憲運動……………菊池貴晴
- スカラピーノ著　日本―傳統主義と民主主義の中間―……………鳥海靖
- ミシュラ著　東インド會社の中央行政……………西村孝夫

エシン著 トルクスタン旅行記	護 雅 夫
四拾參卷四號(昭和三十六年三月)	
藩鎮體制と直屬州	日野 開三郎
元寇の研究―合戦篇―	山 口 修
滿州語學への二、三の寄與―上原久著「滿文滿洲實錄の研究」を中心として―	山 本 謙 吾
中央研究院近代史研究所の外交檔案	坂 野 正 高
中國科學院考古研究所編著 上村嶺號國墓地	上 原 淳 道
饒宗頤著 殷代貞卜人物通考	松 丸 道 雄
江蘇省博物館編 江蘇省明清以來碑刻資料選集	山 根 幸 夫
ブリットチャード著 十八世紀におけるイギリス・中國間の個人貿易	木 村 壽 賀 子
實藤惠秀著 中國人日本留學史	永 井 算 巳
ヴァーグ著 宣教師・中國人・外交官	山 本 澄 子
ヤング著 邪馬臺國の位置	坂 本 太 郎
イスカンダル著 ヒカヤット・アチエ	生 田 滋



昭和三十六年十二月二十一日印刷
昭和三十六年十二月二十五日發行

〔非賣品〕

財團法人東洋文庫年報

發行者 榎 一 雄

東京都文京區駒込上富士前町一四七
東京都千代田區九段二ノ一

印刷所 株式會社 開明堂

東京都文京區駒込上富士前町一四七

電話 (941) 〇二二九
〇六六八

發行所 財團 東洋文庫

(振替東京六七〇二三番)

